岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 253

特別史跡 旧閑谷学校

岡山県青少年教育センター閑谷学校整備事業に伴う確認調査

２０２１

岡 山 県 教 育 委 員 会

序

閑谷学校は、寛文10年（1670）に岡山藩主池田光政が全国的にも例をみない庶民の子弟教育のために創設した学校です。明治維新以降も閑谷学校の一角は、「閑谷精舎」、「閑谷黌」、「閑谷中学校」などと名称を変えながらも引き続き学校として利用されてきました。一方、国宝の講堂など貴重な文化財が数多く存在する国の特別史跡であり、「近世日本の教育遺産群」として日本遺産にも認定されるなど、域内は広く公開されて多くの県民に親しまれる場となっています。

また、教育の場としての伝統は、和気高校閑谷校舎を利用して昭和40年に設立された岡山県青少年教育センター閑谷学校へと引き継がれています。同センターは、その伝統と環境を保護するとともに健全な青少年の育成を目的として設立され、今日も多くの県民に利用されています。

今回の確認調査は、その岡山県青少年教育センター閑谷学校の整備事業に関わり、同センターが所在した閑谷学校学房地区の様子を明らかにするため実施いたしましたが、旧制中学校校舎の基礎とそれ以前の建物礎石や石列、溝、及び瓦を中心とする数多くの出土品がありました。とりわけ、旧閑谷学校の特徴の一つである備前焼瓦の窯跡が明らかとなったことは注目すべき成果であります。

本書が、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また旧閑谷学校の歴史に対する理解を深めるための資料として広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成に当たりましては、特別史跡閑谷学校顕彰保存会をはじめとする関係機関や多くの地元地区の皆様から御理解・御協力いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

令和３年３月

岡山県古代吉備文化財センター
所　長　小見山　晃

例　　言

1　本書は、岡山県教育委員会による岡山県青少年教育センター閑谷学校（以下、青少年教育センターとする）の整備計画に伴い、岡山県古代吉備文化財センターが実施した、特別史跡 旧閑谷学校の確認調査報告書である。

2　旧閑谷学校は、備前市閑谷740ほかに所在する。

3　確認調査は、昭和60年９月24日～11月12日（第１次調査）と昭和61年５月21日～７月２日（第２次調査）に実施し、岡山県古代吉備文化財センター職員 平井泰男が担当した。

4　調査面積は、500㎡（第一次調査：230㎡、第二次調査：270㎡）である。

5　本書の作成は、令和元～２年度に実施し、岡山県古代吉備文化財センター職員 弘田和司が担当した。

6　本書の編集及び執筆は、弘田が行った。

7　本書の遺構写真は平井が担当した。また、遺物の写真撮影については、江尻泰幸の援助と協力を得た。

8　特別史跡の指定名称は、「旧閑谷学校　附椿山石門津田永忠宅跡および黄葉亭」であるが、本書では通称の「旧閑谷学校」を用い、建物の名称は、講堂・聖廟・閑谷神社で統一した。

9　本遺跡の出土遺物・図面・写真は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325－３）において保管している。

10　本報告書作成にあたっては、（公財）旧閑谷学校顕彰保存会・赤井夕希子（備前市文化財管理センター）・安倉清博（備前市文化財保護審議会委員）・石井　啓（備前市教育委員会）・岡つばさ（備前市文化財管理センター）・重根弘和（岡山県立博物館）・乗岡　実（丸亀市教育委員会）・横山　定（岡山県立博物館）の各機関・各氏から、資料調査の協力並びに有益な御教示を得た。記してお礼申し上げる。

凡　　例

1　本書に用いた高度は海抜高である。

2　本書に用いた北方位は磁北である。

3　全体図、個別遺構図、遺物実測図には、それぞれ縮尺を明記している。土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があることを示す。

4　本書に収載した遺物図には、土製品：Ｃ、石製品：Ｓ、金属製品：Ｍの記号を番号の前に付した。

5　瓦には焼成法から燻瓦と備前焼瓦の２種類がある。燻瓦を黒瓦、備前焼瓦を赤瓦と呼称する。

6　遺物の観察表に記載した色調は、「新版標準土色帳」による。

7　関連遺跡分布図（第１図）は、国土地理院発行の1:50,000地形図「和気」を使用し、加筆した。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　序　説……1
　第１節　地理的環境と閑谷学校関連遺跡……1
　第２節　閑谷学校の歴史……3
　第３節　調査に至る経緯と経過……5
　第４節　報告書の作成について……7
第２章　確認調査の成果……9
　第１節　調査区の位置……9
　第２節　各トレンチの状況……9
　第３節　出土遺物について……22
第３章　総　括……62
遺物観察表……65
図　版
抄　録

図　目　次

第１図　遺跡の位置（1/2,000,000）と周辺の主要遺跡（1/60,000）…… 2
第２図　閑谷学校と調査地（1/1,500）…… 10
第３図　トレンチ配置図（1/1,000）…… 11
第４図　遺構全体図（1/100）…… 12
第５図　トレンチ柱状断面図（1/100）…… 13
第６図　Ｔ１・２平面図（1/200）、Ｔ２断面図（1/80）…… 14
第７図　Ｔ２土坑1（1/60）…… 14
第８図　Ｔ３平断面図（1/80）…… 15
第９図　Ｔ４平断面図（1/80）…… 16
第10図　Ｔ５平断面図（1/80）…… 17
第11図　Ｔ６平断面図（1/80）…… 17
第12図　Ｔ７平断面図（1/80）…… 18
第13図　Ｔ８平断面図（1/80）…… 19
第14図　Ｔ９平断面図（1/80）…… 20
第15図　Ｔ10平断面図（1/100）…… 21
第16図　国産磁器（1/4）…… 22
第17図　備前焼１（1/4）…… 23
第18図　備前焼２（1/4）…… 24
第19図　備前焼３（1/4）…… 25
第20図　瓦質土器（1/4）…… 25
第21図　軒丸瓦（黒瓦）１（1/4）…… 26
第22図　軒丸瓦（赤瓦）１（1/4）…… 27
第23図　軒丸瓦（赤瓦）２（1/4）…… 28
第24図　軒平瓦（黒瓦・赤瓦）１（1/4）…… 29
第25図　軒平瓦（赤瓦）１（1/4）…… 30
第26図　軒平瓦（赤瓦）２（1/4）…… 31
第27図　丸瓦（黒瓦）１（1/4）…… 32
第28図　丸瓦（黒瓦）２（1/4）…… 33
第29図　丸瓦（赤瓦）１（1/4）…… 33
第30図　丸瓦（赤瓦）２（1/4）…… 34
第31図　丸瓦（赤瓦）３（1/4）…… 35
第32図　丸瓦（赤瓦）４（1/4）…… 36
第33図　丸瓦（赤瓦）５（1/4）…… 37
第34図　平瓦（黒瓦）１（1/4）…… 38
第35図　平瓦（黒瓦）２（1/4）…… 39
第36図　平瓦（赤瓦）１（1/4）…… 40
第37図　平瓦（赤瓦）２（1/4）…… 41
第38図　平瓦（赤瓦）３（1/4）…… 42
第39図　平瓦（赤瓦）４（1/4）…… 43
第40図　平瓦（赤瓦）５（1/4）…… 44
第41図　平瓦（赤瓦）６（1/4）…… 45
第42図　平瓦（赤瓦）７（1/4）…… 46
第43図　平瓦（赤瓦）８（1/4）…… 47
第44図　平瓦（赤瓦）９（1/4）…… 48
第45図　平瓦（赤瓦）10（1/4）…… 49
第46図　平瓦（赤瓦）11（1/4）…… 50
第47図　平瓦（赤瓦）12（1/4）…… 51
第48図　平瓦（赤瓦）13（1/4）…… 52
第49図　その他の瓦１（1/4）…… 53
第50図　その他の瓦２（1/4）…… 54
第51図　その他の瓦３（1/4）…… 55
第52図　敷瓦（1/4）…… 56
第53図　支柱１（1/4）…… 57
第54図　支柱２（1/4）…… 58
第55図　棚板１（1/4）…… 59
第56図　棚板２（1/4）…… 60
第57図　棚板３（1/4）…… 61
第58図　硯（1/3）…… 61
第59図　銭貨（1/2）…… 61
第60図　丸瓦・平瓦釘孔の分類 …… 65

表　目　次

表１　閑谷学校年表（抄）…… 4
表２　文化財保護法に基づく提出書類…… 6
表３　「旧閑谷学校」埋蔵文化財調査一覧 …… 8
表４　丸瓦の分類…… 63
表５　刻印の分類…… 65

図 版 目 次

図版１
　Ｔ１　溝（南西から）
　Ｔ２　石垣（南から）
　Ｔ３　大正期造成土（南西から）
　Ｔ３　炭・焼土層、遺物出土状況（西から）
　Ｔ３　石垣（南西から）
　Ｔ４　旧制中学校校舎基礎（東から）
　Ｔ４　暗渠・溝（南から）
　Ｔ５　炭・焼土層（南東から）
図版２
　Ｔ６　礎石ほか（西から）
　Ｔ７　全景（南から）
　Ｔ７　Ｐ１（西から）
　Ｔ８　全景（北西から）
　Ｔ９　石列・焼土面（南から）
　Ｔ10　石垣・暗渠・石列（南から）
　Ｔ10　水路・暗渠ほか（南から）
　Ｔ10　井戸（西から）
図版３　備前焼・瓦質土器
図版４　瓦１
図版５　瓦２
図版６　瓦３
図版７　瓦４
図版８　棚板・支柱
図版９　敷瓦・硯・銭貨・窯壁片
図版10　瓦の刻印

本文写真目次

１　調査前の状況…… 7
２　調査地の現況…… 7

第１章　序　説

第１節　地理的環境と閑谷学校関連遺跡

閑谷学校が位置する岡山県東南部（備前地域の東半部）は、岡山平野の北東端につながる標高200ｍから400ｍの丘陵や山地を主とする地域である。岡山県北部の津山盆地周辺に端を発し、備前地域のほぼ中央を南北に流走する吉井川とその支流で兵庫県境より西へ向かって流れ、和気盆地で吉井川と合流する金剛川流域の氾濫平野と山間部の谷底平野に集落が形成され、道路などの交通網もそれら河川に沿って、あるいは谷底平野を結ぶように発達していった。

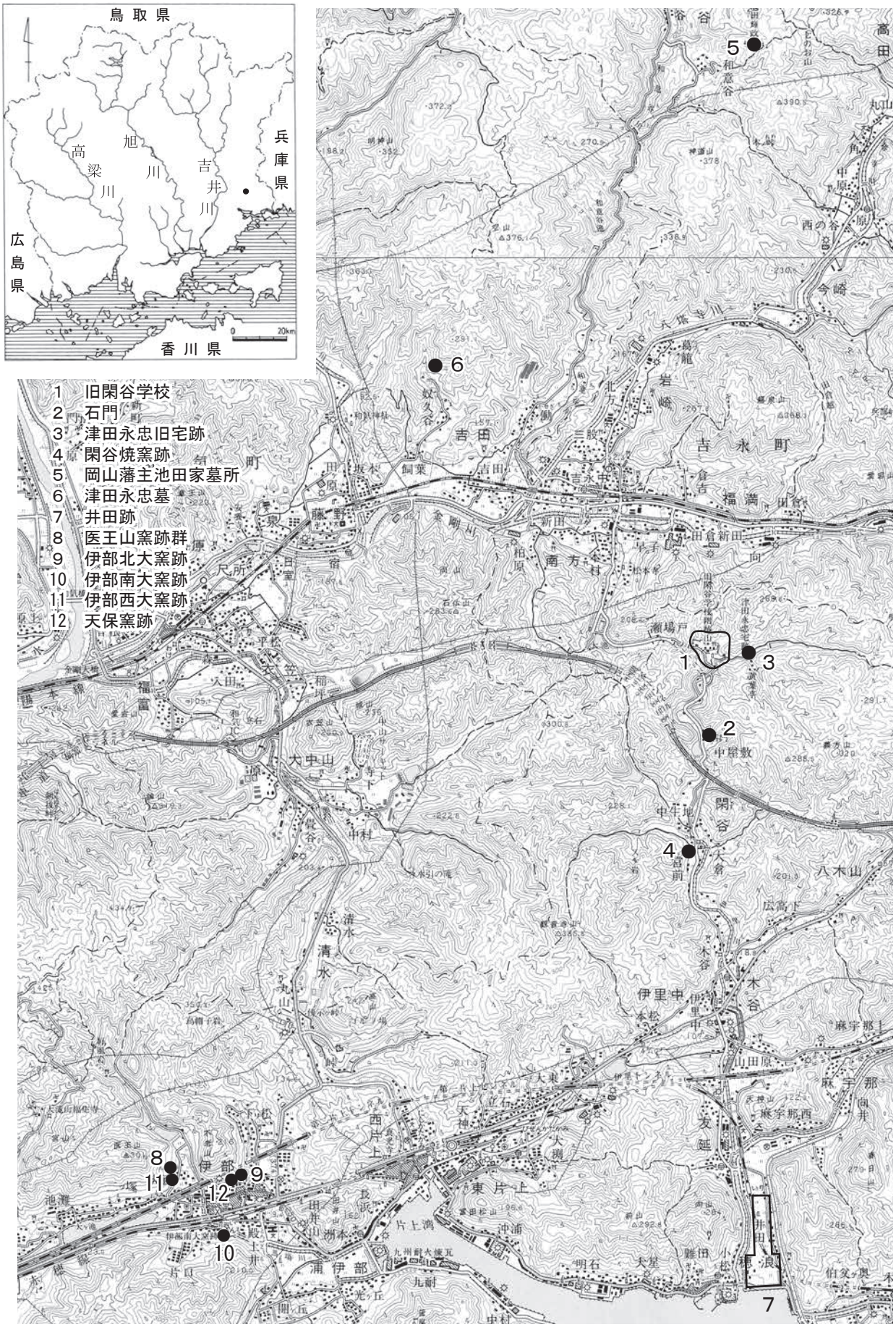
閑谷学校（１）の位置は、学校建設を命じた岡山藩主池田光政が、「山水閑静にして読書講学」にふさわしい場所として選定した。金剛川が形成する平野からさらに奥まった場所にあり、東・西・北を山に囲まれ、東西方向から流下する小河川（閑谷川）の合流部にあたる。閑谷学校の南で合流した小河川は、南流するにつれ伊里川へと流れを変え、その先は片上湾へと注いでいる。

石門（２）は、講堂から南へ約１㎞ほど離れたところに位置する、かつての閑谷学校の校門である。石門は、頭部を擬宝珠型にした２本の石柱で、現在は高さ１ｍほどが地上に露出しているのみであるが、昭和58年度に実施した環境整備事業に伴う石門跡発掘調査によって、もともとの高さは3.80ｍ、直径が0.63ｍであったこと、基部には柱を支える約1.2ｍ四方の沓石が存在することが確認できた。元禄10年（1697）の建立当時は、幅員２ｍあまりの道を挟んでこの石門が立ち、その両側には垣が設けられていたようである。

津田永忠旧宅跡（３）は、講堂付近から、閑谷川沿いを東におよそ400ｍの場所にある。石垣を積み平坦地な屋敷地を造っている。津田永忠は、藩主池田光政のもと、和意谷池田家墓所の造営を皮切りに、百間川の開削や新田開発、閑谷学校の建設、後楽園の造営など当時の岡山藩が実施した土木工事のほぼすべてに携わった。寛文12年（1672）に光政が隠居すると、翌延宝元年（1673）には閑谷の地に居を移し、学校建設に専念した。津田永忠旧宅跡は、昭和29年（1954）に旧閑谷学校附椿山石門津田永忠宅跡および黄葉亭として特別史跡に指定されている。隣接する黄葉亭は学校訪問の応接の場として、文化10年（1813）に設けられた茶室である。

閑谷焼窯跡（４）は、石門よりさらに南約1.2㎞、福神社西の民家背後の山腹にある。宅地造成により１号窯は窯本体の大部分が切り崩されている。２号窯は、天井が陥没しているほかは、ほぼ完全に遺存しており、規模は長さが12ｍ、幅は３ｍ、高さは３ｍである。３号窯も本体はほぼ全体が遺存するが、焚口以下は宅地造成により破損している。規模は長さが10ｍ、高さは３ｍ、幅が３ｍである。さらに、２号窯の南約40ｍの地点にも瓦が大量に散布しており、瓦窯がもう１基存在する（４号窯）可能性が高い。これらの窯を利用して、祭器、茶器、細工物など、閑谷焼と呼ばれる施釉陶器が焼成されている。揚羽蝶紋軒丸瓦など各種瓦類、窯道具、聖廟の敷瓦が確認できる。

岡山藩主池田家墓所附津田永忠墓（５・６）は、岡山藩主池田家の墓所で、藩祖池田輝政の「一のお山」を中心に、７つの「お山」で構成された儒式の墓地（５）である。初代藩主である池田光政が、



第１図　遺跡の位置（1/2,000,000）と周辺の主要遺跡（1/60,000）

京都妙心寺にあった祖父輝政と父利隆の墓所の改葬を決意し、寛文５年、家臣の津田永忠に命じて備前国内での墓所選定の作業を行ない、和気郡脇谷村を最終候補地に選定してこの地を和意谷敦土山と名付けた。寛文７年より墓地の造営を開始し、寛文９年に墓域の工事が完了した。近在する津田永忠墓（６）もあわせて国史跡に指定されている。

井田跡（７）は、閑谷学校の南約８㎞の伊里川河口付近（現在の備前市穂浪）にあたる。井田とは、儒教が理想とする中国周の時代の地割り租税制度で、一里四方の田を９等分して、周囲の８つの田は８家に分配し、中央の区画を公田とするものである。現地を視察に訪れた藩主池田光政が、津田永忠に命じてつくらせ、寛文11年に完成した。宝永７年には南半の下井が学田となり、年貢は学校の経営に用いられることとなった。

備前陶器窯跡群（８～12）は、備前市伊部地区位置する国指定史跡で、医王山窯跡群（８）、伊部北大窯跡（９）、伊部南大窯跡（10）、伊部西大窯跡（11）の４か所からなる。医王山窯跡群は、平安時代から室町時代の窯跡である以外は、室町時代後期以降、大量生産の必要性とともに成立した共同窯である。江戸時代中期に各地で陶磁器が焼かれるようになると備前焼の販売は次第に減少し大量生産の必要性がなくなった。また、藩の保護も次第に減少した。そして、江戸時代後期の天保年間（1830～1843年）に天保窯（12）と呼ばれる小型で効率の良い融通窯ができると、大窯は衰退し幕末に終焉を迎えた。

第２節　閑谷学校の歴史

閑谷学校は、寛文10年に岡山藩主池田光政が学校奉行津田永忠に命じて、領内の村役人層を中心とする庶民の子弟教育のため、和気郡木谷村延原に創設した学校の遺構である。その際に、地名も今日の「閑谷」と改められた。

寛文12年には学房、延宝元年には講堂、延宝２年には聖廟が完成したが、これら創建期の建物は瓦を用いない簡素な建物であった。天和２年の光政の死後もその意志を継いだ津田永忠によって学校整備と改築は続けられた。その後、永忠が郡代として郡政改革にあたった時期を経て、元禄10年に工事が再開された。元禄11年には講堂の改築が始まり、元禄14年には釣屋、飲室、玄関、小斎を付設した現在の講堂が完成し、さらに校地の周囲には石塀が廻らされた。これら改築された建物の屋根は小斎を除き備前焼の瓦をもって葺かれている。元禄15年には東に隣接して光政の遺髪、爪歯を納めた椿山墓所を造営、学房と聖廟や講堂との間に火除山を設けるなど、着工以来30余年の歳月をかけてようやく完成した。幕末の弘化４年には、学房が失火により消失しているが、火除山によって東側の建物群は被害がなく、同年中には学房も再建されている。

明治２年の版籍奉還や明治３年の藩政改革によって閑谷学校は廃校となり、敷地と建物は政府の所有となった。明治６年には閑谷精舎として再開されたが、明治10年に再び閉校となった。明治14年には、旧岡山藩有志らが閑谷学校再興を唱えて閑谷保黌会が結成され、閑谷黌を開校した。その後は学制変更により私立閑谷中学校となり、戦後は県立閑谷高等学校を経て県立和気高等学校閑谷校舎となった。そして、創学290年を迎えた翌年の昭和39年、閑谷校舎の閉校によって学校としての歴史を閉じることとなった。ただし、昭和40年には高等学校の校舎を一部改築して青少年教育センターを設置し、平成３年の新館建設まで続いた。なお、同センターは現在、公益財団法人 旧閑谷学校顕彰保存

会によって管理・運営が行われている。

このような歴史を持つ閑谷学校は、大正11年に国の史跡に指定され、昭和13年には講堂、聖廟などの建物が国宝に指定された。戦後に入ってからは、昭和25年に、講堂などが国の重要文化財となり、昭和29年に国の特別史跡に指定された。昭和46年には、国宝・重要文化財の「閑谷黌」が、現在の「旧閑谷学校」へと名称が変更されることとなり、平成13年には閑谷資料館が国の登録有形文化財に指定され、続いて平成14年には、閑谷学校関連資料4,041点が重要文化財に指定された。さらに、平成27年には、「近世日本の教育遺産群」として日本遺産にも認定されている。

表１　閑谷学校年表（抄）

和　暦	西　暦	出　　来　　事
寛文６年	1666	池田光政、和気郡木谷村付近を訪れ学校の建設を内命する
寛文10年	1670	津田永忠に学校設立を命じる。地名を閑谷に改める
寛文12年	1672	池田光政が隠居し、綱政が藩主に。飲室・学房が完成する
延宝２年	1674	聖堂が完成する
延宝５年	1677	講堂の茅葺きを瓦葺きに改める
天和２年	1682	池田光政死去
貞享元年	1684	新聖堂（聖廟）が完成する
貞享３年	1686	芳烈祠（閑谷神社）を建設する
元禄10年	1697	石門が完成する
元禄14年	1701	新講堂が完成し、玄関や習芸齋が付けられる。石塀が完成する
元禄15年	1702	椿山（池田光政の供養塚）が造営される
宝永元年	1704	津田永忠隠居し、閑谷に移住する
弘化４年	1847	失火により学房延焼。同年学房上棟
明治３年	1870	閑谷学校廃止。学房や邸宅を壊す
明治５年	1872	学房・校厨を修繕
明治６年	1873	山田方谷を迎え閑谷精舎として再開
明治10年	1877	土地・建物が池田家に譲渡される
明治17年	1884	閑谷黌開校
明治36年	1903	閑谷中学校に改称
明治38年	1905	新校舎（現在の資料館）が完成
大正10年	1921	岡山県立閑谷中学校になる
大正12年	1923	校舎２棟・講堂建築
昭和３年	1928	図書館・職員住宅２棟建設（愈奮堂を除き古い建物は消滅）
昭和23年	1948	岡山県立閑谷高等学校となる
昭和24年	1949	岡山県立和気高等学校閑谷校舎となる
昭和39年	1964	閑谷校舎が廃校になる
昭和40年	1965	岡山県青少年教育センター閑谷学校が設立される
平成３年	1991	青少年教育センターが移転。旧本館が資料館となる

第３節　調査に至る経緯と経過

青少年教育センターは、江戸時代に岡山藩が主に庶民の子弟教育の場として設立した閑谷学校の環境とその伝統を保護し活用を図るとともに、集団生活を通じて心身ともに健全な青少年を育成することを目的として、昭和40年に開設された。

その施設は、明治38年に建設され、築100年にも及ぶ旧制閑谷中学校の本館をはじめとして建物の老朽化が著しく、かつ手狭となっており、その運営に支障をきたし始めていた。そのため、その立地条件を生かした特色ある施設の運営ができるように、かつ特別史跡「旧閑谷学校」との調和のとれた施設整備事業を行う必要性が生じていた。その整備計画とは、閑谷学校の地において創学の精神を受け継ぎ、かつ時代の要請にそえる新たな青少年育成施設を敷地内（6,509㎡）に建設することで、藩校当時もしくは旧制閑谷中学校を復元した宿泊研修施設とするものであった。

国の特別史跡である「旧閑谷学校」内での施設整備の実施に当たっては、文化財保護法に基づく手続きが必要であり、文化財保護法第80条第１項に基づき、岡山県知事名で文化庁長官あてに現状変更を申請し、昭和60年９月10日付、昭和61年５月13日付で許可された。そこで岡山県教育委員会としては、昭和60・61年度の２か年にわたり、戦前の閑谷中学校舎や江戸時代の閑谷学校学房遺構の存在を確認するための確認調査を実施することにした。

埋蔵文化財の確認調査は、岡山県古代吉備文化財センターの職員１名が担当した。調査時点では、本館以外にも集会室、食堂、倉庫などの建物が存在しており、それらに影響を及ぼさないようにトレンチを設定した。昭和60年度（第１次）の調査では、幅２ｍのトレンチを６か所設定して調査を行ったが、大正12年完成の旧閑谷中学校建設時の造成土が厚さ１ｍ以上にも及ぶ事が判明し、江戸時代の遺構面までは達することができず、十分な成果を得られなかった。

昭和61年度には、文化庁記念物課 仲野　浩主任調査官の現地指導を受けて、大正期以前の遺構や旧地形の把握をすべく新たなトレンチも設定し、調査を行うこととなった。この昭和61年度（第２次）の調査では、前年度のトレンチも利用しながら４か所のトレンチを設定し、前年度とあわせた都合10か所のトレンチ調査を行い、旧制閑谷中学校の建物基礎及び江戸時代の学房跡の遺構の存在確認につとめた。なお、旧制中学校の建物基礎を残しながらの調査であったため、下層遺構の追求は限定的なものとならざるをえなかった。

検出した遺構のうち一部の土坑、ピット、炉（いずれも近代）については、詳細な調査を行っているが、近世と思われる遺構は完掘せず、個別の平・立面図は作成していない。遺構図の作成は、50～100分の１の平板測量を基本として、国土座標を基にした測量は行っていない。遺構の撮影は、35㎜のポジ・カラー・白黒フイルムが中心である。

確認調査の結果、旧制中学校の建物位置を把握し、学校建設時の造成土や鍛冶炉跡を確認した。江戸時代の学房跡遺構の全容把握については、必ずしも十分ではなかったが、江戸時代に遡る遺構と遺物、とりわけ焼土面の存在や窯壁片、窯道具の出土などから備前焼瓦窯跡の存在が明らかとなった。

青少年教育センターは、新館の建設場所を現在の位置へと変更することになり、旧館周辺の地下遺構は保存されることになった。

表２　文化財保護法に基づく提出書類

埋蔵文化財発掘通知（法第98条の２）

番号	文書番号 日　　付	周知・ 周知外	種類及び名称	所在地	面積 （㎡）	原因	報告者	担当者	期間
1	教文埋第3605号 S60.9.19	周知	特別史跡 旧閑谷学校	備前市閑谷740	332	教育施設整備	岡山県教育長 宮地暢夫	平井泰男	S60.9.24 ～10.31
1	教文埋第1580号 S61.5.30	周知	特別史跡 旧閑谷学校	備前市閑谷740	275	教育施設整備	岡山県教育長 宮地暢夫	平井泰男	S61.5.21 ～6.30

発掘調査の体制

昭和60年度

岡山県教育委員会

教 育 長　　宮地　暢夫

岡山県教育庁

教育次長　　肥塚　　稔

教育次長　　森　　綾夫

文化課

文化課長　　松元　昭憲（～11月）

　　高橋　誠記（12月～）

課長代理　　逸見　英邦

課長代理　　吉本　唯弘

埋蔵文化財係長

　　正岡　睦夫

主　　任　　遠藤　勇次

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　松元　昭憲（～11月）

　　高橋　誠記（12月～）

次　　長　　橋本　泰夫

〈総務課〉

課　　長　　佐々木　清

主　　任　　遠藤　勇次

主　　任　　花本　静夫

〈調査課〉

課　　長　　河本　　清

文化財保護主事

　　平井　泰男（調査担当）

昭和61年度

岡山県教育委員会

教 育 長　　宮地　暢夫

岡山県教育庁

教育次長　　石井　敏雄

教育次長　　森　　綾夫

文化課

文化課長　　高橋　誠記

課長代理　　逸見　英邦

埋蔵文化財係長

　　正岡　睦夫

主　　任　　仁宮　秀博

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　橋本　泰夫

〈総務課〉

課　　長　　佐々木　清

主　　査　　遠藤　勇次

主　　任　　花本　静夫

〈調査課〉

課　　長　　河本　　清

文化財保護主事

　　平井　泰男（調査担当）

第４節　報告書の作成について

確認調査の終了後に出土遺物の水洗及び一部注記作業と遺物の抽出作業などを行っているが、遺物の接合及び実測作業、図面・写真整理、台帳類の整備などは十分に実施することができず、到底調査報告書の刊行までには至らなかった。調査の成果の一部については、トレンチの平・断面図や写真などを、『岡山県埋蔵文化財報告』17 岡山県教育委員会 1987年や『岡山県埋蔵文化財報告』18 岡山県教育委員会 1988に掲載している。その後も『特別史跡旧閑谷学校保存管理計画』岡山県教育委員会 2009に掲載し、調査概要を報告しているものの、報告書の作成作業自体は、昭和63年度から本格化した山陽自動車道建設に伴う発掘調査をはじめとする大規模発掘調査への職員の集中配置とそれに伴う整理作業の一時中断等によって、中断を余儀なくされた。

その後、令和元年度から再び未刊行報告書の整理作業を開始することとなったが、岡山県青少年センター閑谷学校整備事業に伴う確認調査は、トレンチ調査とはいえコンテナ78箱にも及ぶ遺物の出土があり、先ずそれらの注記や接合作業を行う必要があった。さらに、写真や図面が未整理のままの状態で30年以上が経過していること及び発掘から発掘終了後の整理の過程で図面や遺物の記載に混乱が生じていたことなどから、当該年度内に整理作業を終えて、調査報告書を刊行することは困難な状況であった。そこで、令和元年度に整理作業を開始するものの、本格的な作業は令和２年度に行い報告書刊行を目指すこととした。

令和元年度には、職員１名が『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』252の編集、執筆と併行して整理作業を開始した。現場図面の内容の確認から図面・写真台帳の作成、遺構原図のデジタルトレース作業、撮影フイルムの注記作業とデジタル化、遺物台帳の作成と遺物の抽出作業、一部遺物の接合作業といった整理の基礎的作業から取りかかり、年度末には実測作業へと進めていった。

令和２年度には、前半期を中心に遺物の実測作業からトレース作業を本格的に進め、併行して写真撮影（６Ｄカメラによるデジタル写真）を行った。後半期には、報告書編集作業と文章執筆を進め、令和２年度末に確認調査報告書の刊行にこぎ着けた。

写真１　調査前の状況

写真２　調査地の現況

報告書作成の体制

令和元年度

岡山県教育委員会

教 育 長　　鍵本　芳明

岡山県教育庁

教育次長　　高見　英樹

文化財課

課　　長　　大西　治郎

参　　事（文化財保存・活用担当）

横山　　定

総括副参事（埋蔵文化財班長）

柴田　英樹

主　　幹　　河合　　忍

主　　任　　原　　珠見

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　向井　重明

次　　長（総務課長事務取扱）

佐々木雅之

参　　事（文化財保護担当）

大橋　雅也

〈総 務 課〉

総括主幹（総務班長）

甲元　秀和

主　　任　　東　　恵子

主　　任　　多賀　克仁

〈調査第三課〉

課　　長　　弘田　和司（整理担当）

令和２年度

岡山県教育委員会

教 育 長　　鍵本　芳明

岡山県教育庁

教育次長　　高見　英樹

文化財課

課　　長　　小林　伸明

参　　事（文化財保存・活用担当）

大橋　雅也

総括参事（埋蔵文化財班長）

柴田　英樹

主　　幹　　河合　　忍

主　　事　　九冨　　一

岡山県古代吉備文化財センター

所　　長　　小見山　晃

次　　長（総務課長事務取扱）

佐々木雅之（～10月14日）

参　　事（文化財保護担当）

亀山　行雄

〈総 務 課〉

課　　長　　甲元　秀和（10月15日～）

総括副参事（総務班長）

甲元　秀和（～10月14日）

総括主任（総務班長）

多賀　克仁（10月15日～）

主　　任　　多賀　克仁（～10月14日）

主　　任　　井上　裕子

〈調査第三課〉

課　　長　　弘田　和司（整理担当）

表３「旧閑谷学校」埋蔵文化財調査一覧

調査目的	調査種別	調査年度	報告No.※	面積（㎡）	担当者	備考
青少年教育センター整備計画	確認調査	S60年度	16	230	平井泰男	本報告書に収載
青少年教育センター整備計画	確認調査	S61年度	17	270	平井泰男	本報告書に収載
暗渠排水施設の把握	確認調査	H12年度	31	120	重根弘和	瓦・備前焼等出土
防犯施設整備	立会調査	H21年度	40	116.8	米田克彦	瓦・排水管・備前焼等出土
火災報知器設置	立会調査	H16年度	35	30	石井啓（備前市）・小林利晴	
石塀保存修理計画	確認調査	H24年度	43	1.8	石田為成	
石塀保存修理計画	確認調査	H25年度	44	2.1	石田為成	
石塀保存修理計画	確認調査	H26年度	45	1.7	石田為成	
泮池修繕及び椿山練塀修復	確認調査	H28年度	47	5.5	杉山一雄	
聖廟排水管敷設	立会調査	H29年度	48	6.4	上栫　武	

※『岡山県埋蔵文化財調査報告』

第２章　確認調査の成果

第１節　調査区の位置

閑谷学校は、元禄14年の新講堂の建設や石塀の完成をもってほぼ現在の姿が整った。狭義の閑谷学校は、周囲を堅牢で優美な石塀（総延長は764.85ｍ）で囲まれた範囲とその全面に拡がる泮池を指す。校門の両端から延びる石塀で限られた学校敷地は、北半分は山腹斜面をも取り込む形となっており、敷地の中央やや西よりでは、丘陵斜面から馬蹄形に延びた防火壁の役割を持つ人工の築山「火除山」によって敷地は２分されている。その火除山の東側には講堂を始め聖廟、閑谷神社など儀礼的な空間が展開する。今回の調査地であり岡山県青少年教育センターが所在した火除山の西側は、江戸期には学房（寄宿舎）を始めとして、吏舎、習字所、校厨、客舎、米蔵などの多くの建物が存在した場所である。出火しやすい生活空間である学房の東に人工の火除山を置くことによって、講堂をはじめとした儀式空間への延焼を防いだのである。

学房地区は江戸時代末の弘化４年に延焼するが、直ちに再建されると明治期に入っても学校として利用され、その後も増改築された建物は、昭和39年まで学校の校舎として利用された。

調査時には、青少年教育センターの集会室・食堂・倉庫といった建物が存在しており、調査区はそれらに影響を及ぼさないよう、資料館の東側にある３段の平坦面（上段テラス・中段テラス・下段テラス）及び資料館北側の平坦面（上段テラス）に計10か所のトレンチ（第２・３図）を設定した。

第２節　各トレンチの状況

調査地は、大正10年から大正12年の造成工事によって谷部を三段の平坦面に造成し、ほぼ現在の地形ができあがっている。中段テラスから下段テラスは比高差が3.4ｍあまりで現在は石垣となっているが、造成前の旧地形も大きく変わらず、急な斜面であった（第５図）。大正10年以前の段階は、造成土直下の面から地山面までの間、南北方向に比高差が７ｍ程ある谷状の地形に対し、地山を掘削して５～６の平坦面を設け、校舎あるいは客舎、吏舎といった建物を配していたようである。ただし、石垣を伴う段の形成はＴ１の中間地点のみであった。また、学房地区を東西に区切った丘陵も大正10年の造成工事によって削り取られたと思われる。

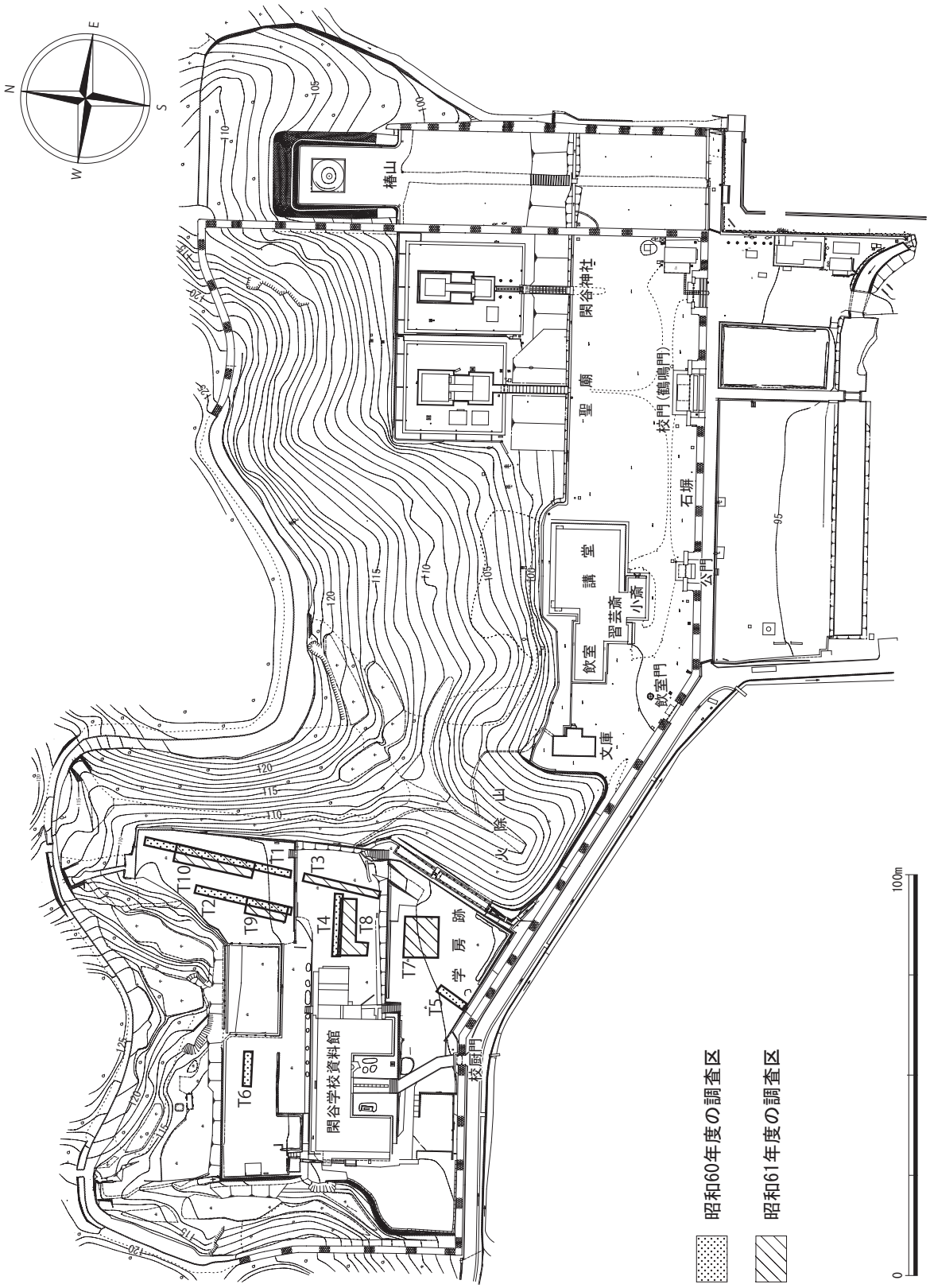
各トレンチで地山面を検出しているが、そこに至るまでの堆積層、遺構はさかのぼっても幕末から江戸後期の遺構と推定できる。それ以前の学校設立期の明確な遺構は、瓦窯跡床面の可能性が高い焼土面が存在するが、建物遺構は確認していない。

以下、各トレンチの概要は、『岡山県埋蔵文化財報告』16 1986 岡山県教育委員会、『岡山県埋蔵文化財報告』17 1987 岡山県教育委員会及び『特別史跡旧閑谷学校保存管理計画書』岡山県教育委員会2010の記述を基本的に転載し、該当か所は「」内に太字で表している。それ以外の部分は、整理担当者が原図や写真、出土遺物を元にして記述している。

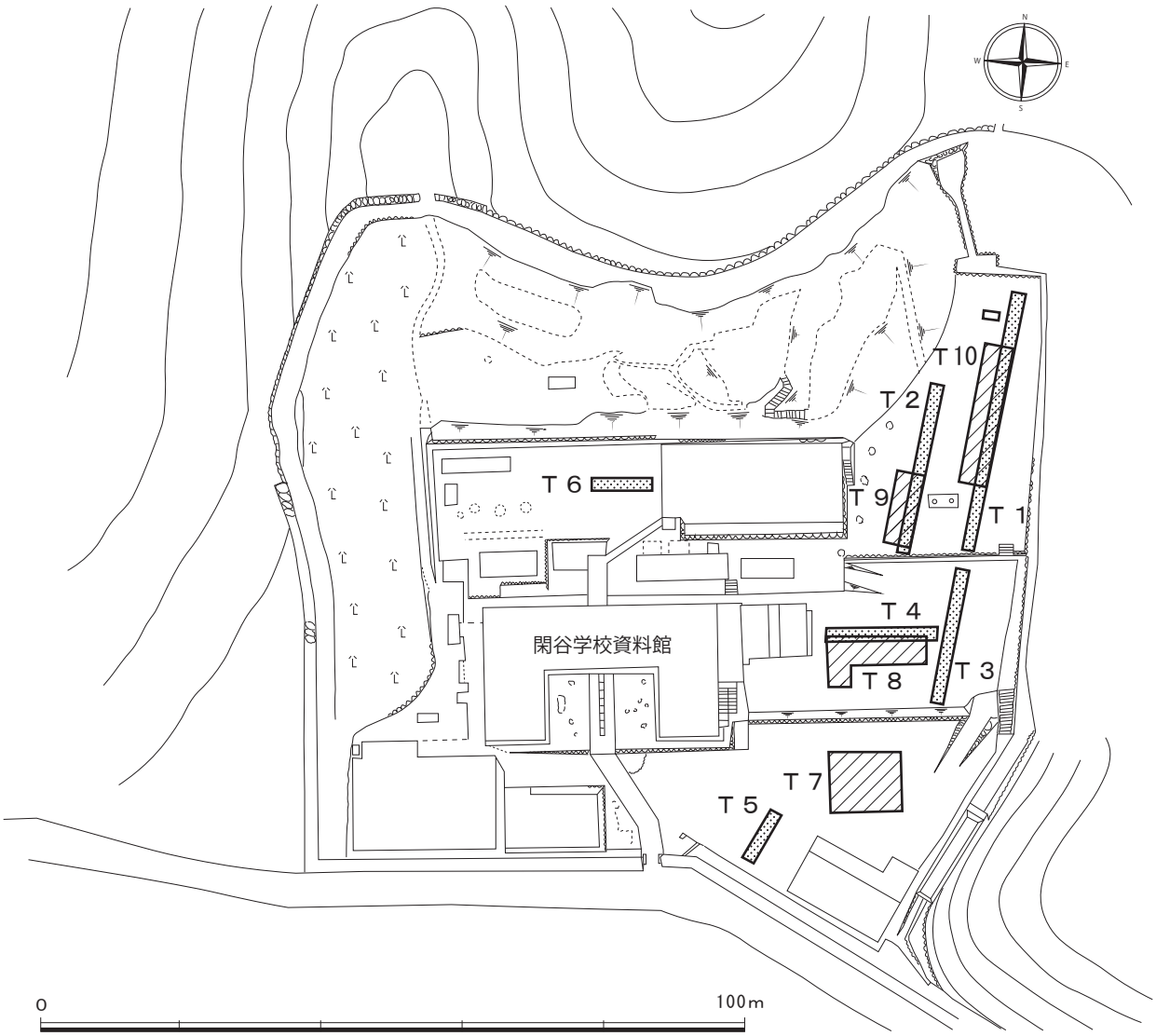
Ｔ１（第３・４・６図、図版１）

上段テラスの東に設定した、長さ37ｍ、幅２ｍのトレンチである。

「Ｔ１の北部分において検出した溝は、ほぼ東西方向に走り、幅は約４ｍ、深さは約90㎝である。溝の中からは大量の土器・陶磁器・瓦などが出土した。時期は明確ではないが、層位から大正10年以前



第２図　関谷学校と調査地（1/1,500）



第３図　トレンチ配置図（1/1,000）

のもので（土層から）、江戸時代のものとは考えられず（遺物から）、明治時代後半から大正時代のものと考えられる。また、南端では、大正10年以前の地形の下がりを確認した。」

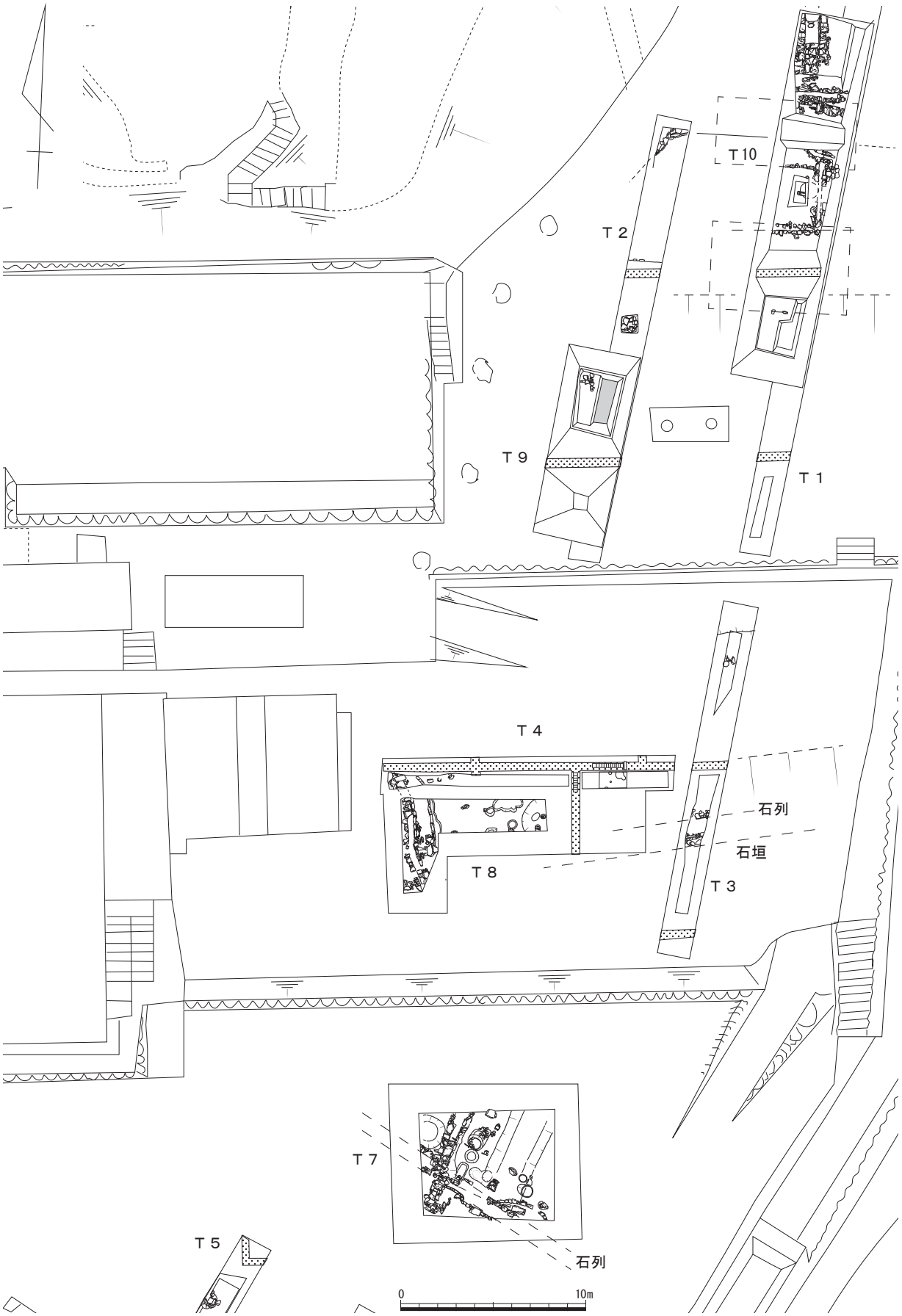
石垣は明治期のもので、それが大正期の造成土で埋没した後の裏込め部に溝が掘られている。土層断面からも溝が造成土を切っている。遺物は、瓦と肥前・瀬戸産の磁器が８箱あり、明治期のものが多いが、昭和期に含まれるものもある。瓦では、講堂の丸・平瓦で大形の破片が目につく。明治16・17年頃の図面では、すでにこの辺りに建物はなく現在に至っている。遺物の量や内容から判断して、一括して投棄された、廃棄土抗の可能性がある。

Ｔ２（第６・７図、図版１）

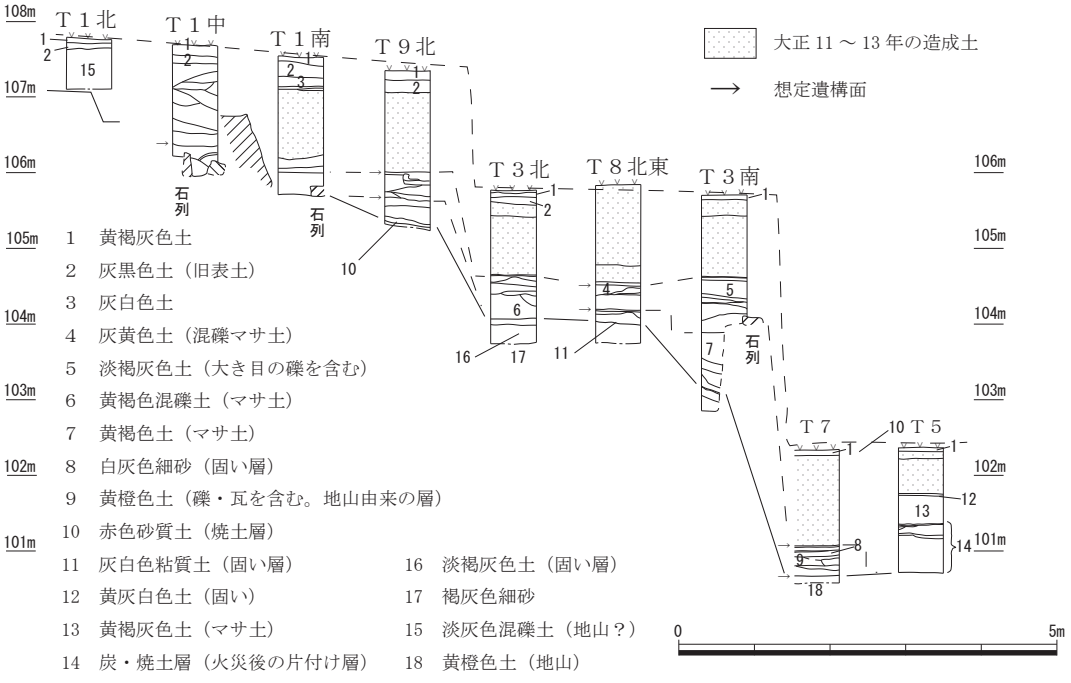
Ｔ１の西側に併行して設定した、南北長37ｍ、東西幅２ｍのトレンチである。

「Ｔ１の北部分及びトレンチ２の北部分において、石垣を検出した。Ｔ１ではこの石垣は高さ１ｍほど残存していた。この２か所の石垣は同一のものと考えられる。時期は、層位から大正10年より古く、明治時代かもしくは江戸時代と考えられる。」

Ｔ１から続く石垣は、Ｔ２の中で南西方向に屈曲する。現在は滅失しているが、Ｔ２の西側には、



第４図　遺構全体図（1/100）



第５図　トレンチ柱状断面図（1/100）

北側の丘陵から派生する小尾根が存在し、かつては学房地区を東西に隔てていた。石垣はその丘陵裾を巻くように築かれたと思われる。土抗は、平面形が方形で、長軸102㎝、短軸94㎝、深さ65㎝、検出面では石を円形に敷並べ、２層で15～30㎝の石が詰まっていた。

出土遺物は、コンテナ２箱で、瓦と陶磁器がある。

Ｔ３（第８図、図版１）

中段テラスに設定した南北19ｍ、東西２ｍのトレンチである。

「Ｔ３の南部分において、大正10～12年の造成土の上面において、鍛冶炉２基を検出した。

トレンチの北部分において、現地表からマイナス約160～190㎝で厚さ10～20㎝の焼土層を検出したが、この層中からは備前焼の窯道具・窯壁が出土した。これらから、周辺に備前焼の窯跡（おそらく江戸時代の瓦窯）が存在していた可能性が強いと考えられる。

また、南部分では石垣を確認した。時期は明確ではないが、明治から江戸時代のものと考えられる。また、大正10年段階の地形の下がりを確認した。」

造成土下は、２～10㎝程の層を互層に敷いた整地土で、その下層の43層（黄褐色土）下の44層は多くの窯壁片や窯道具を含む。この44層下の50層は堅く締まり、遺構面と考えられる。窯に近いたたき土間であろうか。

調査区中央のコンクリート基礎より南側では、地形が急激に南へと傾斜する。その斜面に堆積した45層（焼土層）は、層の厚さが１～２㎝程で、27度の傾斜角を持つ。石列や石垣は、この層よりも上で検出した。石垣は、東西に延びる石段状の遺構で、石を三段に積み上げる。鍛冶炉は、北側が直径15㎝程の円形、南側は長軸35㎝、短軸20㎝程の隅丸長方形で、ともに炉の内側には炭が堆積する。南側炉の辺りは、約２ｍ四方の範囲で地面が焼け、周囲に炭が散布していた。大正期の造成土上にあり、校舎建設時のものであろう。

瓦、窯道具、備前焼、ガラス瓶、制服のボタンなどコンテナ５箱と窯体片が約７kgが出土した。

Ｔ４（第９図、図版１）

Ｔ３の西側で直交方向に設定したトレンチで、南北が２ｍ、東西は16ｍである。

「現表土からマイナス５～20㎝において、コンクリートの建物基礎を検出した。Ｔ４においては、コンクリートの上にレンガが積まれていたが、これは大正12年に完成した閑谷中学校の校舎の基礎に当たると考えられる。柱穴・暗渠・溝の側石を検出している。時期は明確ではないが、明治あるいは江戸時代と考えられる。」

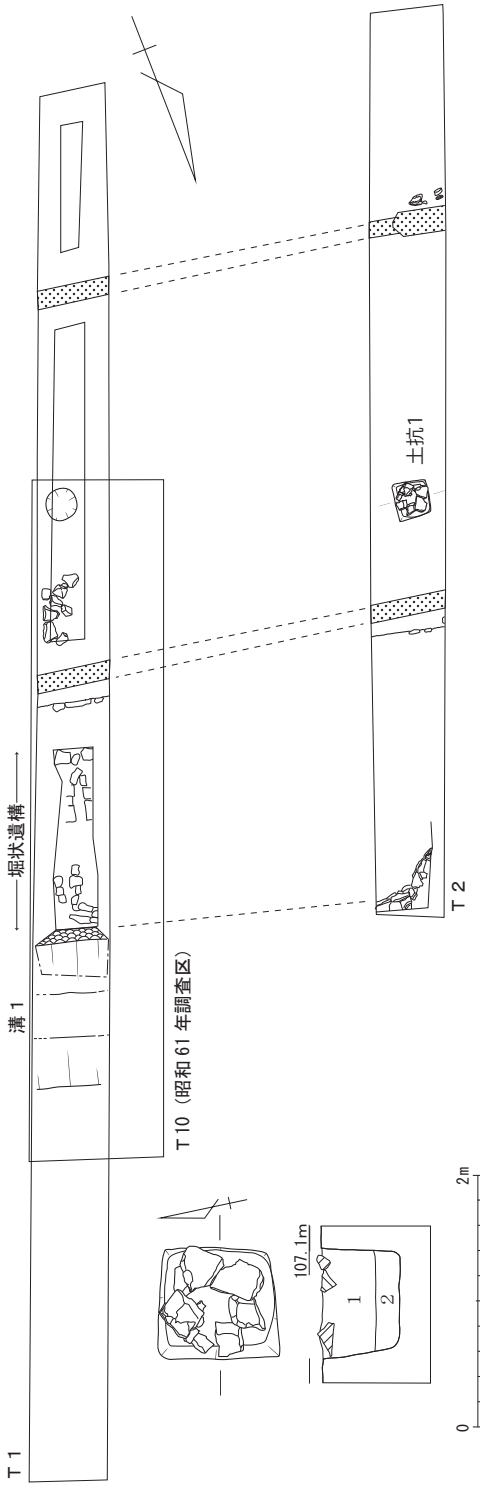
造成土下は、５～10㎝程の整地層（15～27層）がある。その下の地山上で、暗渠や溝の側石、ピット群を検出している。

遺物は、瓦類、陶磁器類、サヤ鉢など１箱が出土した。

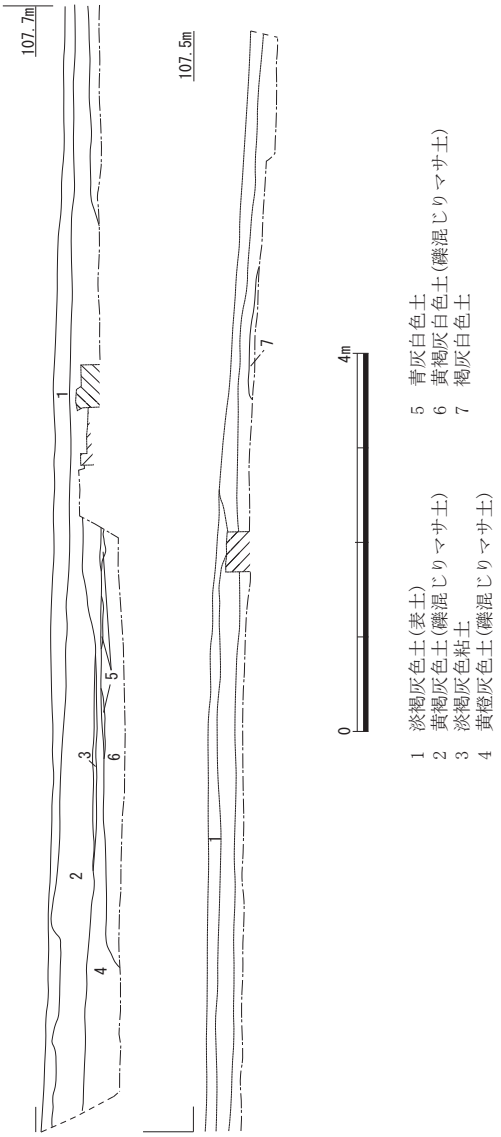
Ｔ５（第10図、図版１）

下段テラスに設定した南北7.5ｍ、東西２ｍのトレンチである。

「現地表からマイナス約100㎝の深さで、厚さ約70㎝の炭・



第７図　Ｔ２土坑1（1/60）



第６図　Ｔ１・２平面図（1/200）、Ｔ２断面図（1/80）

焼土層を検出した。この層中からは土器・陶磁器・瓦・建物の壁土・焼けた布・古銭（寛永通宝？）が大量に出土した。この層は、備前国学記録』(岡山大学付属図書館蔵池田家文書）に記されている弘化４年（1847）の火災による炭・焼土を整地したものと考えられる。さらに下層（現地表からマイナス約170㎝）でも生活面を確認したが、調査範囲が狭かったこともあり遺構は検出できなかった。この炭・焼土面の上面では、礎石および石溜まりを検出した。石溜まりは、北西から南東方向に列状を呈していた。これらは、大正10年の造成土よりは古く、明治あるいは江戸時代（弘化４年以降）のものと考えられる。」

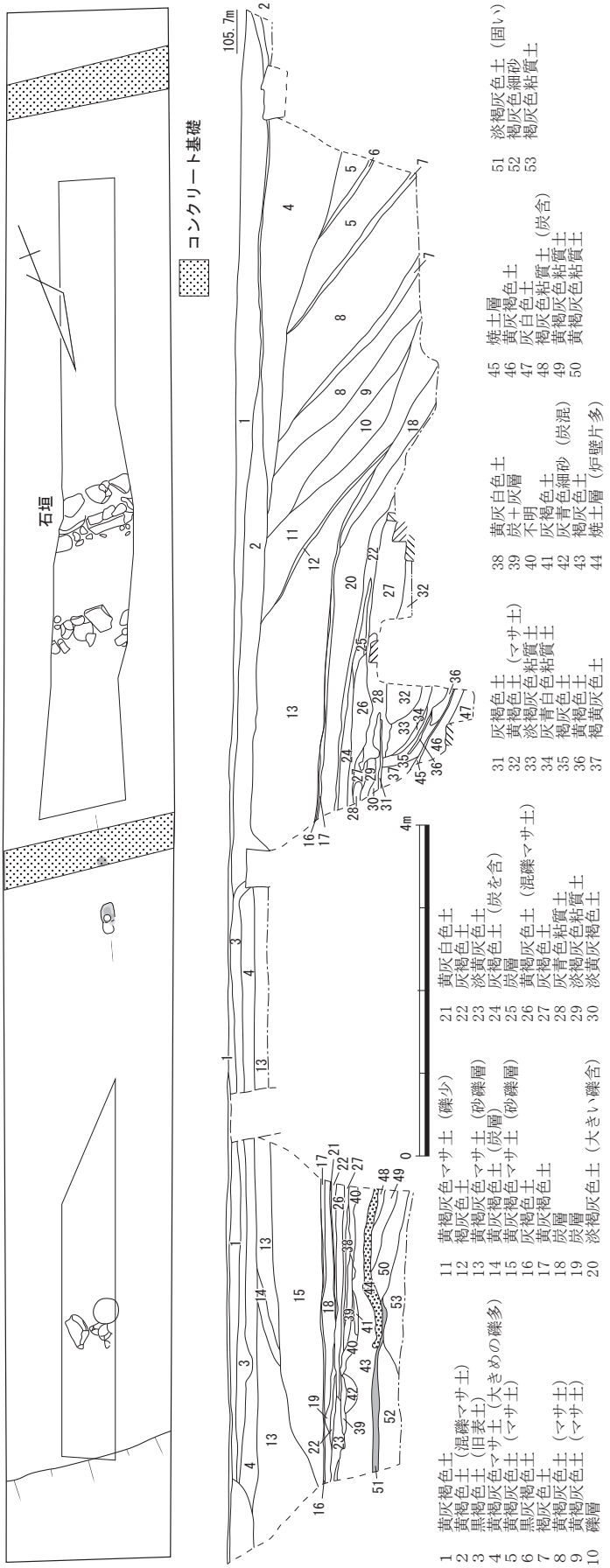
造成土の下の９層は、堅く締まり遺構面とみられ、礎石はこの面に据えられていた。その下層にもマサ土による造成土（10層）があり、その下層の炭焼土層上面で東西方向に延びる２条の石溜まりを検出した。炭層中の焼土は窯壁片である。

コンテナ４箱分の遺物があり、炭層中からは、幕末～明治期の磁器や窯壁、窯道具が出土している。

Ｔ６（第11図、図版２）

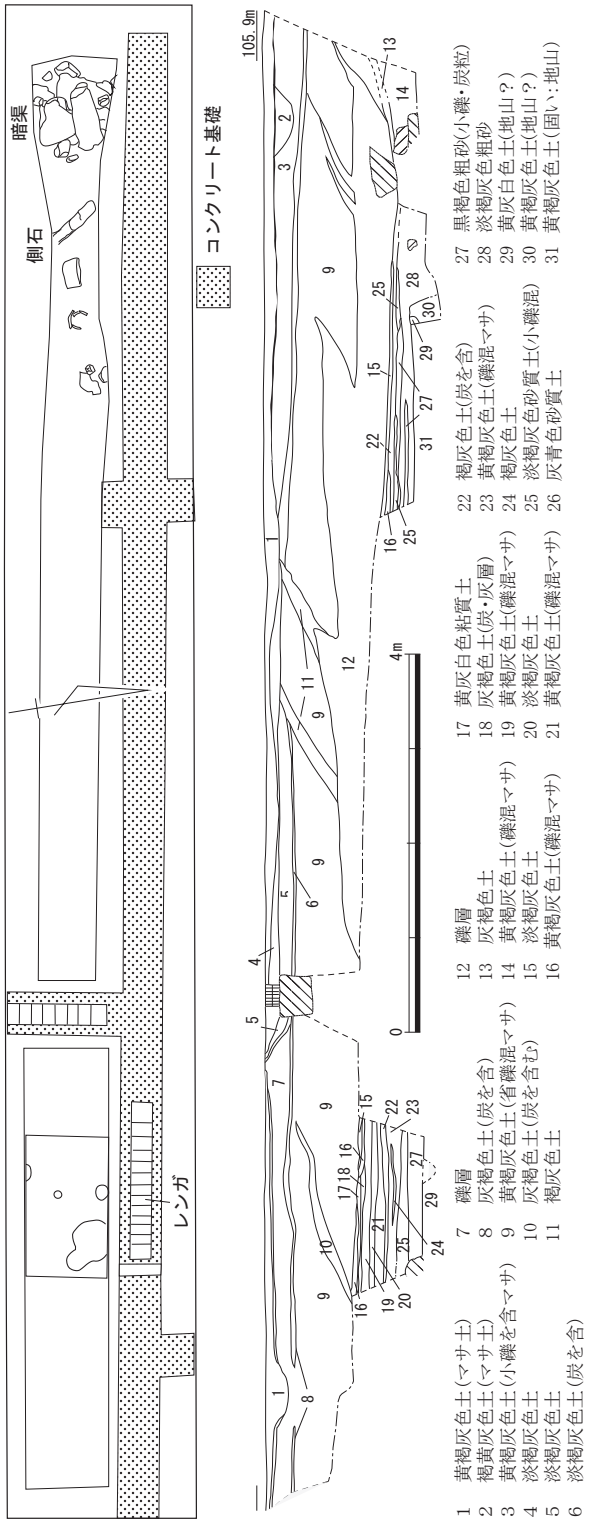
上段テラスで設定した、東西が９ｍ、南北は２ｍのトレンチである。

「東端部において、現地表からマイナス約80㎝で、炭・灰・焼土層および鍛冶炉（５～６基）を検出した。これらの時期は、炭・灰・焼土層中から明治19年製の「半銭」が出土していること、及び鍛冶炉に煉瓦を伴うことからほぼ明治時代のものと考



第８図　Ｔ３平断面図（1/80）

えられ、明治38年に完成した私立閑谷中学校の校舎建設に際して野鍛冶を行った痕跡ではないかと考えられる。トレンチの西部分では、幅約20㎝、深さ約15㎝の南北方向の溝を検出した。この溝にはU字型の木枠の痕跡が認められた。時期は明確でないが、明治から大正10年までと考えられる。現地表からマイナス約90～120㎝で地山層を確認したが、このトレンチでは江戸時代の遺構及び遺物は認められなかった。」



第９図　Ｔ４平断面図（1/80）

土層断面の13層は県立学校期の表土層、15層直下の18層が大正10年頃の旧表土層である。瓦、陶磁器、煉瓦、明治19年の半銭、鉄板、小刀、服のボタンなどコンテナ１箱が出土している。

Ｔ７（第12図、図版２）

下段テラスに設定した、南北約8.5ｍ、東西10ｍのトレンチである。

「大正10～12年の県立閑谷中学校校舎建築時のものと考えられる造成土が現地表面からマイナス約130㎝の深さまで堆積していた。この造成土を除去して、暗渠・石列１・礎石などを検出した。この面が大正10～12年の生活面に相当するものと考えられる。この生活面より20～40㎝下で地山を検出している。この地山面において石列２、Ｐ１、礎石、土坑及び溝状遺構等を検出した(第２遺構面)。これらのうちＰ１では、木製の桶が備え付けられていた。また、溝状遺構内には大量の瓦、窯壁、窯道具が廃棄されていた。この地山面は、当遺跡における最も古い生活面と考えられ、江戸時代の可能性が高い。」

暗渠は、幅30㎝、深さ40㎝程で、北東から南西方向に延び、途中のクランクか所で石列１と交差する。石列１は１段積み２列の石列で、北側の石列は南側に、南側の石列は北側に面なす。暗渠との交点では、間に備前焼丸瓦５点を凹面を上にして並べ、先端は暗渠側石に差し込まれていた。

第２遺構面のＰ１は、直径88㎝、深さ40㎝の土抗で内側に桶を据える。桶の内径は、直径54～62㎝で底面にも木質が残る。Ｐ２は、直径74㎝、深さ30㎝の土抗である。Ｐ３は長

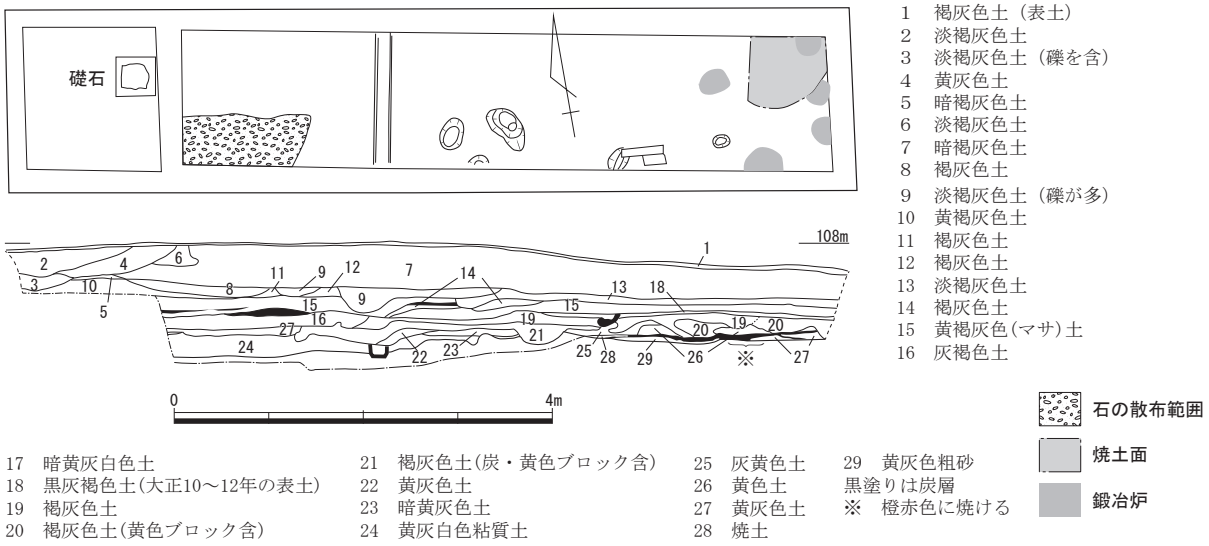
径１ｍ以上、短径50㎝の土抗である。Ｐ４は、一辺が50㎝程の土抗である。Ｐ５も直径60㎝の円形土抗で、底面には炭が残る。Ｐ１・２からは、瓦が出土する。Ｐ７は、暗渠や石列１より古く、地山面から掘り込まれた遺構で、直径約1.8ｍで、検出面からの深さは１ｍである。掘り方内には直径１ｍ程の木枠がある。上層は、マサ土によって完全に埋められるが、下層からは平丸瓦、聖廟の敷瓦、窯壁片が出土した。溝は幅240㎝、深さ80㎝で、瓦、磁器、窯道具、窯壁片が多く出土している。焼け歪みの激しい瓦、２次的に被熱を受けた瓦、自然釉によって融着した瓦の存在である。

Ｔ７全体の遺物は16箱で、包含層からも瓦（赤瓦が多い）、窯道具が多く出土している。Ｔ７は、文化・文政期や明治初年の絵図では作事小屋に相当し、差し替え瓦を保管していたと考える。また、窯道具や窯壁片、焼成不良瓦の存在は、Ｔ５炭層もあわせて、近くに窯が存在したことを示す。

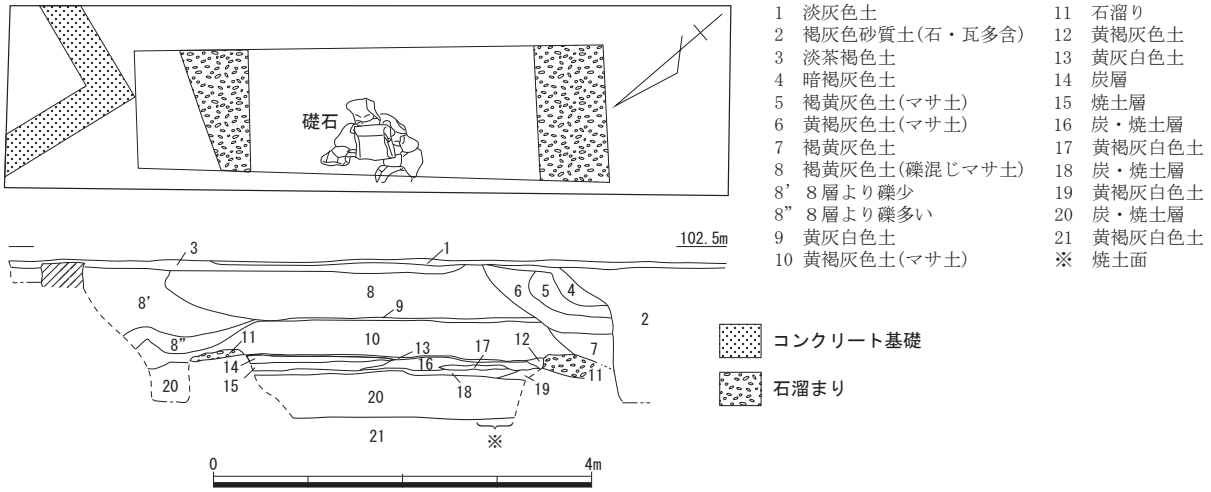
Ｔ８（第13図、図版２）

Ｔ４を南に拡幅して、東西長14ｍ、幅４ｍとし、さらに西側を南に７ｍ拡幅したトレンチである。

「大正10～12年と考えられる造成土が現地表面マイナス110～140㎝まで堆積している。検出した遺構には、暗渠１・２、石列、土坑などがあるが、時期は明確ではない。現地表面からマイナス140㎝



第10図　Ｔ５平断面図（1/80）

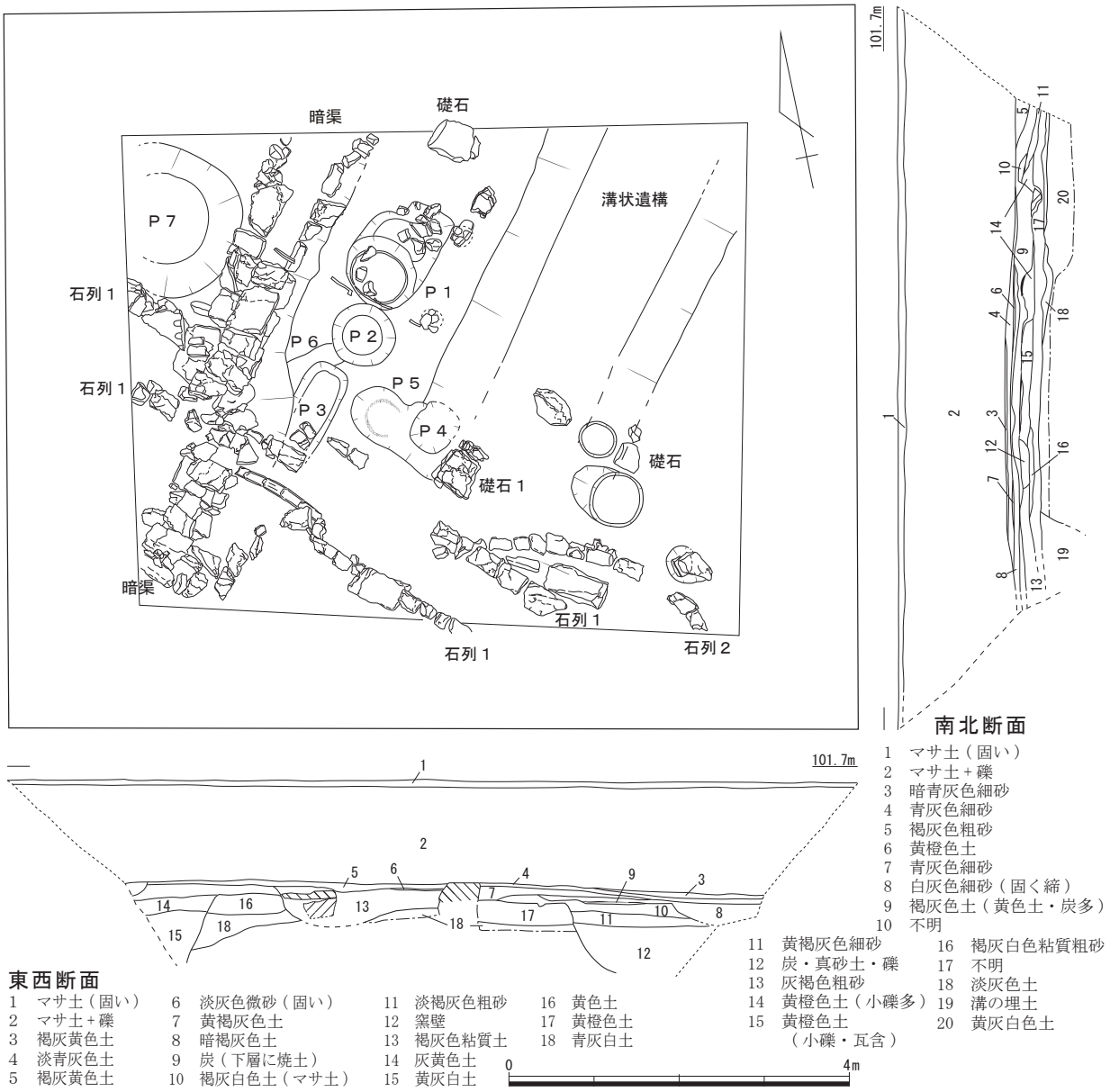


第11図　Ｔ６平断面図（1/80）

の造成土直下とマイナス約160㎝に生活面が認められ、下位の生活面は江戸時代の可能性がある。現地表面マイナス160㎝で地山に達する。」

北壁土層では、大正期の造成土（１・２層）直下に第１遺構面がある。大正10年の面で、断面中央部あたりの地形の窪みに黄灰色マサ土と黄色粘質土の互層（11～13層）をもって整地を行なう。 下層は、22層や28層の上面が第２遺構面で、暗渠と石列を検出した。暗渠１は、幅が30㎝、深さは側石の天端から20～25㎝ほどである。暗渠２は暗渠１によって切られたより古い遺構で溝底も２の方がより深い。石列は、一段分の板石を立て、東側に面を向ける。石列の石の天端は遺構面の高さとほぼ同じで、暗渠１の蓋石の天端と比べ10㎝ほど低い。石列の東のピット群では、Ｐ１で瓦とガラス片が出土し、断面からも第２遺構面より新しい。東端部の落ち込み（29層）は、第２遺構面で、加茂鶴（Ｍ８年以降）の陶器製瓶蓋が出土する。

遺物は、３箱分の瓦、陶磁器、窯道具、窯体片がある。



第12図　Ｔ７平断面図（1/80）

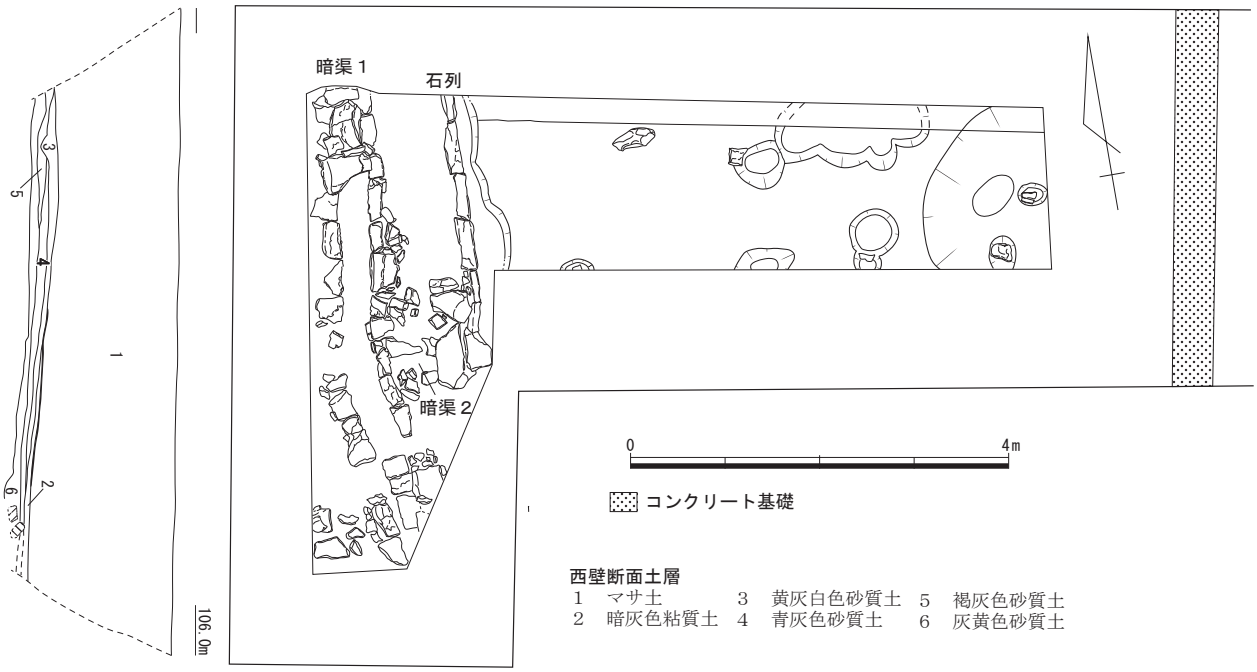
Ｔ９（第14図、図版２）

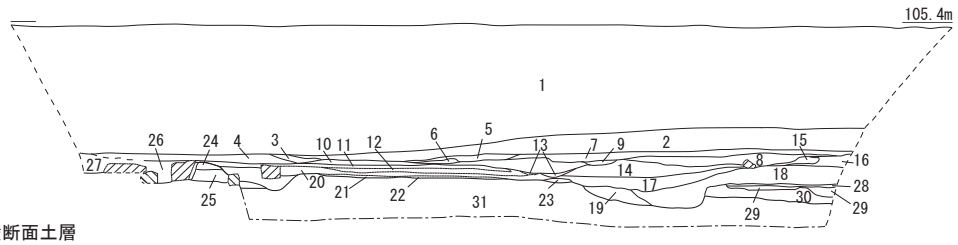
上段テラスで、Ｔ２を西側にひろげる形で設定した、南北10ｍ、東西４ｍのトレンチである。

「大正10～12年と考えられる造成土が北部分では現表土マイナス約130㎝まで、南部分ではマイナス約240㎝まで堆積しており、トレンチの北部分と南部分では、造成前には約１ｍの段差があったと考えられる。現地表面からマイナス130㎝の造成土直下とマイナス約180㎝に生活面が認められ、下位の生活面において石列を検出した。現地表面マイナス約200～230㎝で焼土層を確認した。焼土層は北から南へ約８度で傾斜し、その厚さは約８㎝であった。 江戸時代の瓦窯跡の可能性がある。」

大正期の造成土（第４層）下の第１遺構面と18・19層上の第２遺構面及び地山直上において焼土面（第３遺構面）を確認した。第２遺構面では、石列とそれに直交する備前焼瓦列（３本）を確認した。石列は１段のみで西側に面を持つ。この遺構面は、南に向かって傾斜する地山上に水平に土（18・19層）を盛って屋敷地を形成していたとみられる。焼土面は、Ｔ９の東側のサブトレンチ内で確認した。10～20㎝ほどの厚みで南に向かって緩やかに下がり、その角度は約８°である。焼土面上の遺物は皆無であるが、Ｔ７他で出土した窯道具や窯体片を考慮し、窯の床面と考える。

出土遺物は３箱で、窯壁片以外では、瓦、陶磁器、備前焼がある。





北壁断面土層

1　マサ土	9　黄灰褐色砂質土	17　黄灰色粘質土	25　淡黄灰色砂質土
2　灰黄色マサ土（礫含）	10　灰黄色マサ土	18　淡黄褐灰色細砂	26　灰褐色粘質土
3　不明	11　黄色粘質土	19　橙褐黄色砂質土	27　灰黄色マサ土
4　不明	12　灰黄色マサ土	20　淡黄褐灰色砂質土	28　暗灰色砂質土
5　暗青灰色粘土	13　灰色砂質土	21　灰色砂質土	29　暗灰色砂質土（トチン瓦を含）
6　灰色マサ土	14　淡灰色粘質土	22　灰白色粘質土（固い）	30　赤灰黄色砂質土（焼土粒含）
7　暗灰色粘質土	15　不明	23　灰赤黄色粘質土	31　地山
8　暗黄色マサ土（礫含）	16　不明	24　灰黄色砂質土	

第13図　Ｔ８平断面図（1/80）

Ｔ10（第15図、図版２）

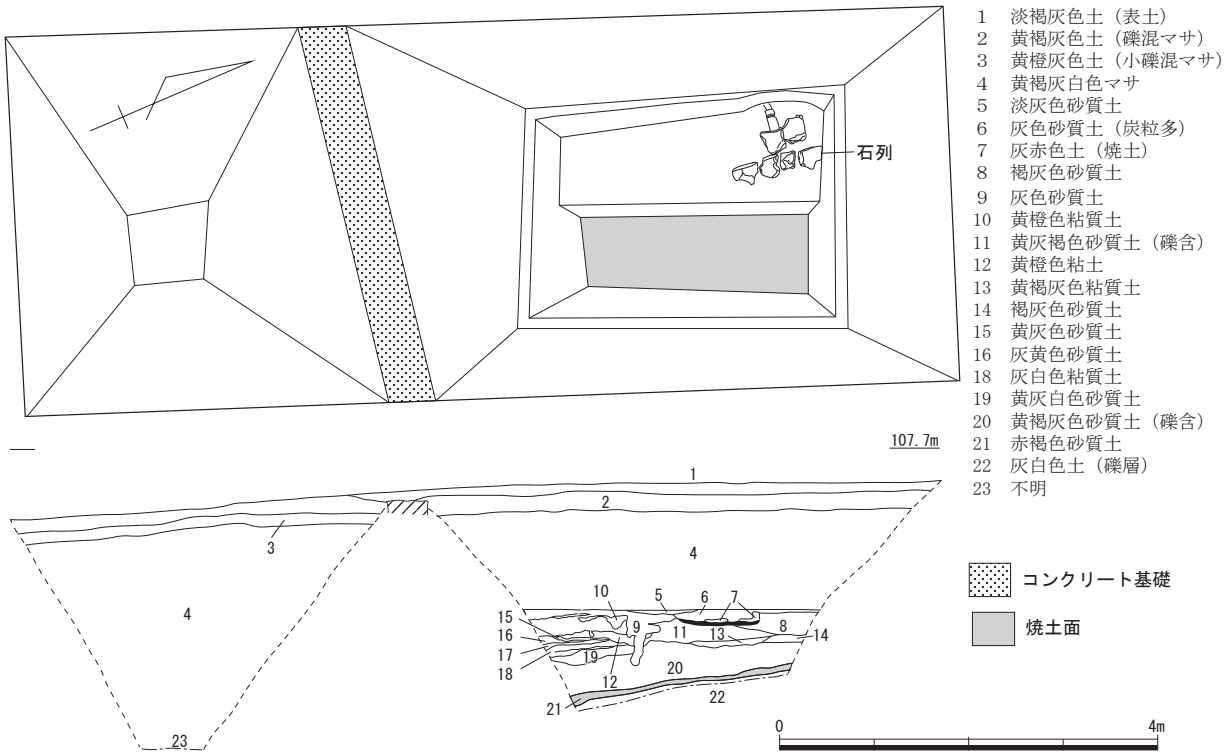
Ｔ１の中央部を西に拡幅した、南北に20ｍ、東西が４ｍのトレンチである。

「大正10～12年と考えられる造成土が現地表面マイナス140㎝まで堆積している。その造成土直下と現地表面からマイナス約約140㎝と約170㎝に生活面が認められた。上位の生活面（第１遺構面）では、石垣１、石列１を検出し、下位の生活面（第２遺構面）では石垣２、石列２・３、暗渠、水路２・３、礎石、井戸状遺構などを検出した。また、調査区北端部において水路１を検出している。

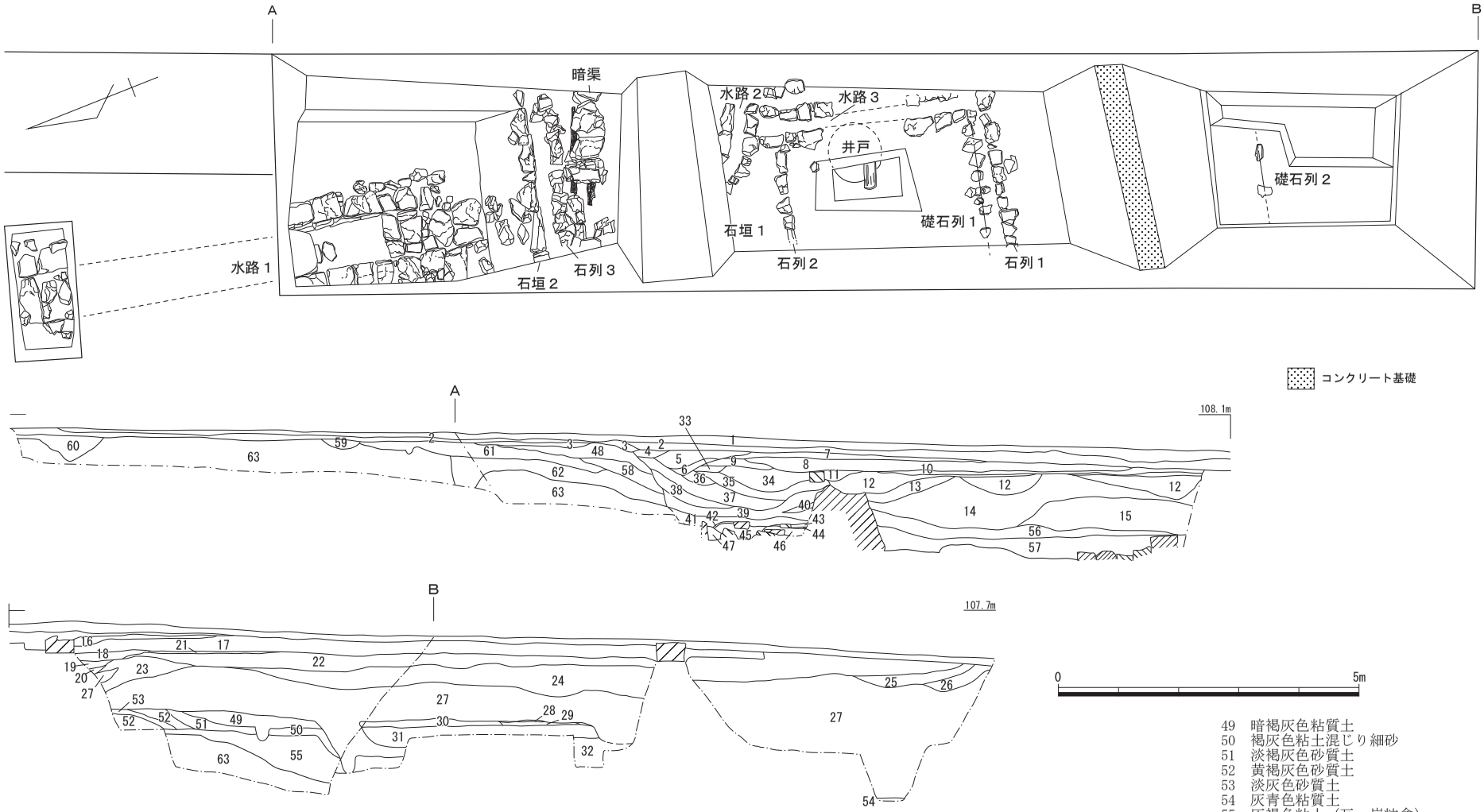
上位の生活面は大正10～12年段階のものであり、下位の生活面は江戸時代の可能性が考えられる。」

水路１は、幅80㎝程の石積み水路である。南側の1.5ｍは底部が石敷きで、深さは30㎝程である。北側では底面が土で、側石の天端からの深さが１ｍ、側石は２～３段積みであった。水路１は、石垣１の南には存在せず、上方からの流水を石垣１の南へと流した水路と考えられる。石垣１は、水路２の上から直接積み上げられ、残存高１ｍで加工を施した石材を落し積みにするが、石材間には隙間は顕著である。時期は､明治17年の閑谷黌開校時か明治36年の私立閑谷中学校開校時であろう。石列１は、石積１段分が遺存し、地山から石の天端までの高さは40㎝である。石垣１と併行し、北側に面を向ける。井戸は、明治初年の『閑谷学図』に描かれた井戸とみられるが、明治17年の学校図にはない。内径が１ｍ程の素掘りで、木枠を据える。内部からは備前焼の大甕や陶磁器、瓦類が出土している。確実に幕末期にさかのぼる遺構の一つである。石列２は、南側に面を持つ１段分の石列である。水路２は、幅20㎝の石組みの水路で、１段分の石を確認した。水路３は、幅20㎝程の石組みの水路で、石列３より新しく、水路２より古い。礎石列１は、石列２と同じレベルで検出した。礎石列２は、礎石列１に併行し、同時期の建物を構成する可能性がある。

Ｔ10では、講堂、聖廟など由来の瓦、敷瓦、陶磁器、瓦質土器、窯壁片、硯がコンテナ22箱出土した。陶磁器は、明治期を中心とした瀬戸・肥前産である。



第14図　Ｔ９平断面図（1/80）



1　黄褐灰色土（マサ土）
2　灰黒色土
3　淡褐灰色土
4　褐灰色土
5　黄褐灰色土
6　褐灰色土
7　褐灰色土
8　褐灰黄色土
9　黄褐灰白色土
10　灰白色土
11　褐灰白色土
12　橙灰白色土
13　黄橙褐灰色土
14　黄褐灰色混礫マサ土
15　黄褐灰色砂礫
16　褐灰白色土（マサ土）
17　橙黄褐灰色土（混礫マサ土）
18　褐灰白色粘質土
19　黄灰白色土
20　黒灰褐色土
21　黄灰灰色土（固い）
22　黄褐灰色土（マサ土）
23　淡褐灰色土（マサ土）
24　淡褐灰色土（混礫マサ土）
25　黄褐灰色土（マサ土）
26　橙褐灰色土（マサ土）
27　黄褐灰色砂礫（マサ土）
28　暗褐灰色粘質土
29　褐灰色粘土
30　黄灰白色粘土
31　茶褐灰色砂質土
32　褐灰色混礫細砂
33　黄褐灰色粘質土
34　黄褐灰色土
35　黄褐灰白色土
36　黄褐灰白色土
37　褐灰色土（炭含む・遺物多）
38　褐灰白色土
39　灰黄色土（マサ土・礫多）
40　褐灰白色土
41　灰青色砂質土
42　暗灰色砂質土
43　暗褐灰色粘土
44　黄緑灰色砂質土
45　淡青灰色砂質土
46　青灰色砂質土
47　暗灰色砂質土
48　黄褐灰白色土
49　暗褐灰色粘質土
50　褐灰色粘土混じり細砂
51　淡褐灰色砂質土
52　黄褐灰色砂質土
53　淡灰色砂質土
54　灰青色粘質土
55　灰褐色粘土（瓦・炭粒含）
56　褐灰色粘土
57　緑灰青色砂質土
58　茶褐色粘土
59　灰褐色土
60　黄褐灰色土
61　茶褐灰色土
62　淡褐灰色土
63　淡灰色混礫土（地山？）

第15図　T10平断面図（1/100）

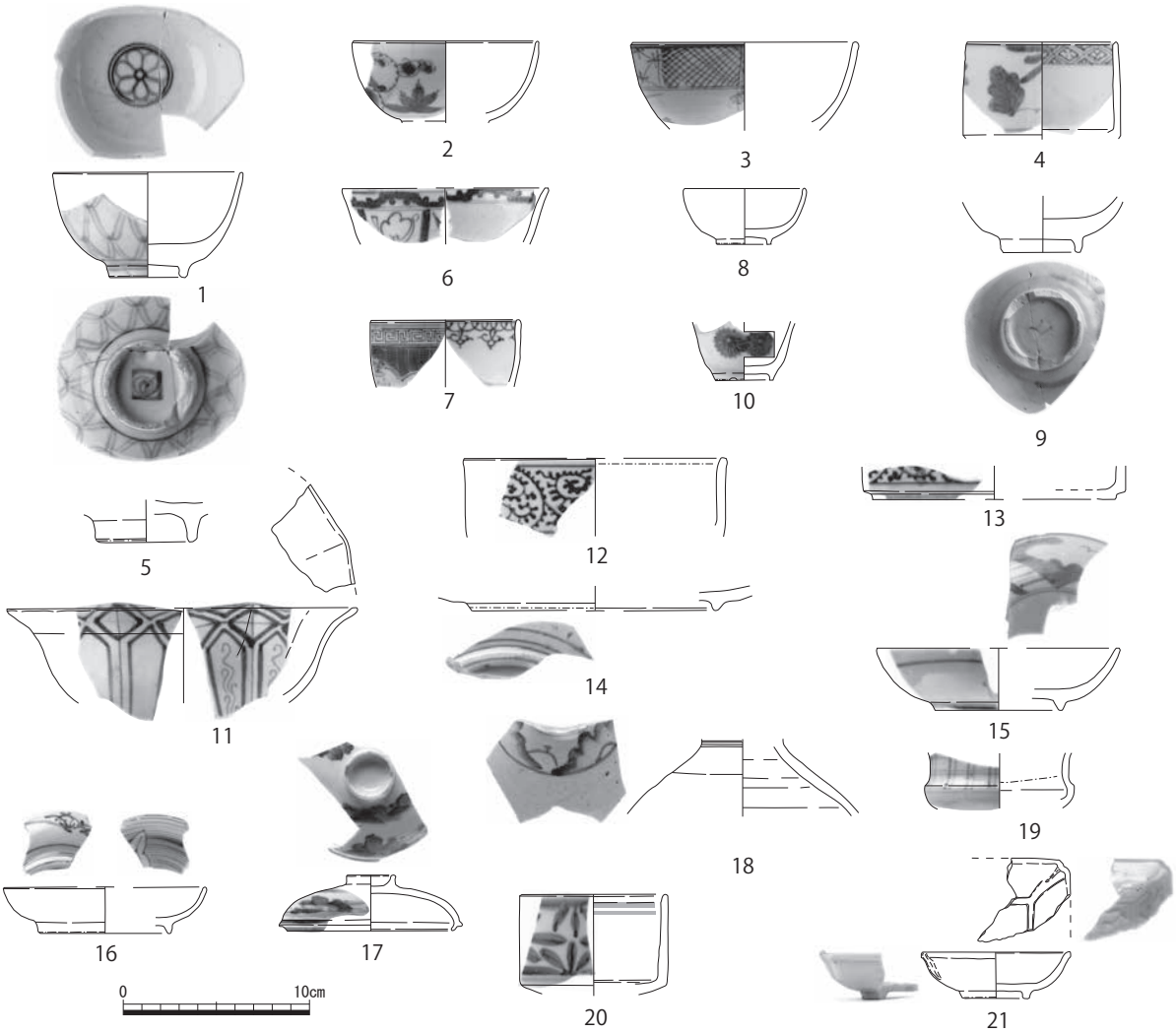
第３節　出土遺物について

１　国産磁器（第16図）

Ｔ５の炭・焼土層の肥前系（１～17）、瀬戸磁（21）で幕末から明治にかけてのものである。20は、Ｔ７の溝から出土した窯道具類とともに出土した瀬戸産の磁器碗で、時期は、明治と考えられるある。Ｔ１・10の溝からも近現代の陶磁器が多数出土している。

２　備前焼（第17～19図、図版３）

22・23は、徳利で、22は19世紀に多い形態である。壺24は、明治～大正期の作で木村桃渓堂の陶印が底面に残る。25は壺か徳利で、底面に「大」の字の陶印が残る。碗26の高台内には、「備前伊部陶森製造」と「葛」の二つの陶印が残る。「伊部陶森」とは、明治11年に設立された伊部陶器株式会社のことで、明治期の作家である久本葛尾氏が伊部陶器に勤めていた時期の作である。皿類には、27～33がある。27は、見込み部に鶏の型押し文様がみられ、底面に森嘉太郎ないしは琳三の陶印がある。明治以降の作品である。灯明28～33はおおむね19世紀代の作で、29・30・33は幕末期である。34～38は、花立てで、いずれもＴ10溝１からの出土である。すべての個体の高台内側に「葛尾」と彫られ

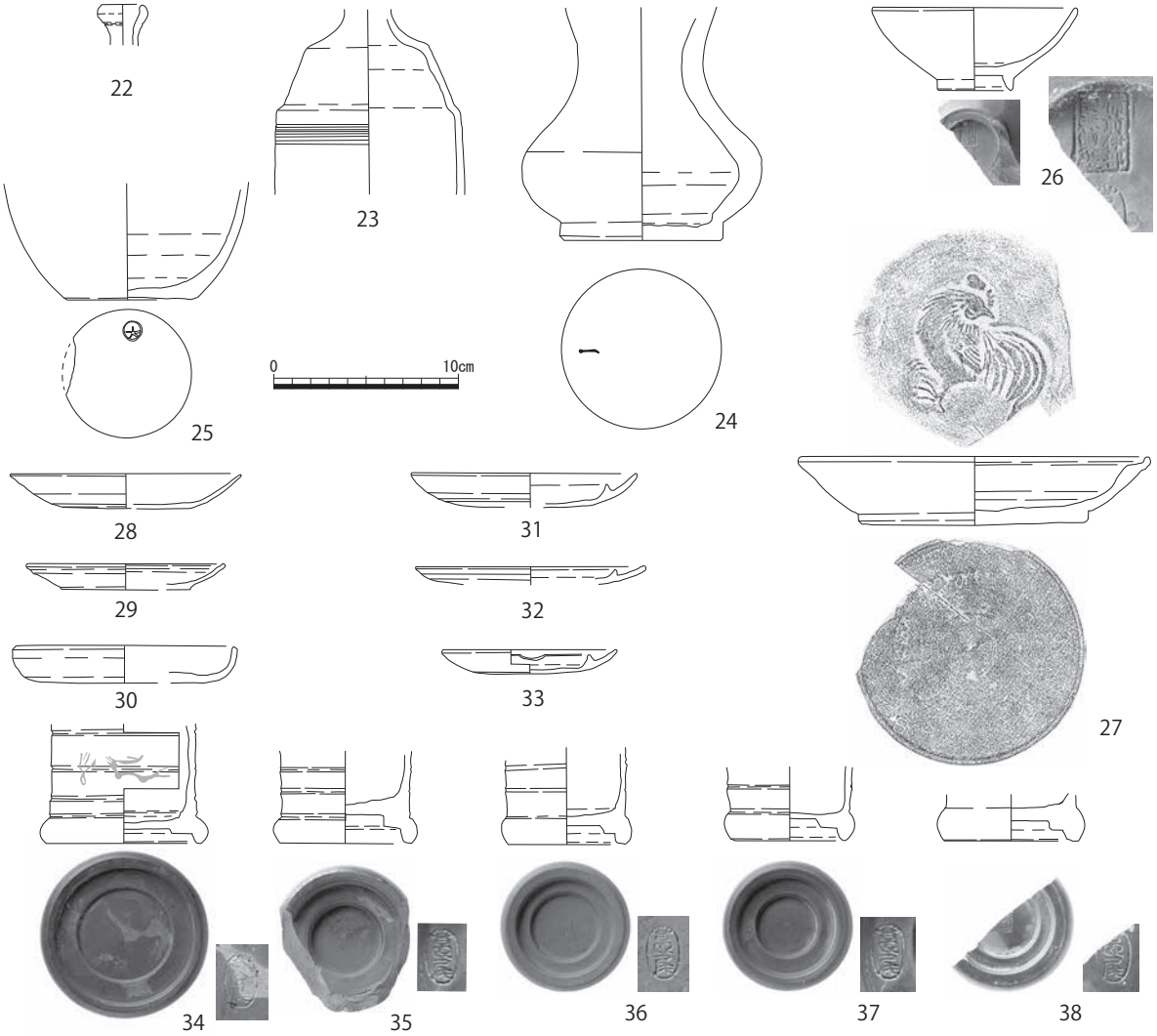


第16図　国産磁器（1/4）

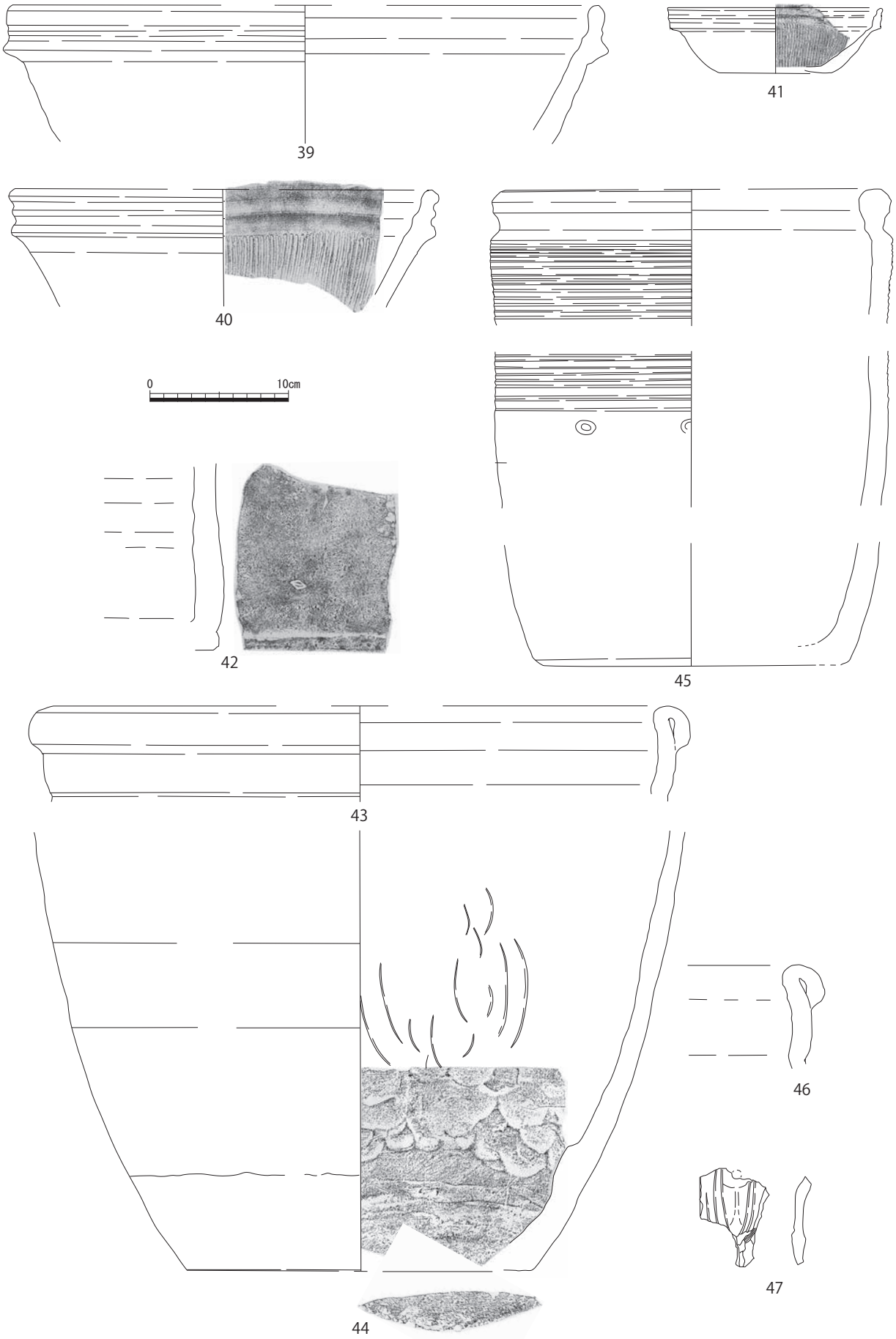
た陶印が残り、久本葛尾氏の作品である。鉢類41は、小形品のすり鉢で、明瞭な使用の痕跡がない。42は、箱状を呈する鉢とした。外面には菱形の内に一文字の木村興楽園の陶印が残る。甕類のうち、口縁43・46は、口縁端上部に乾燥時の敷わらの圧痕が残る。底部44では、外面はナデ仕上げる一方、内面の底部付近を直径３㎝ほどの工具によって叩いて成形するが、それより底部にかけての器壁が非常に厚い。体中位には円形の当て具痕が残る。47は、型作りのいわゆる細工物で、翁像とみられる。48～52はサヤ鉢である。窯道具であるが、学房地区の窯で使用されたかは不明であり、本項で記述する。52は、３か所の円孔が残る大形の穴あきサヤで、内面が内に向かって湾曲していることから底部に近い破片と思われる。これら備前焼は、年代が不確定のサヤ鉢はのぞき、確実に学校創立時までさかのぼるものはない。さかのぼっても19世紀と考えられ、幕末から明治期の製品が主である。

３　瓦質土器（第20図、図版３）

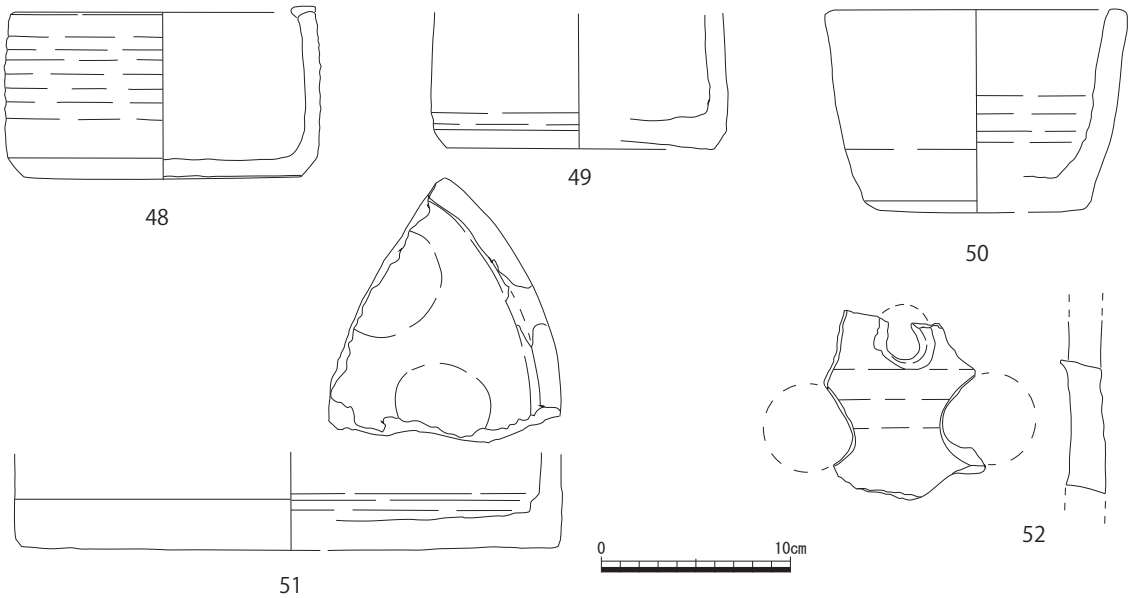
53～56は、Ｔ１・10の溝から同様の破片がまとまって出土しており、聖廟や閑谷神社で用いられた香炉と考えている。53は、胴部に獅子頭を型押しで造り、その両側には渦巻きや点描状のスタンプ文様を押す。57は、焜炉である。平底で円形の体部を持つ桶状の器形である。外面は格子目状にカキメを施し、内面はナデて仕上げる。内壁から中心に向かって目皿を受ける突起がつく。



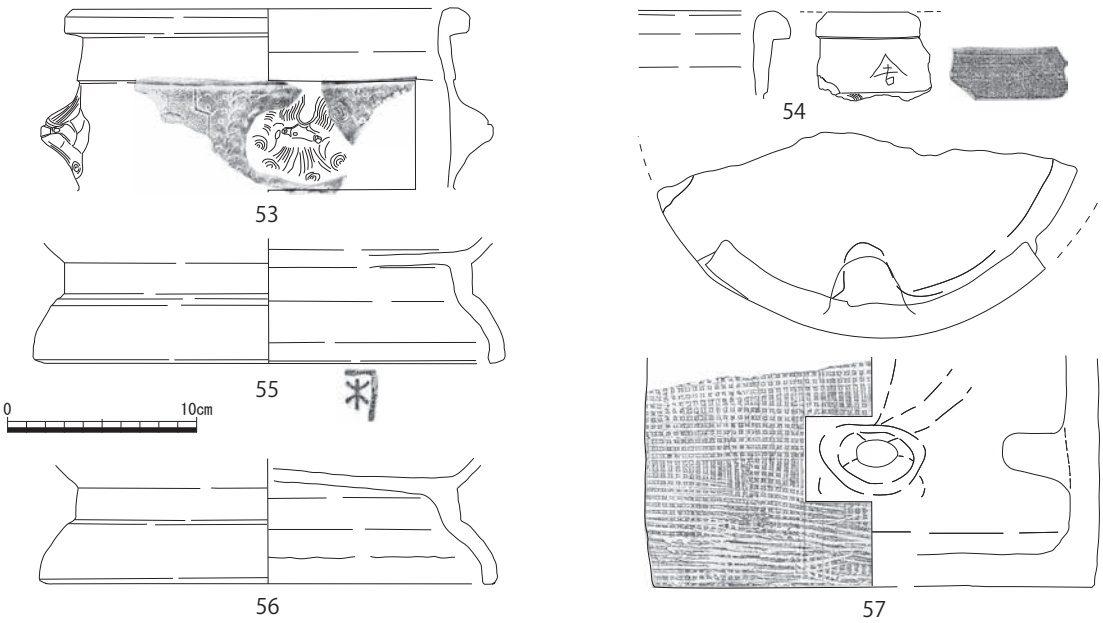
第17図　備前焼１（1/4）



第18図　備前焼２（1/4）



第19図　備前焼３（1/4）



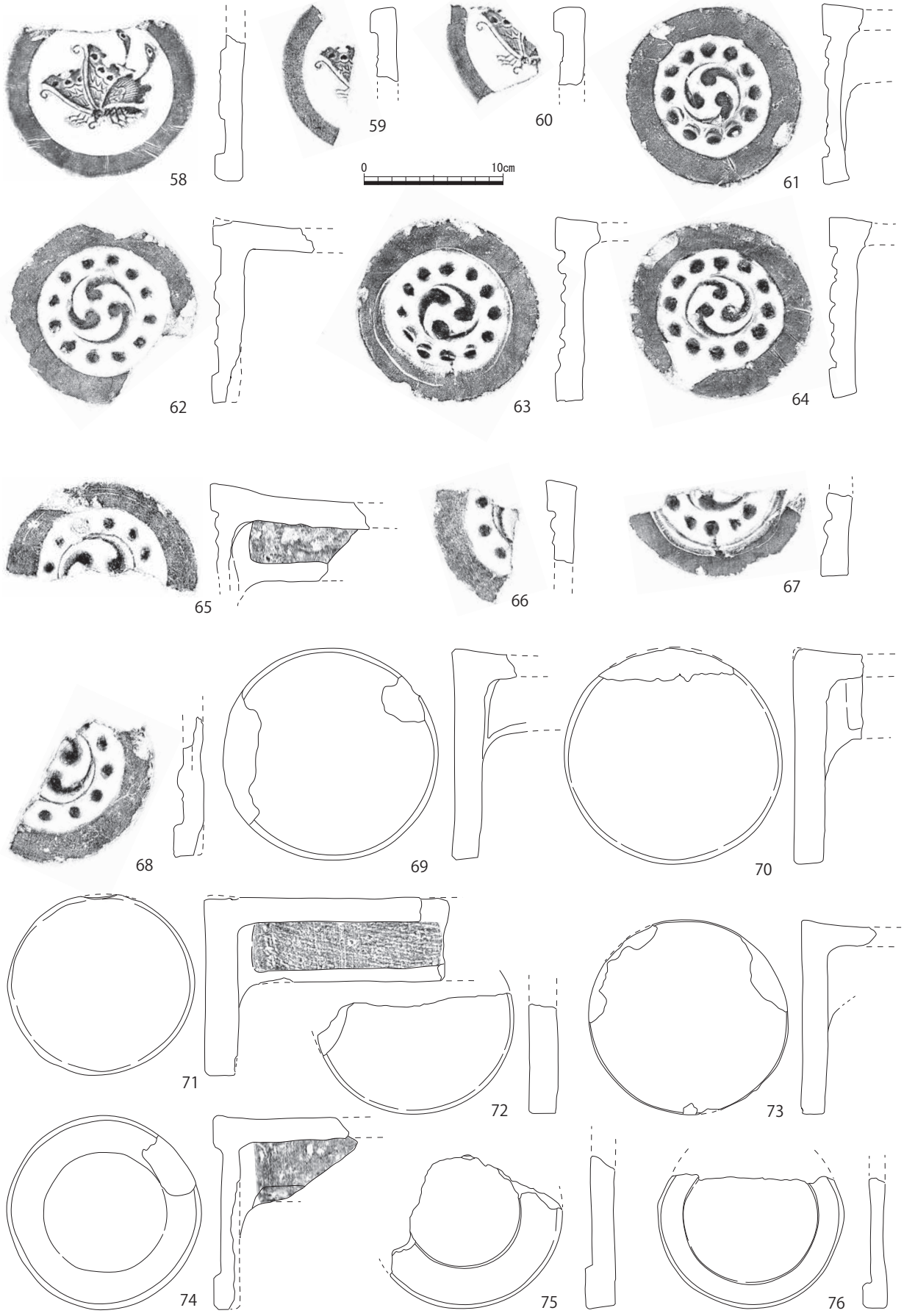
第20図　瓦質土器（1/4）

４　瓦

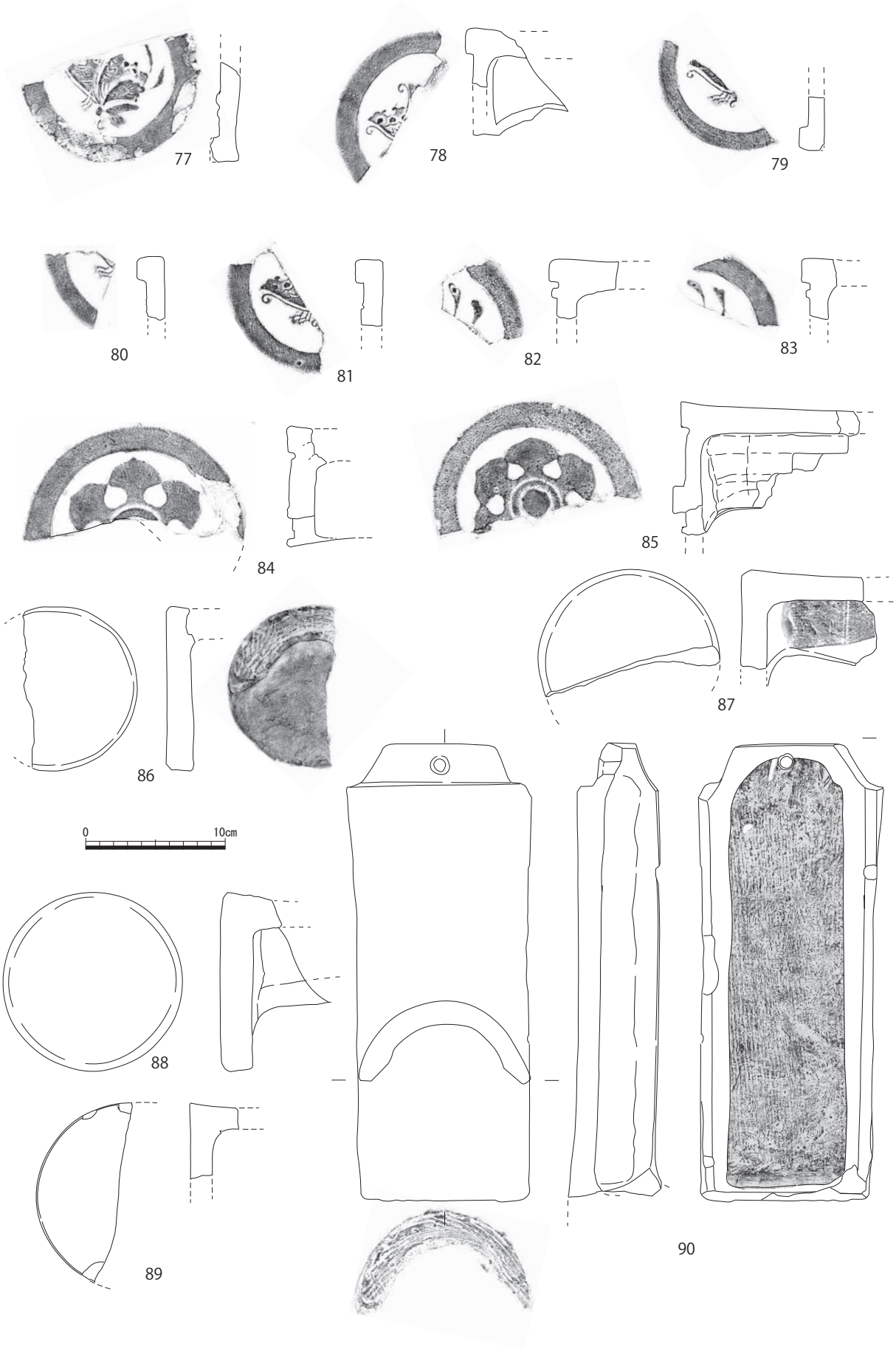
焼成法に、黒瓦（燻瓦）と赤瓦（備前焼瓦）の二種がある。平瓦と丸瓦の総点数3,495点について、出土地点ごとの比率を示すとＴ１･10が65%、Ｔ７が16%、その他のトレンチが19％であった。黒瓦と赤瓦の比率は、Ｔ１･10では黒瓦が33%、赤瓦が64%、Ｔ７では黒瓦11%と赤瓦89%である。その他のトレンチでは、黒瓦が多く63%、赤瓦は37％であった。赤瓦には、学房窯で焼成された焼成不良の瓦（主にＴ７溝出土）と講堂・聖廟・芳烈祠に葺かれ､破棄に当たって学房地区に持ち込まれたと考えられる瓦（Ｔ１・10溝など）がある。Ｔ７は作事小屋の一部で、差替え瓦が保管されたとみている。

（１）　軒丸瓦（第21～23図、図版４）

黒瓦（58～75）では、瓦当文様に揚羽蝶紋、巴紋、無紋、蛇目紋の４種類がある。揚羽蝶紋58は、



第21図　軒丸瓦（黒瓦）１（1/4）

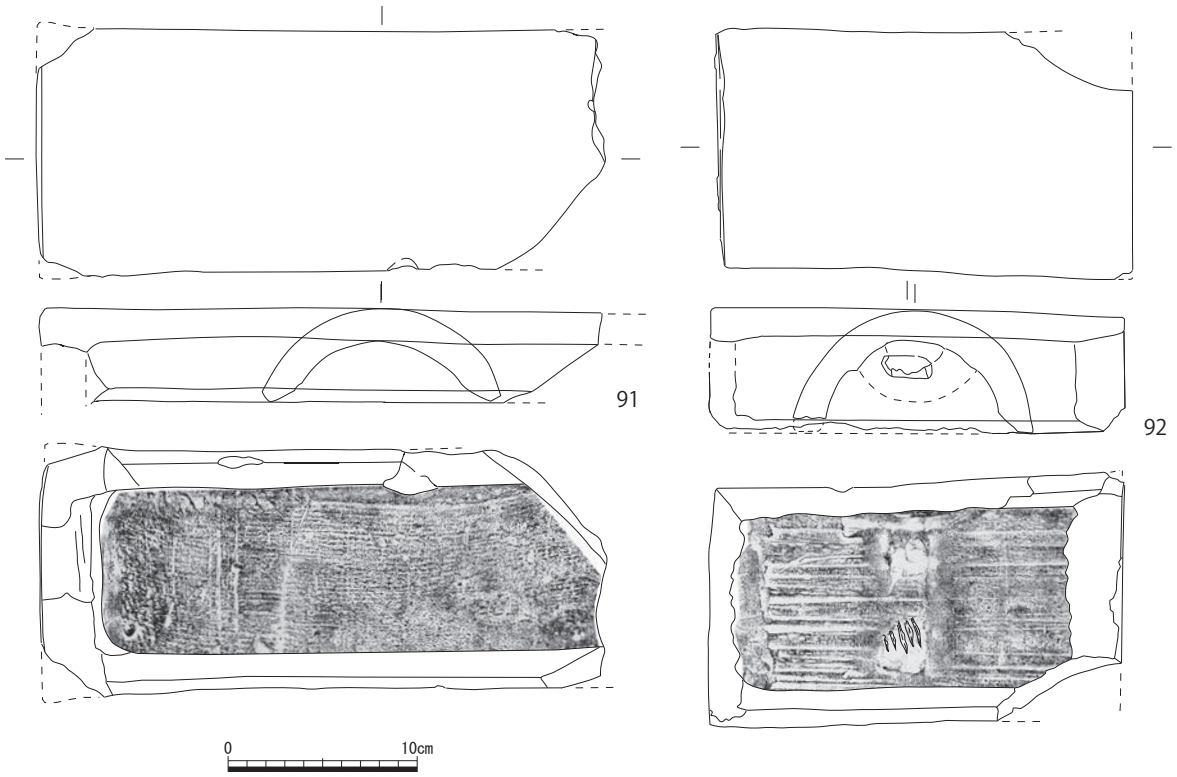


第22図　軒丸瓦（赤瓦）１（1/4）

周縁と側面にヘラミガキを施す。黒瓦は、いずれも丸瓦部の凸面に１㎝前後の幅の工具によるナデを行っており、その後に丁寧なヘラミガキを施した61・63・67・74・75がある。巴紋には右巻きと左巻きがあるが、巴の形状、珠紋の数などから18世紀代に入り学房で用いられた瓦とみてよい。赤瓦には、揚羽蝶紋・六葉紋・無紋がある。揚羽蝶紋では、77の蝶の表現がほかと比べて写実性を欠く。周縁にヘラミガキを施すが、焼成は不良である。創建時からかなり時期が下る補修瓦であろう。77～83は、黒瓦58～60と同様、周縁外側の角を丸く整えるのも特徴的である。六葉紋84・85（六葉紋Ａとする）は、揚羽蝶や無紋瓦に比べ瓦当部が一回り大きい。84は、半月巴瓦で85とは異笵ある。86～89は、無紋の聖廟の瓦である。周縁の外縁角張るものと丸く収めるものがある。90～92は軒丸瓦の丸瓦部で、90・91は凹面にゴザ状圧痕が残り、その上からヨコナデを施す。92はゴザ状痕の上に細板状の押圧痕が残り、把手状の引掛け突起の剝離痕がつく。凸面は、90はミガキ。91・92はナデで、92では玉縁部と胴部の境に浅い仕切り溝が巡る。今回出土の揚羽蝶紋の笵型には、58～60・77・250・78・80・76の３種であるが、前翅の浮紋や脚の表現で別タイプもいくつか存在する。

（２）軒平瓦（第24～26図、図版５）

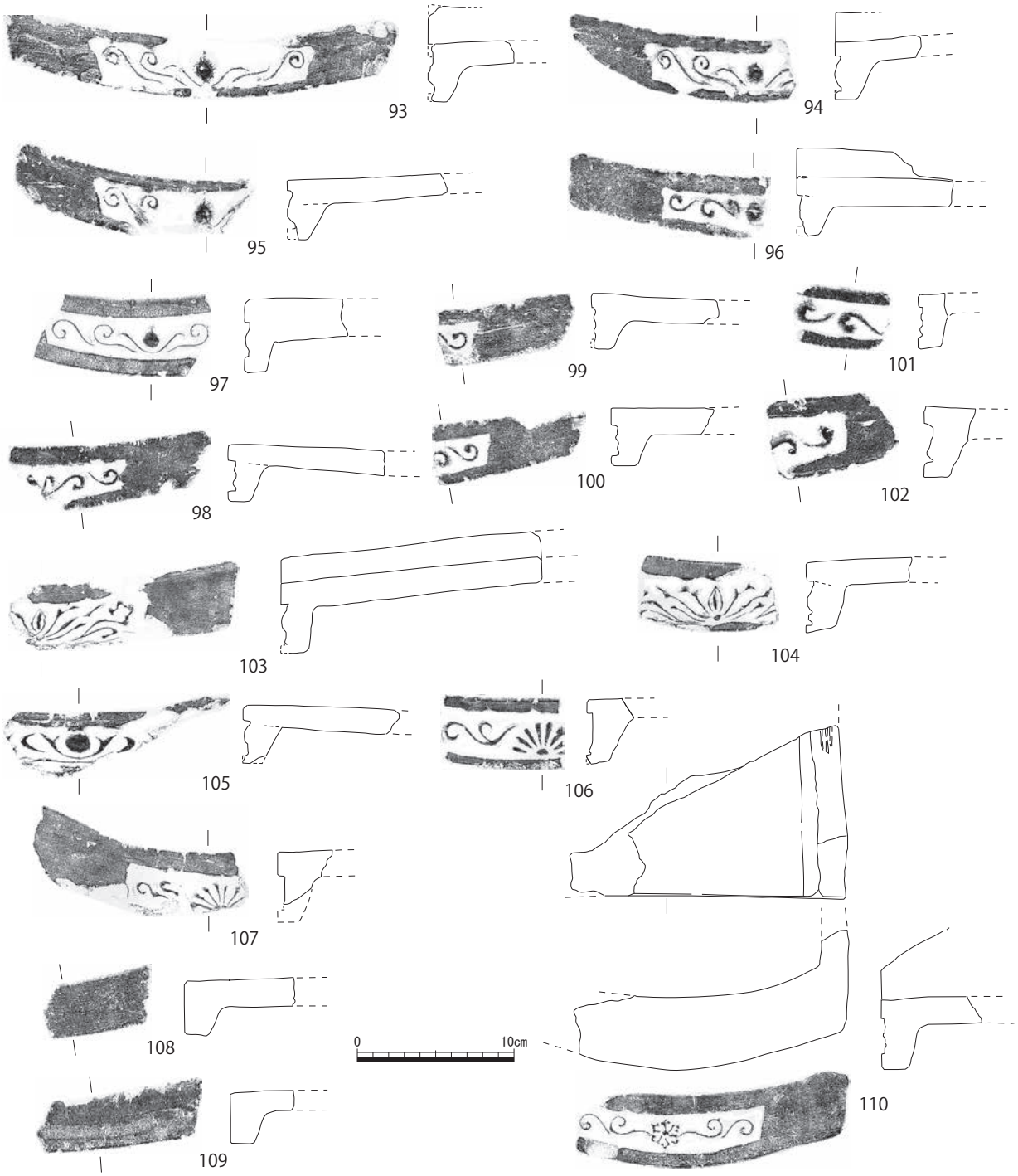
黒瓦には、93～96・98～110がある。93～95は、中心飾りが宝珠で、その脇に花弁状突線と内が上、外が下に向く二転唐草を配す。同紋瓦が聖廟・閑谷神社と鶴鳴門の中間のトレンチからも出土している。98は、宝珠の脇に花弁状に短く巻く突線を配し、二点する唐草は巴状をなす。101・102は、唐草が巴状となる。103・104は中心飾りが種子状を呈する側面蓮華で、同笵である。105は、中心が宝珠状の側面蓮華である。同紋瓦が鶴鳴門付近や公門西の集水井戸から出土しており、それによると二転唐草をもつ。106・107は、ほかと比べ炭素の吸着がよく、銀色を呈する。これらの黒瓦類は、いずれも瓦当部周縁や平瓦部凹面にはヘラミガキを施す。108・109は無紋瓦、110は中心飾りが六葉紋で、



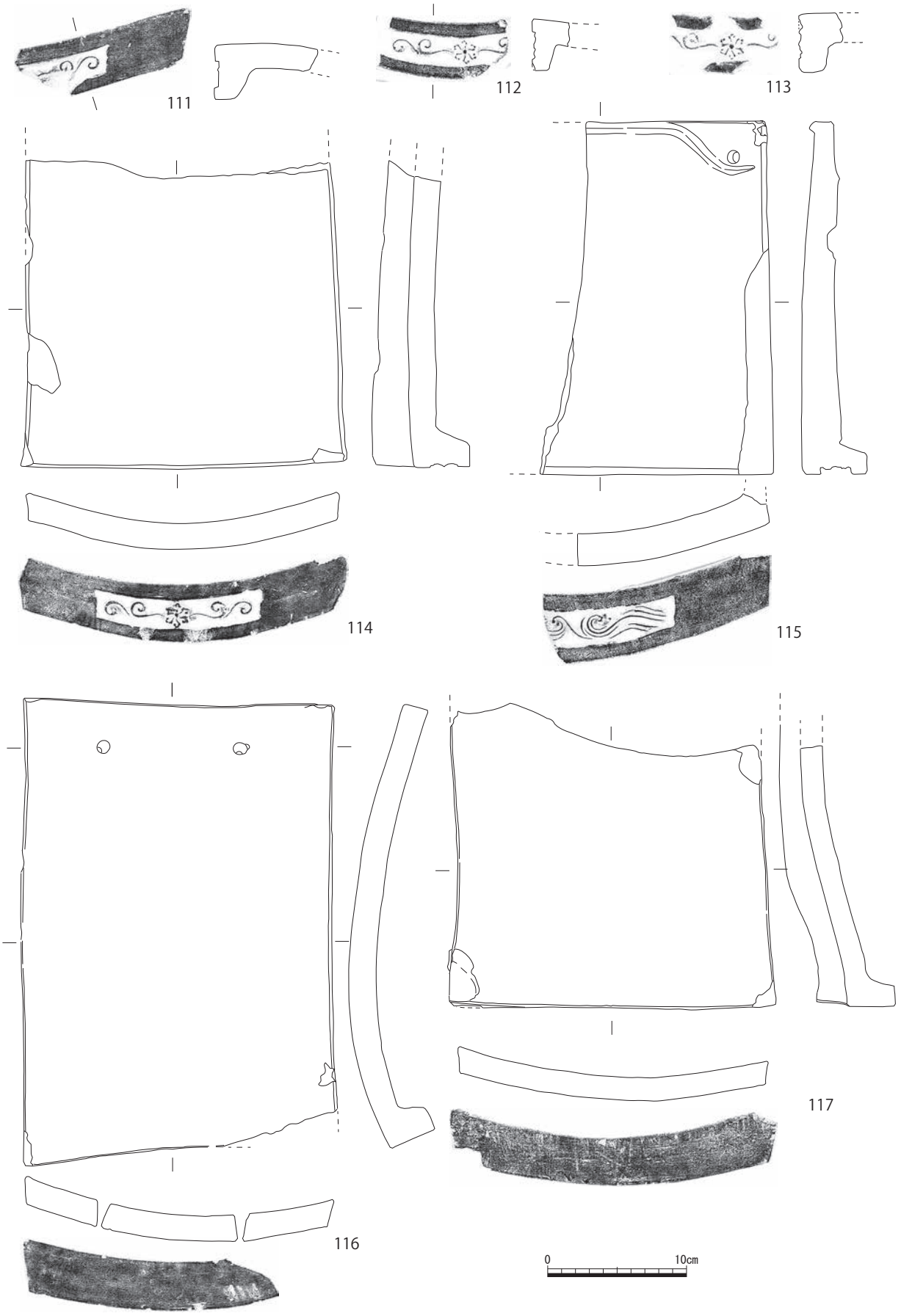
第23図　軒丸瓦（赤瓦）２（1/4）

瓦当面、凹凸面ともナデ仕上げである。110は、後述する赤瓦に同紋がある。

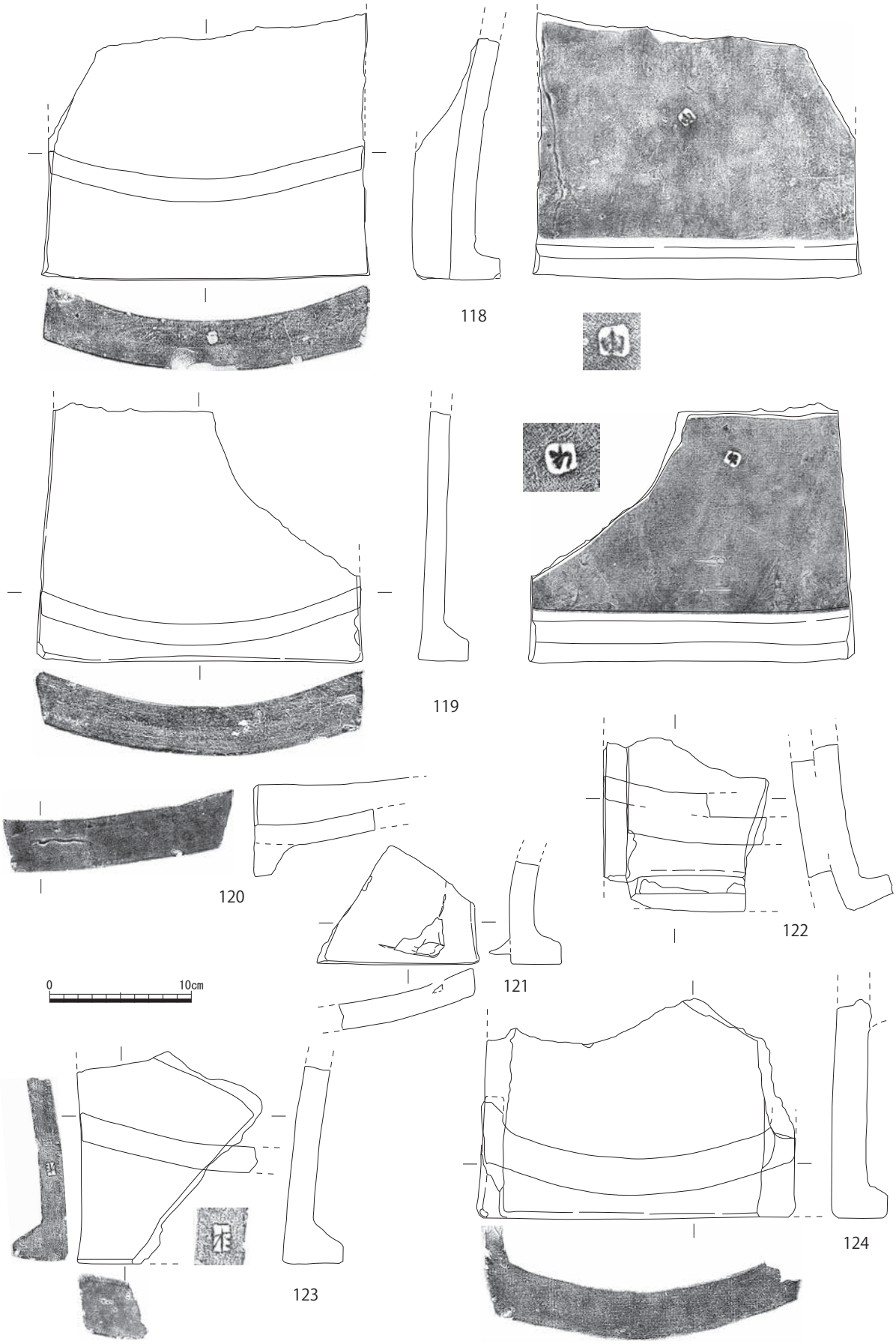
赤瓦の97は、今日の閑谷学校ではみられない。黒瓦と同紋であるが、上角に面取りを施し、平瓦部の器厚が27㎜と肉厚で、講堂地区の建物に葺かれた可能性がある。112～114は、中心飾りに六葉紋（六葉紋Ｂとする）を用い、唐草は内が上、外が下に向く二転である。115は波紋で、水返しの袖と突起がつく袖瓦である。116～124は、瓦当部が無紋である。121・122は、複数の瓦が溶着する。窯道具やその他の溶着瓦とともにＴ７溝から出土した。瓦当上角に面取りするもの、面取り後ナデ、面取りを施さないものがみられる。平瓦部には、陶印「わ」・「於」がみられる個体がある。



第24図　軒平瓦（黒瓦・赤瓦）１（1/4）



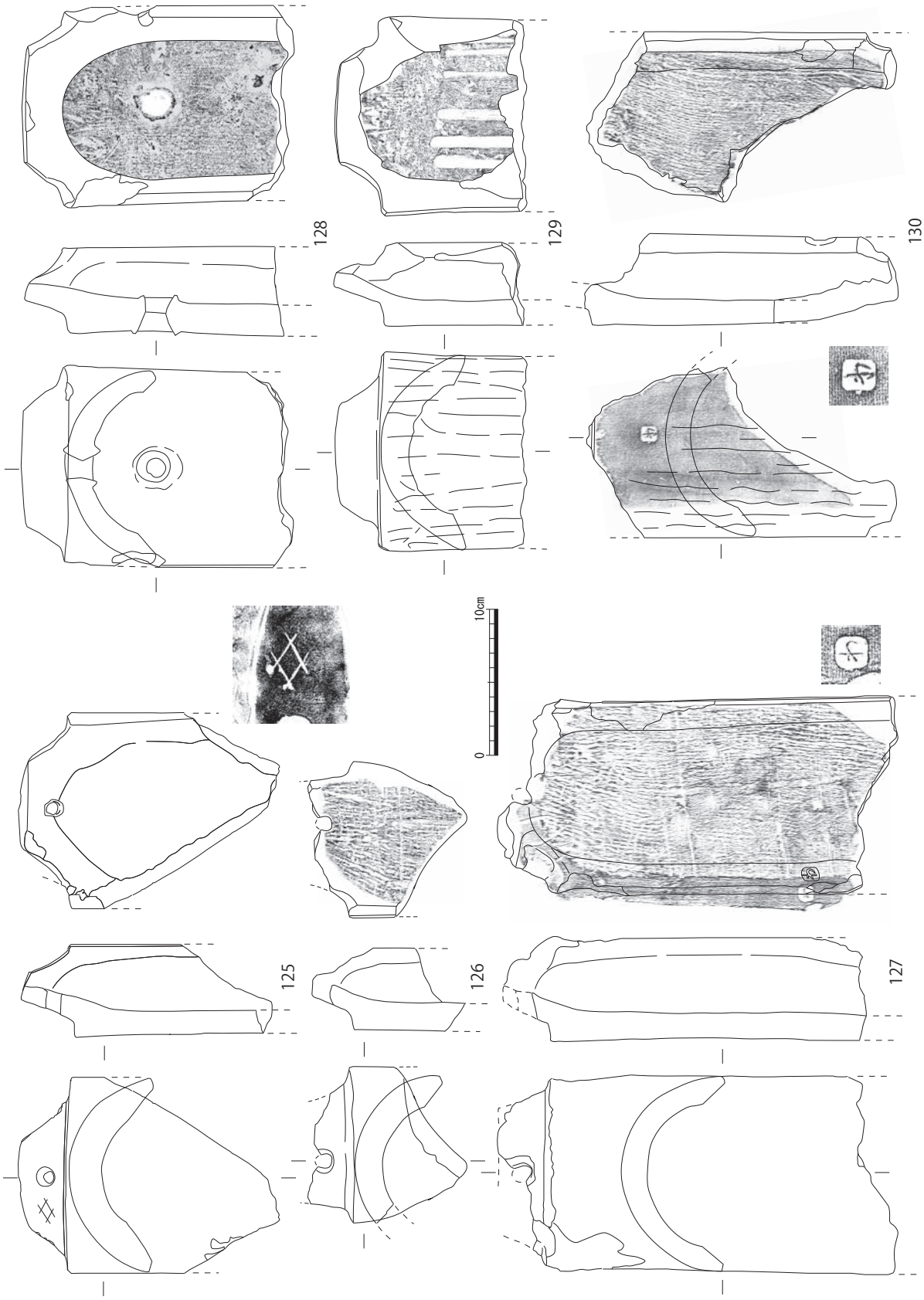
第25図　軒平瓦（赤瓦）１（1/4）



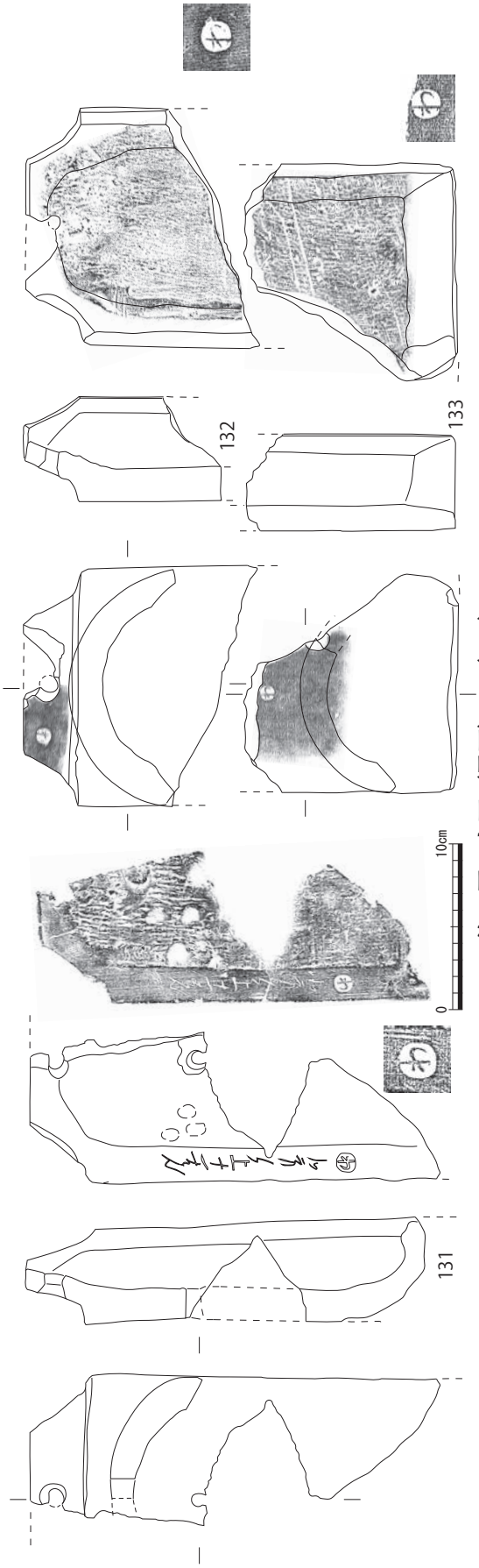
第26図　軒平瓦（赤瓦）２（1/4）

瓦当文様から、110・112～114は閑谷神社、115は講堂、108・109・116・117は聖廟の瓦で、それ以外の黒瓦は学房地区建物の瓦と考える。

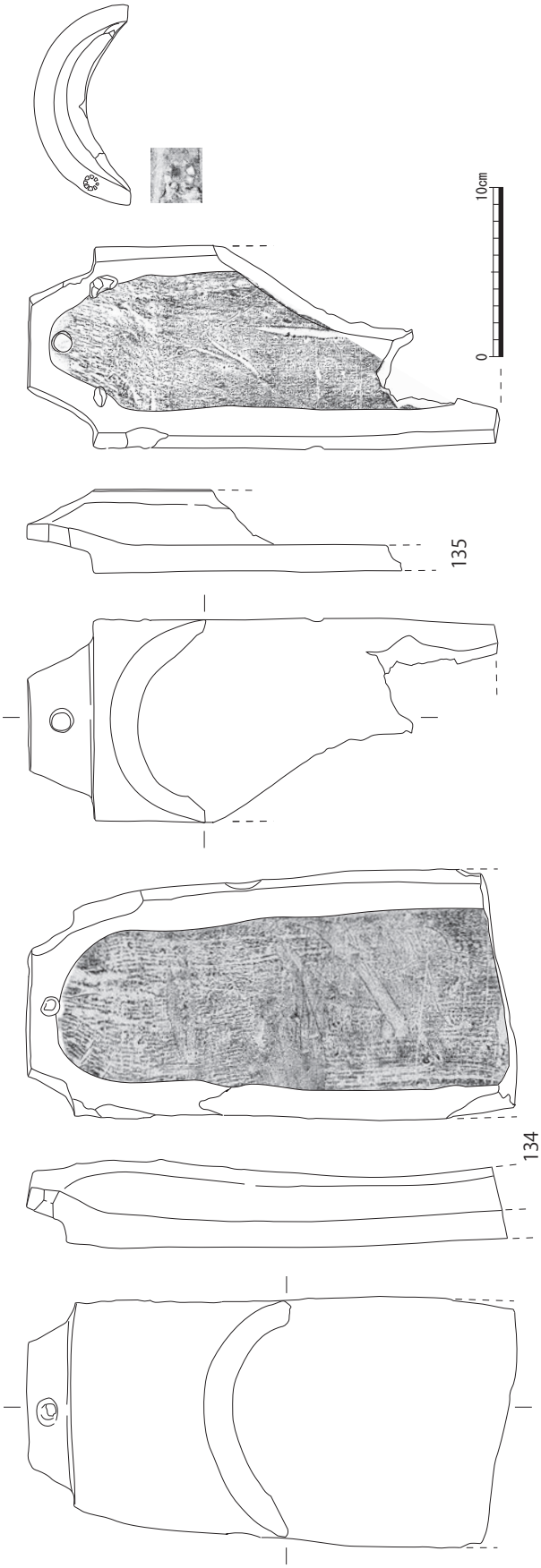
（３）丸瓦（第27～33図、図版６）



第27図　丸瓦（黒瓦）１（1/4）

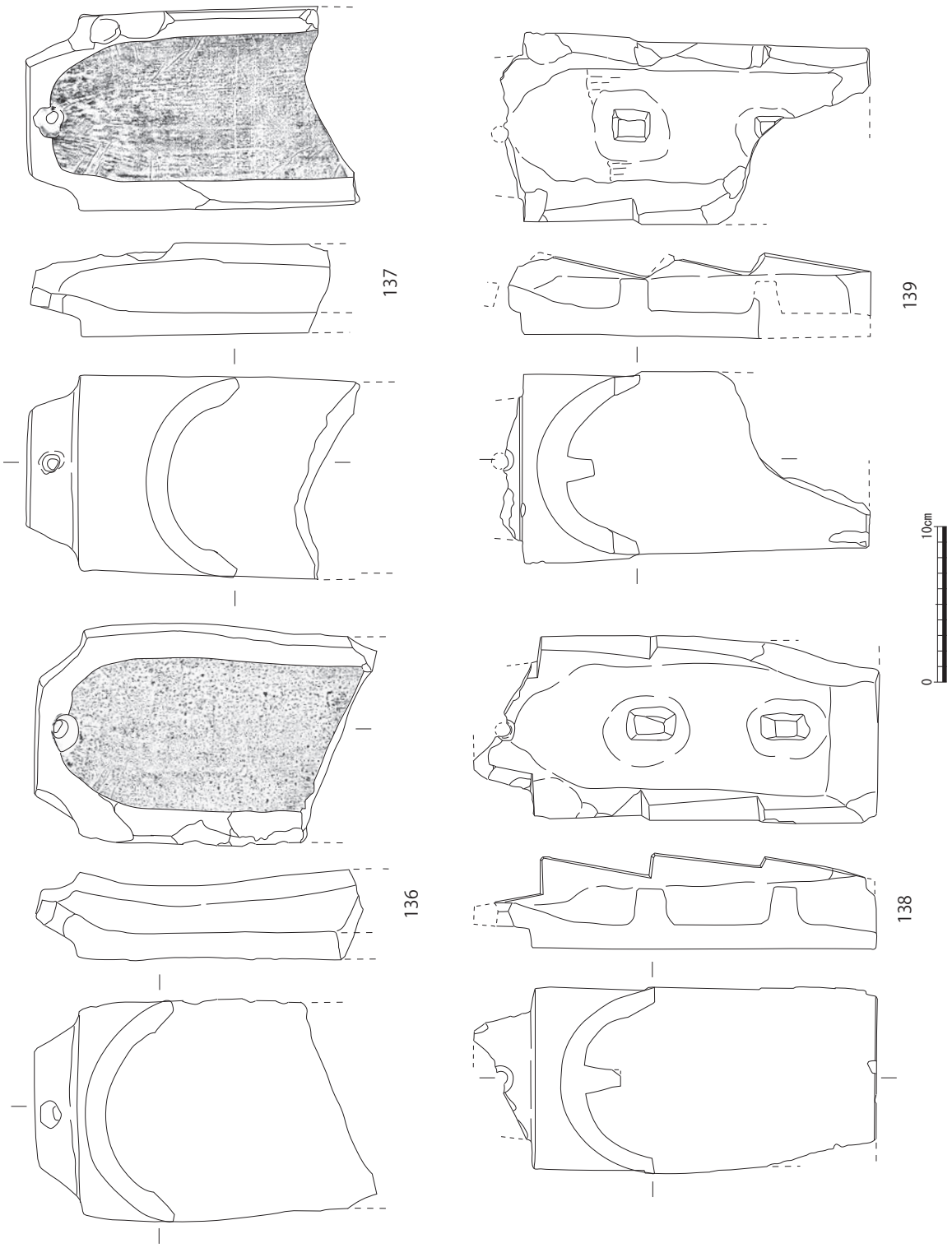


第28図　丸瓦（黒瓦）２（1/4）

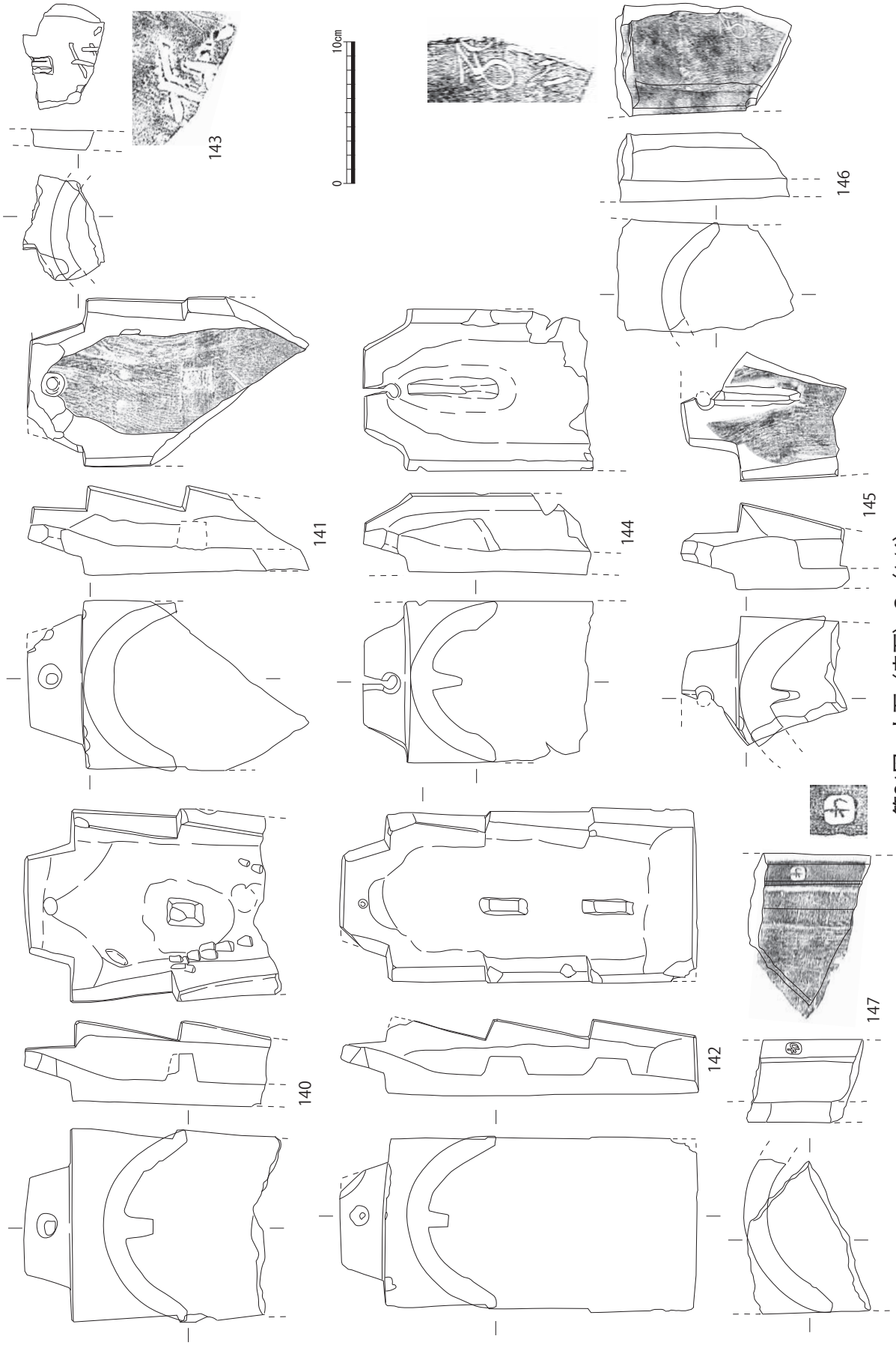


第29図　丸瓦（赤瓦）１（1/4）

黒瓦は、胴部に釘孔があるⅠ類（128）、閑谷特有の玉縁に釘穴をあけ、凸面に丁寧なヘラミガキを施し、凹面のゴザ状痕をナデ消すⅡ類（125～127・130）、凸面は幅広のヘラでナデ、凹面は細板押圧が残るⅢ類（129）は釘穴が無い。Ⅱ類がⅢ類より古い。赤瓦の凹面には、瓦棒に穿たれた「ほぞ穴」に差し込み瓦を固定するための「引掛け突起」がみられる。突起の無いものをＡ類とし、突起の形が方形（Ｂ類）、鰭状（Ｃ類）、環状（Ｄ類）、帯状（Ｅ類）の５種に分類する。Ｂ類はさらに突起の形が矩形に近いＢ１類：138～141とやや細長の長方形となるＢ2類：142があるが、丸瓦を受ける瓦棒と

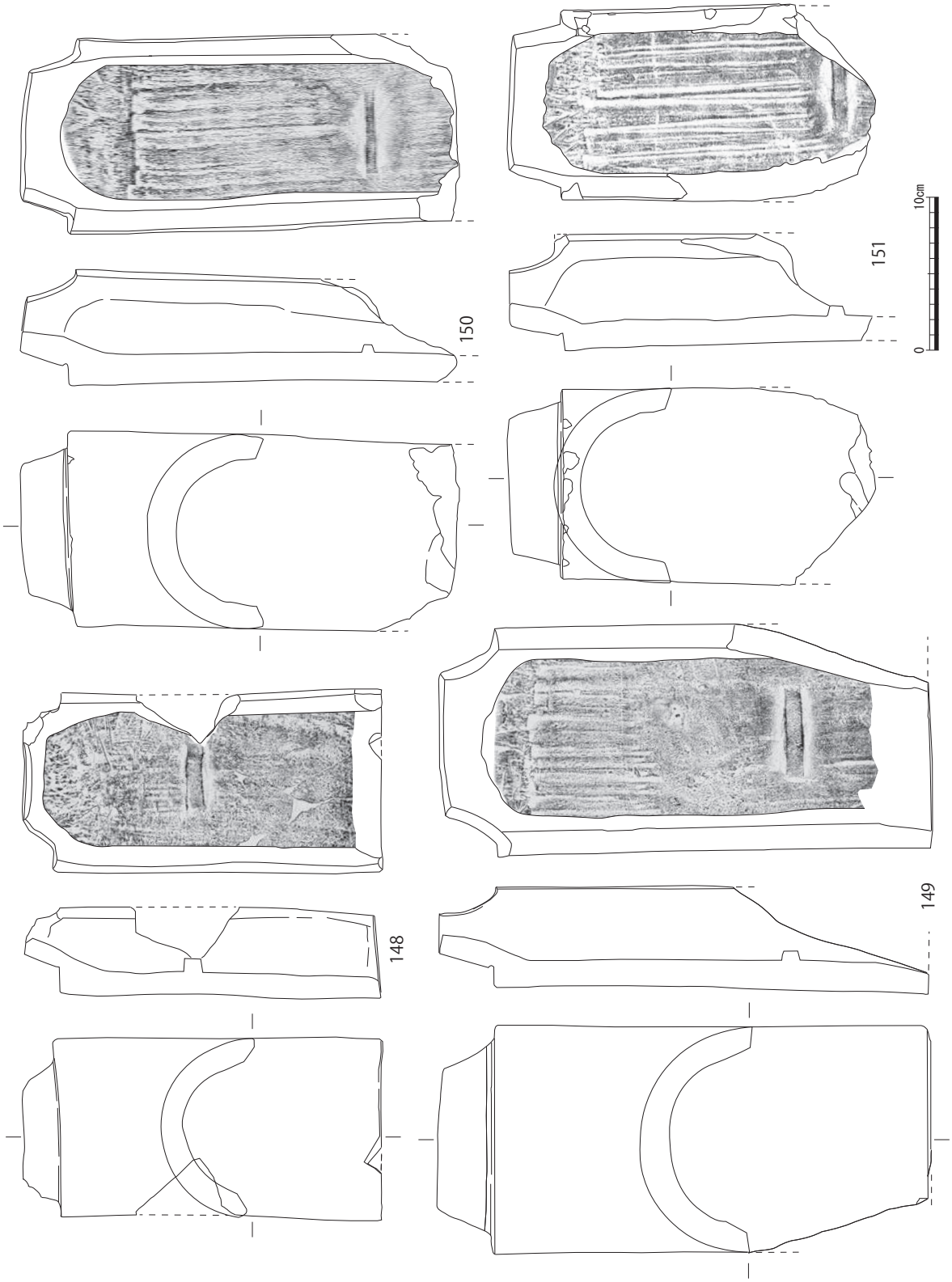


第30図　丸瓦（赤瓦）２（1/4）



第31図　丸瓦（赤瓦）３（1/4）

同様で胴部の両側面下端に平瓦を受けるための「くり込みが」２か所ある。瓦棒Ｅ類は、他類に比べ胴部高が高く、突起の位置が下１／４位に位置する場合が多い（ＥＩ類：149～151）が、中位にくる個体（Ｅ２類：148）もあり内面の調整が異なる。Ａ～Ｃ類では釘穴を玉縁の背部から穿つが、142のように釘が通らない程先端が細い種類も存在する。Ｄ・Ｅ類には釘穴はない。さらに、Ｄ・Ｅ類では、

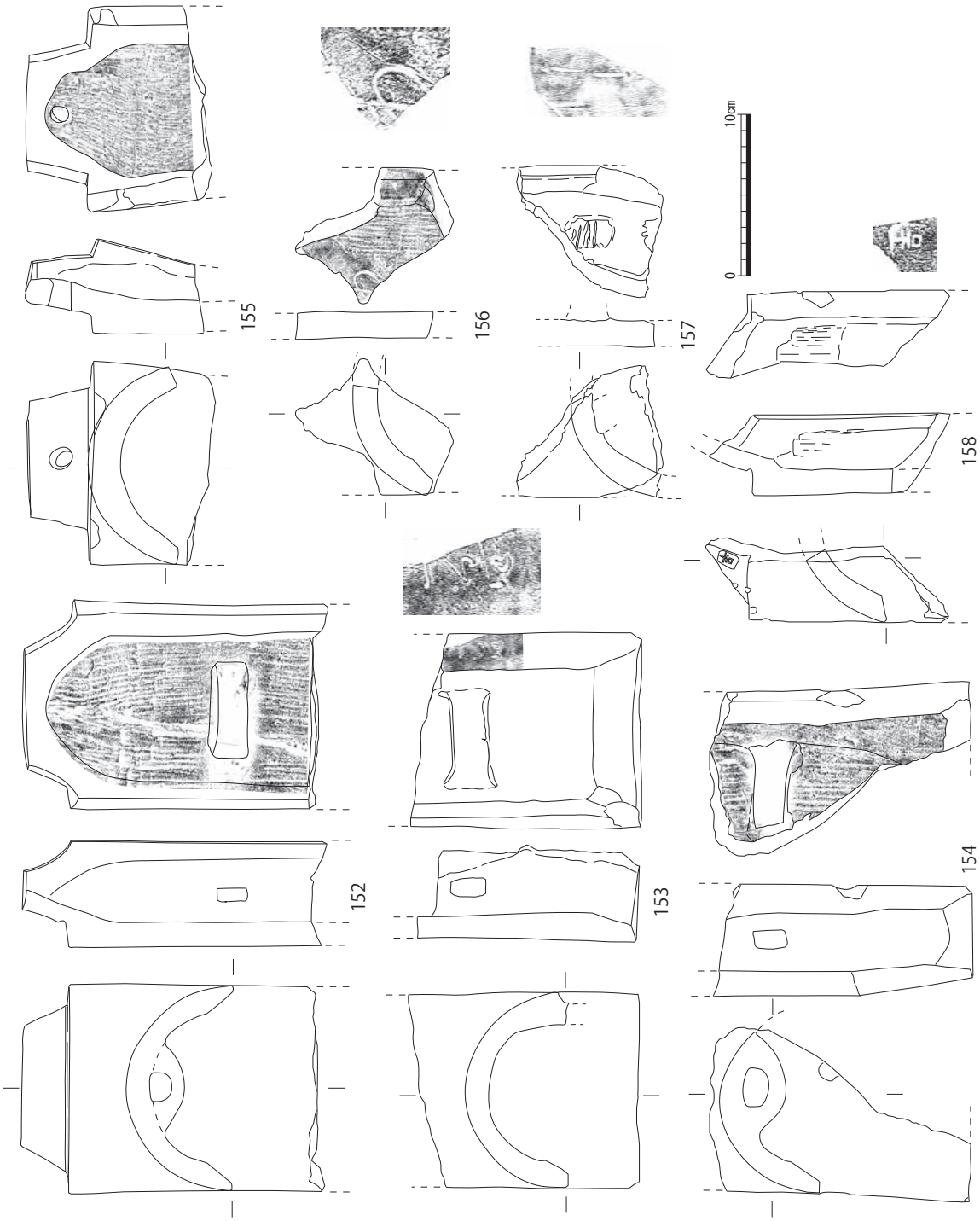


第32図　丸瓦（赤瓦）４（1/4）

凸面の玉縁部と胴部の境に仕切り溝が廻り、凹面には細板押圧痕が残る。また、Ａ～Ｄ類は、凹面に面取りを施すが、凸面の調整にはヘラミガキ、ヘラナデ、ナデに分かれる。Ｂ類のうち突起が矩形タイプでは塗り土のハケが残り、長方形タイプにはヘラナデがみられる。E類では、面取りを省略して分割破面を幅広に残し、その内側を強くナデるという特徴がある。

（４）平瓦（第34～48図、図版７）

黒瓦は、凹面や側・端面をヘラミガキで、凸面はナデて仕上げる。赤瓦には凸面にクシ目を施すⅠ類と凹凸面ともナデ仕上げで無紋のⅡ類があり、両者の比率は、Ⅰ類35％、Ⅱ類65％である。

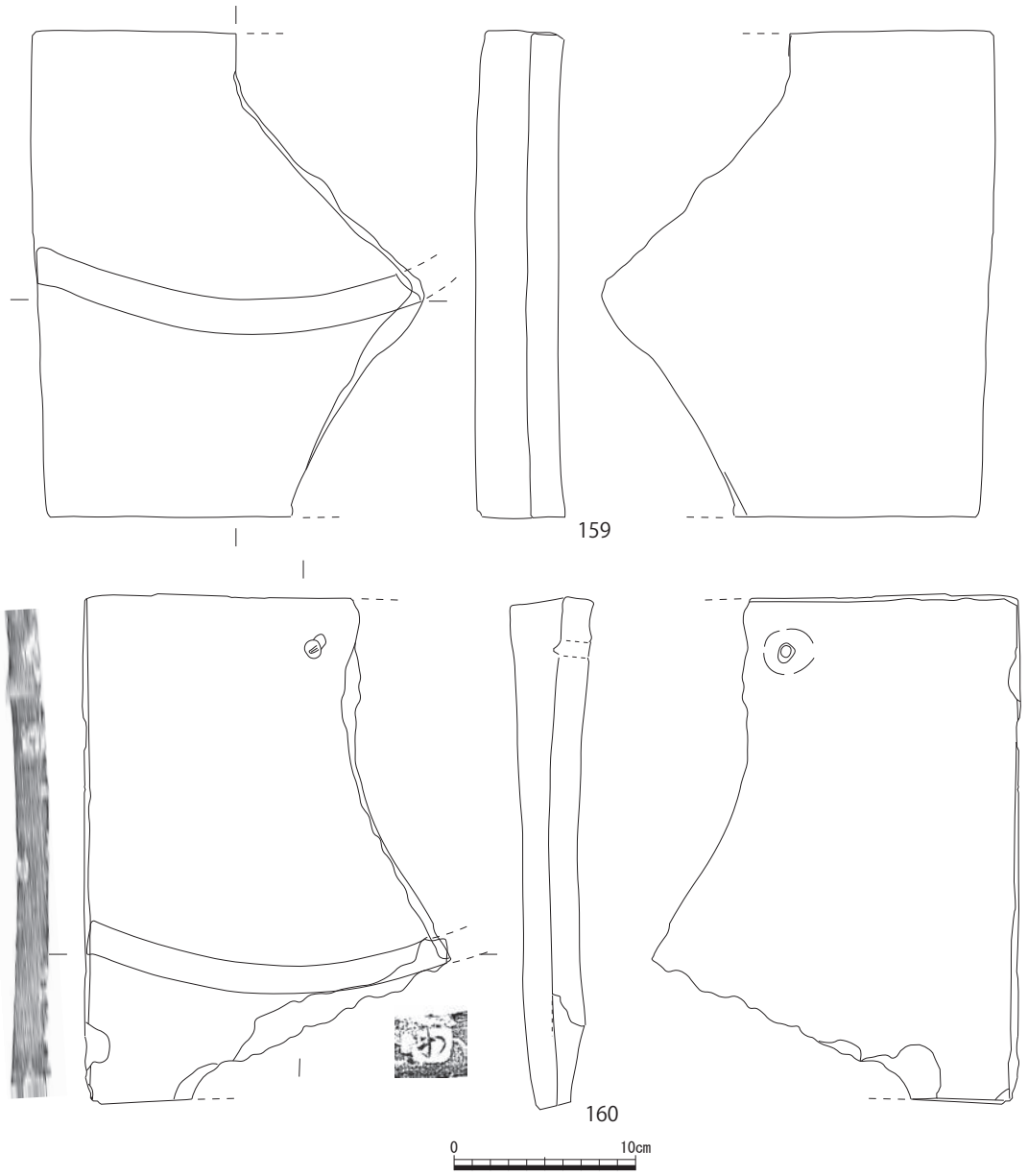


第33図　丸瓦（赤瓦）５（1/4）

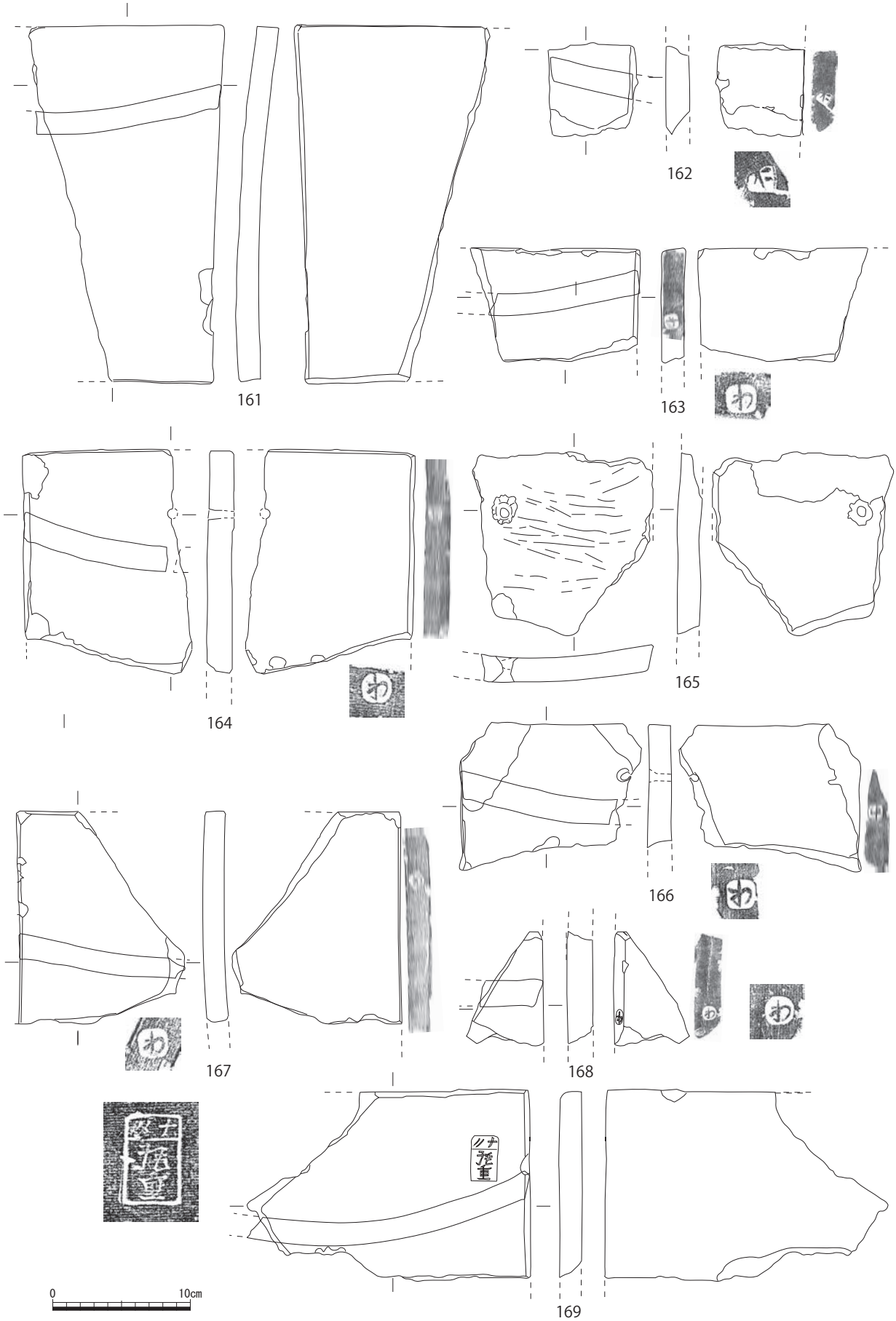
クシ目は凸型台で施紋され、その後に端面や側面をヘラやナデで調整する。釘孔は凹面から穿孔し、凸面の釘孔周囲をナデて仕上げる。全体像がわかる資料は無いが、クシ目の文様は直線紋が大半でその他は波状紋の破片が１点（177）、渦巻き紋・綾杉紋やヘラガキ文字やクシガキ文字は皆無である。

釘穴は、焼成後穿孔（165）＝打ち欠きと焼成前穿孔があるが、焼成後穿孔は少ない。凹型台で調整後に穿孔している。工具は、釘孔の形状から、有段型（ア）と円柱型（イ～エ）の２タイプがある。基本的に凹面から穿孔し、凸面側の孔の周縁を指でナデるが、Ⅱ類平瓦では穿孔具による圧によって、凸面が円丘状に隆起する。さらに、未完通（ウ：釘が通らない程度も含む。）や釘孔無し（エ）も存在する。平瓦Ⅰ類では釘孔ア・イが、Ⅱ類では釘孔イ～エが確認できた。平瓦の大きさは、高さが、①22～23㎝、②25～26㎝、③33㎝前後に別れて、①・②は厚さが15～16㎜である。③は厚さが18～20㎜で講堂瓦である。赤瓦のⅠ類が橙から浅黄色、Ⅱ類は橙から暗赤褐色で、Ⅰ類がやや軟質を呈す。

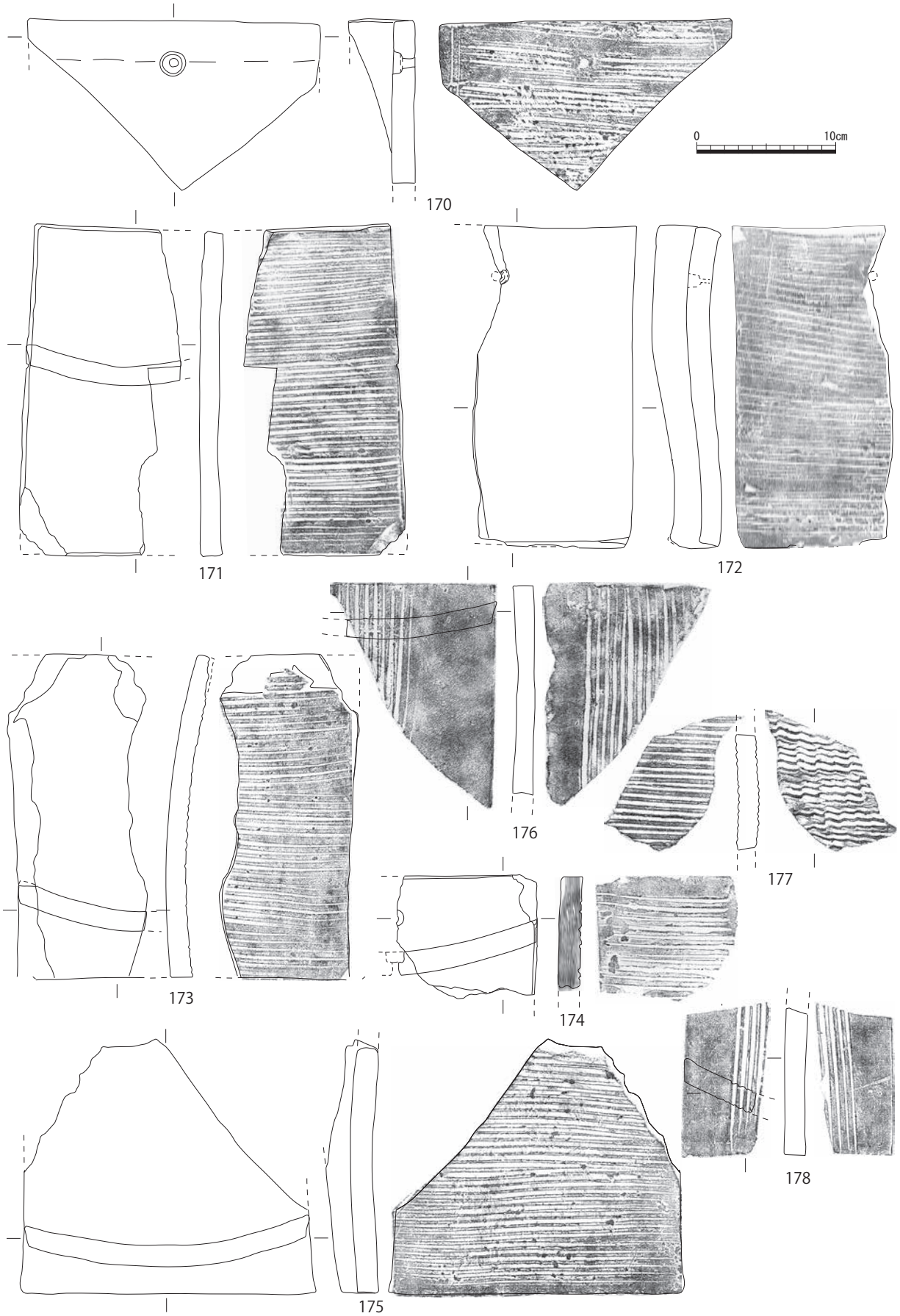
Ｔ７溝から歪みの著しい190や釉によって溶着した瓦202～206が出土している。202は、５枚が確



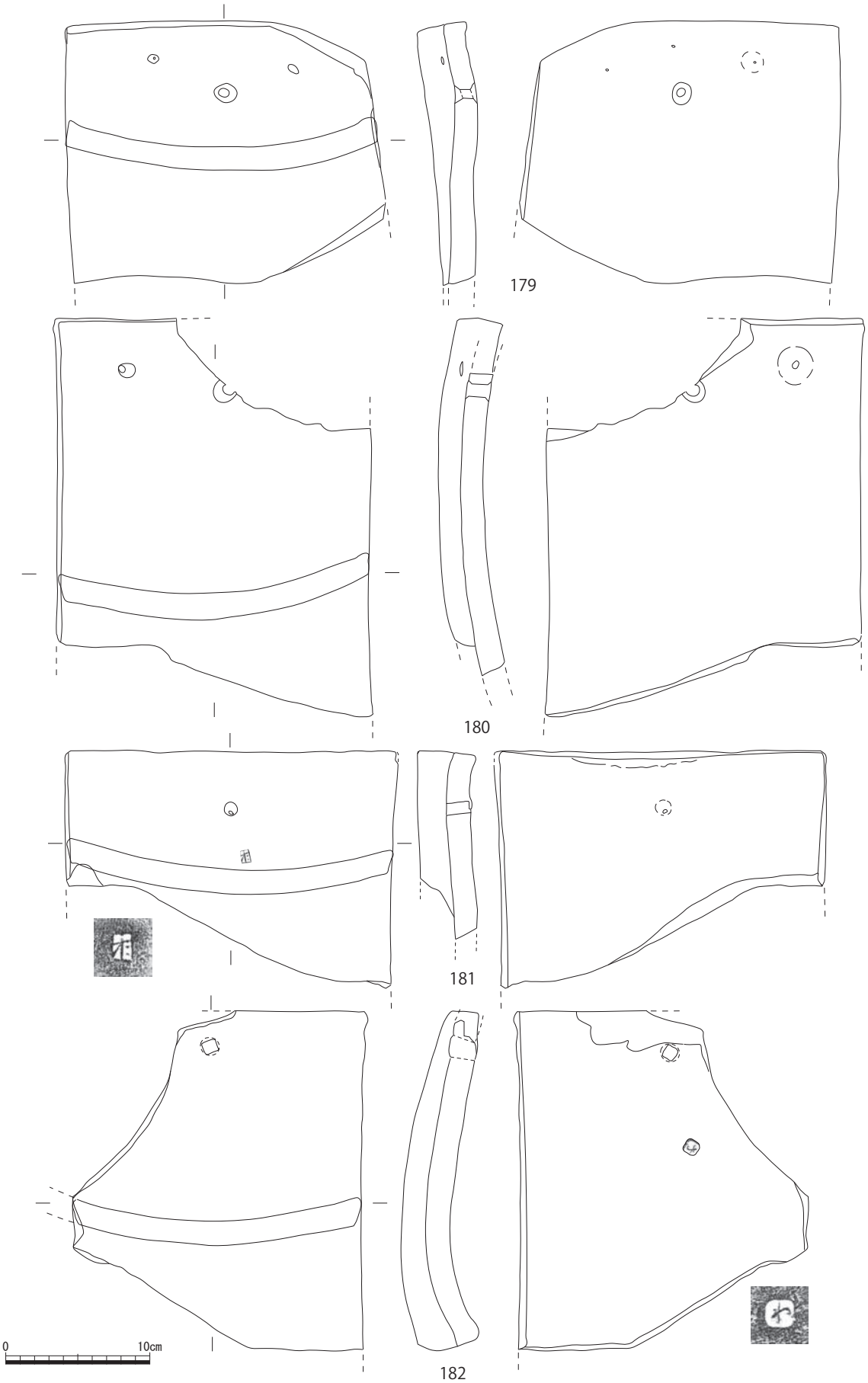
第34図　平瓦（黒瓦）１（1/4）



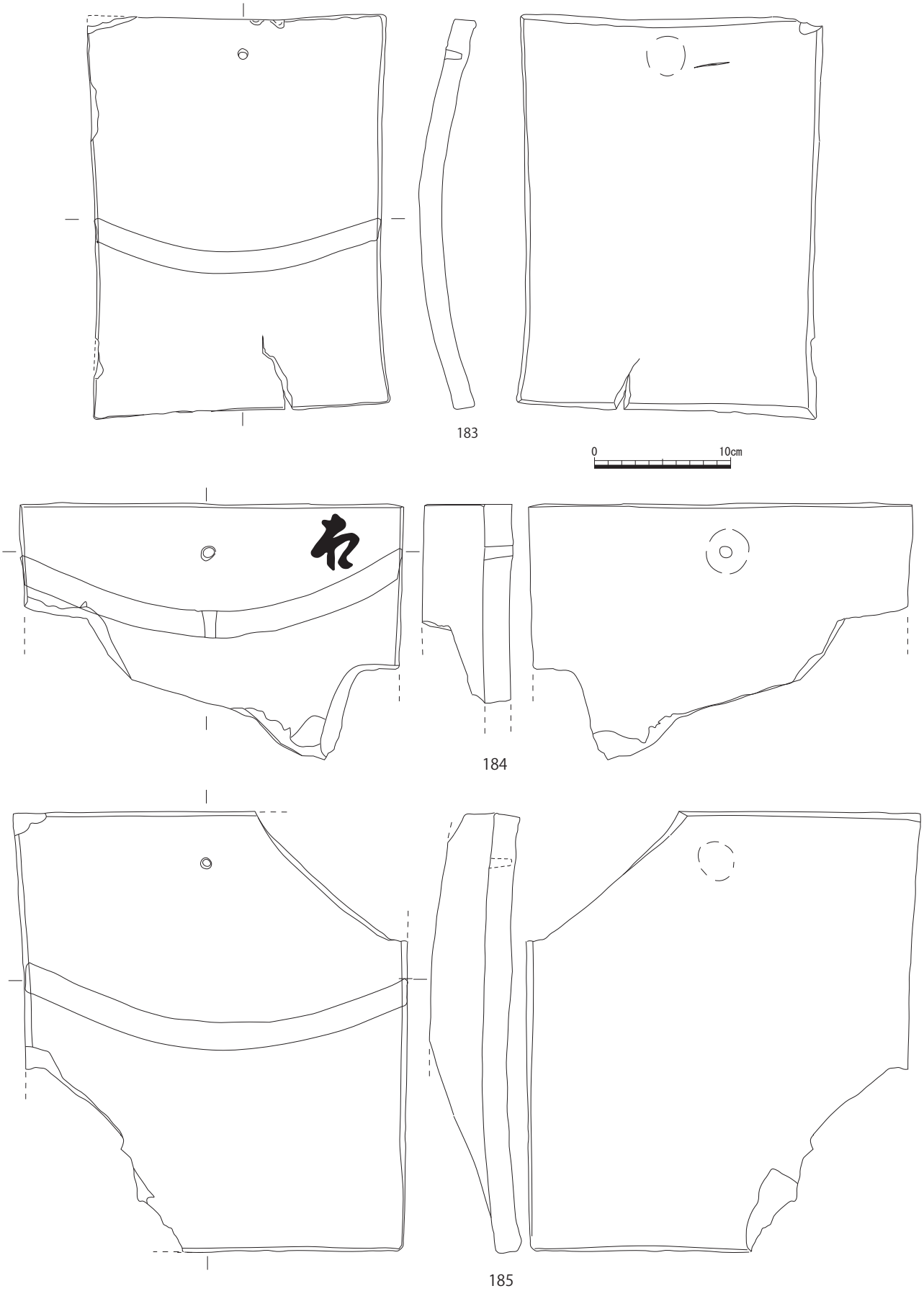
第35図　平瓦（黒瓦）２（1/4）



第36図　平瓦（赤瓦）１（1/4）



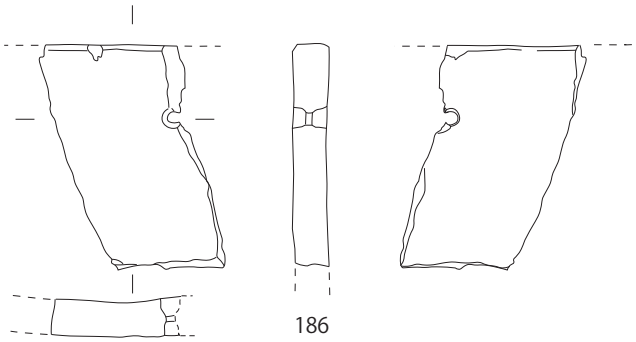
第37図　平瓦（赤瓦）２（1/4）

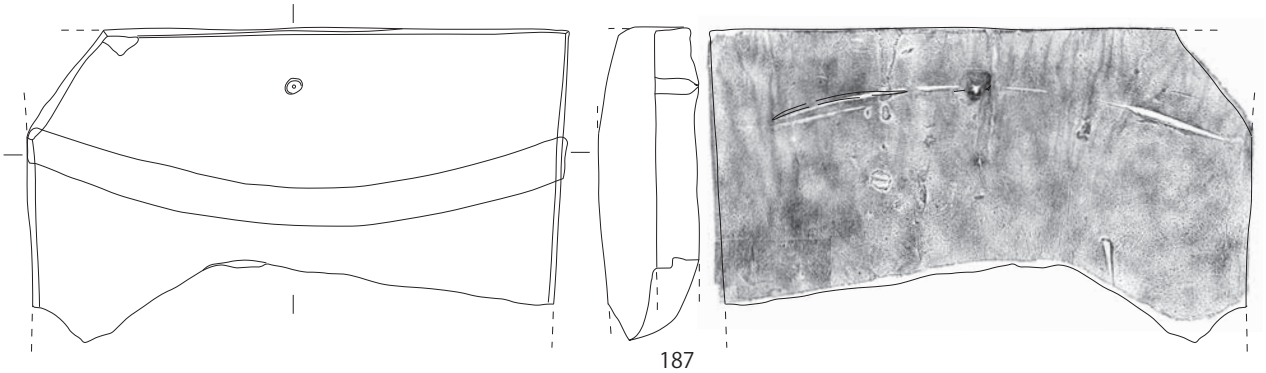


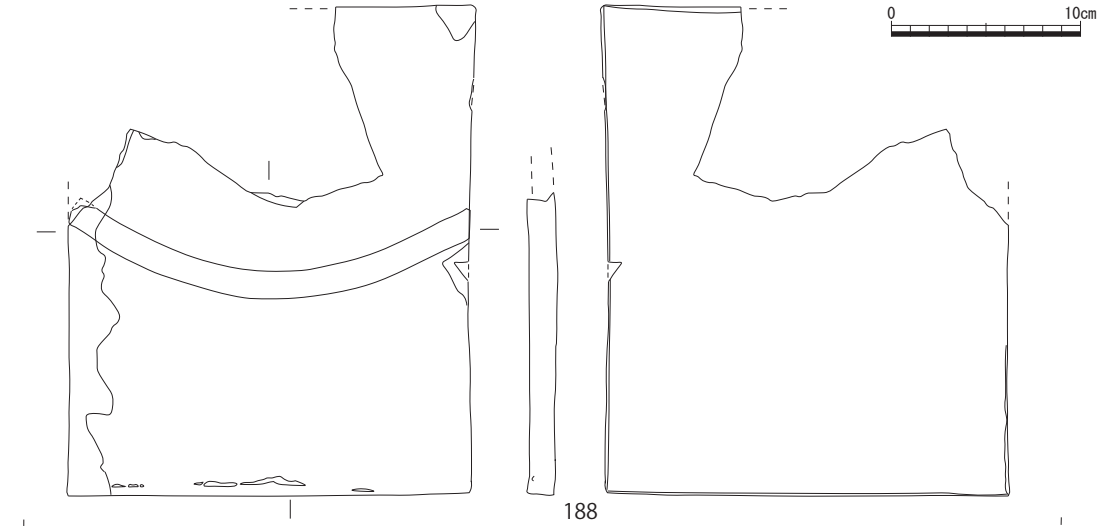
第38図　平瓦（赤瓦）３（1/4）

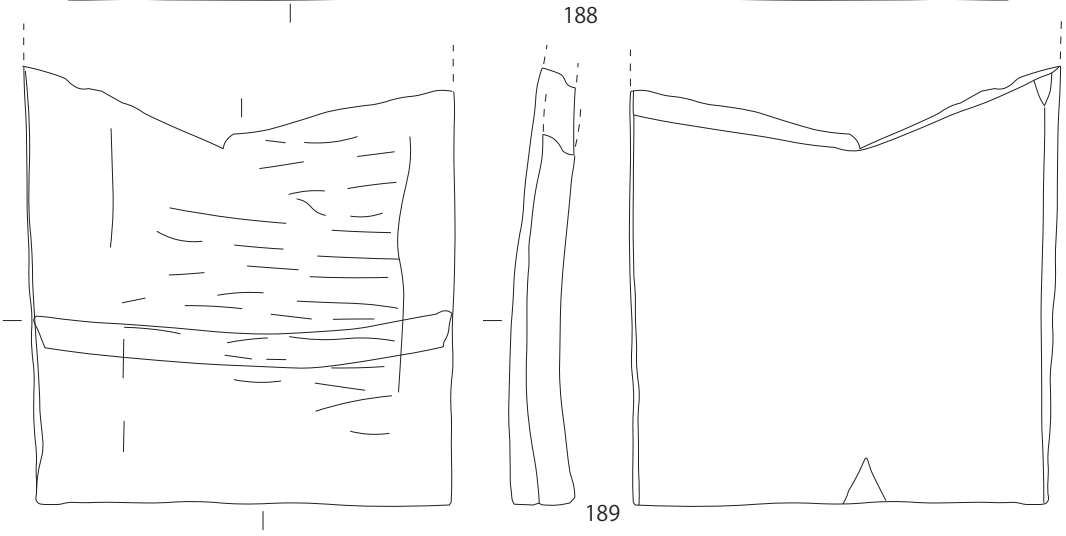
認でき（１枚は剝離痕）、無紋瓦（１枚）とクシ目瓦（２枚）が同時に焼成されたことを示す。

平瓦には刻印やヘラガキ（記号・文字）、墨書がある。とりわけ刻印やヘラ記号（図版10）は、製作者を示す可能性が高い。刻印は、Ⅱ



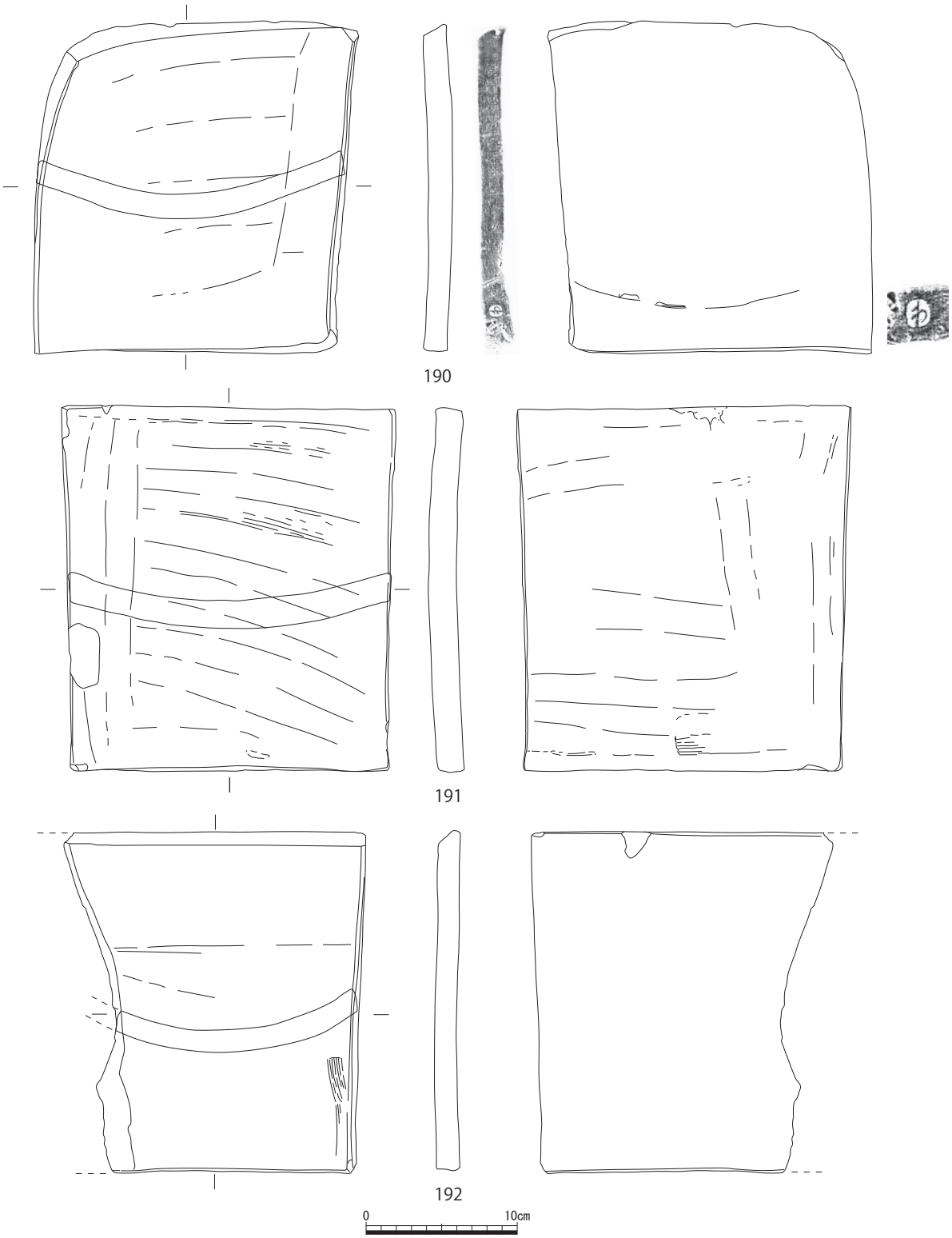




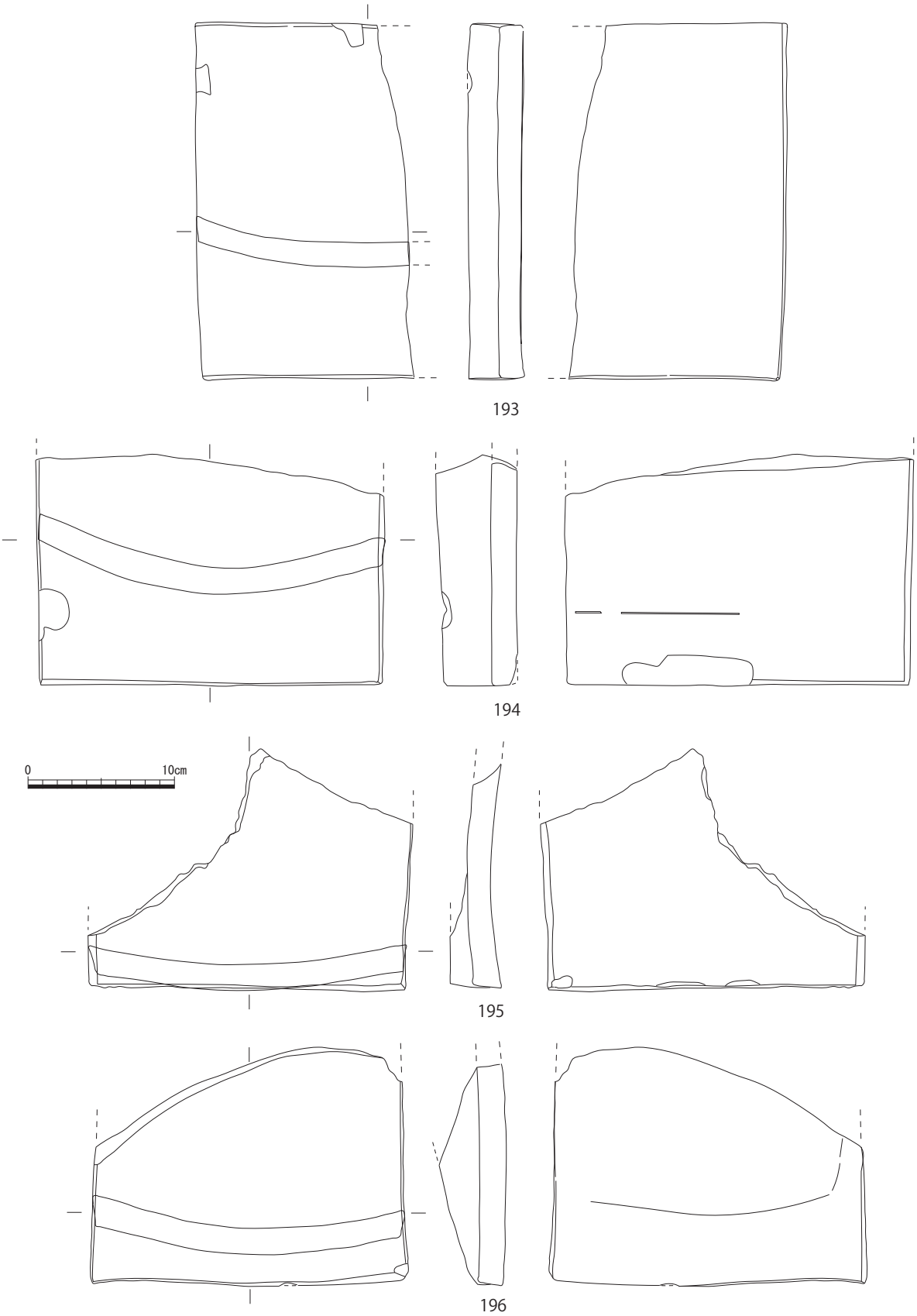


第39図　平瓦（赤瓦）４（1/4）

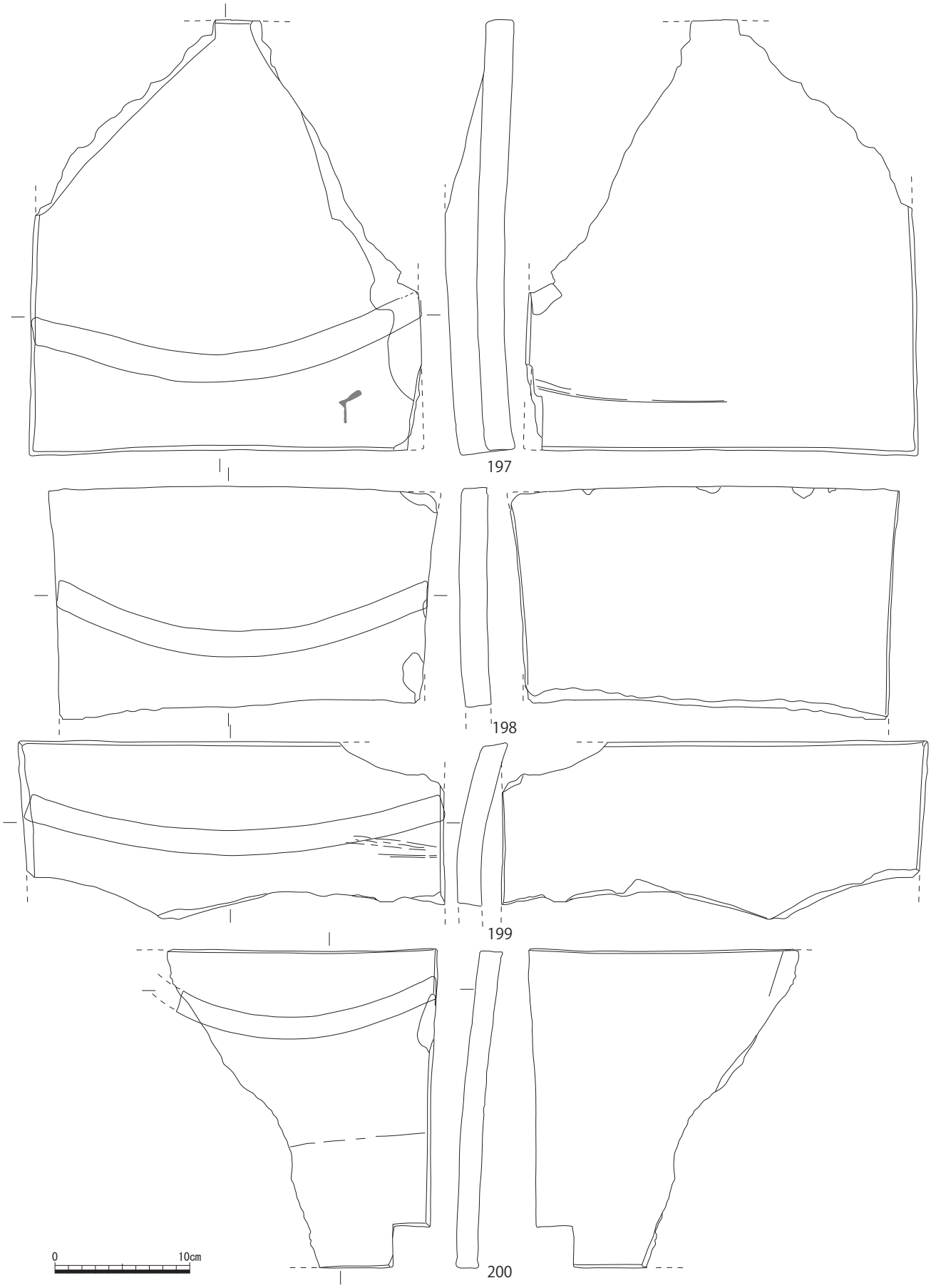
類瓦のみにみられ、ひらがなや漢字の一文字「わ」・「於」・「吉」、カタカナと漢字一文字の組み合わせで「キ平」・「ミ四」など64個を確認している。凹面では釘孔穿孔後に押印する。Ⅰ類ではヘラ記号を１点確認したのみである。169は、近代瓦で産地「ナダ」、瓦師「松重」と記す。また、209には、「試」の文字があり、「試作砂」あるいは「試砂作」銘瓦のうちの１枚である。210・211には、陶印と同じ「於」がヘラガキされる。平瓦類では、黒・赤瓦とも布目やコビキ痕、離れ砂は看取できていない。



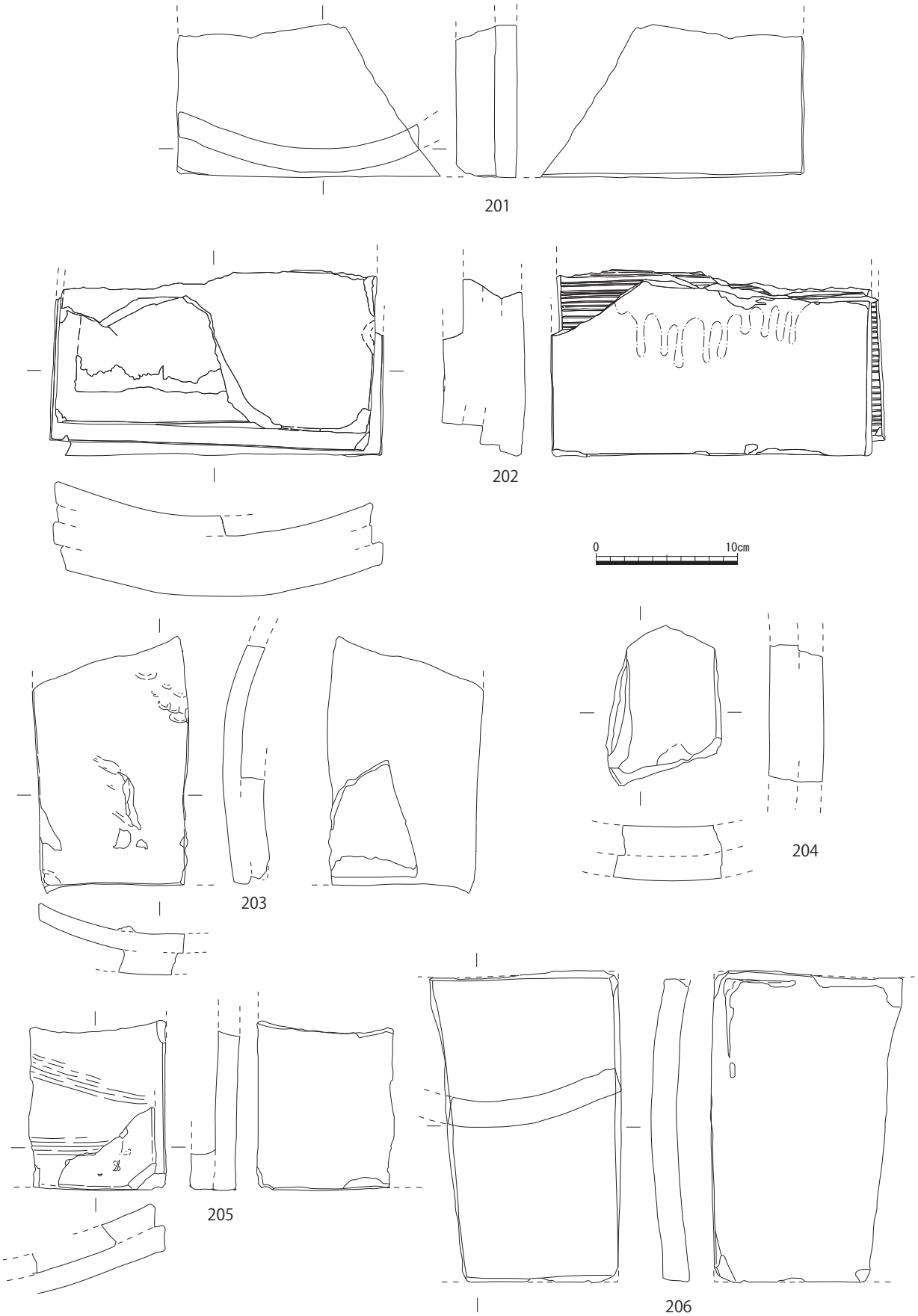
第40図　平瓦（赤瓦）５（1/4）



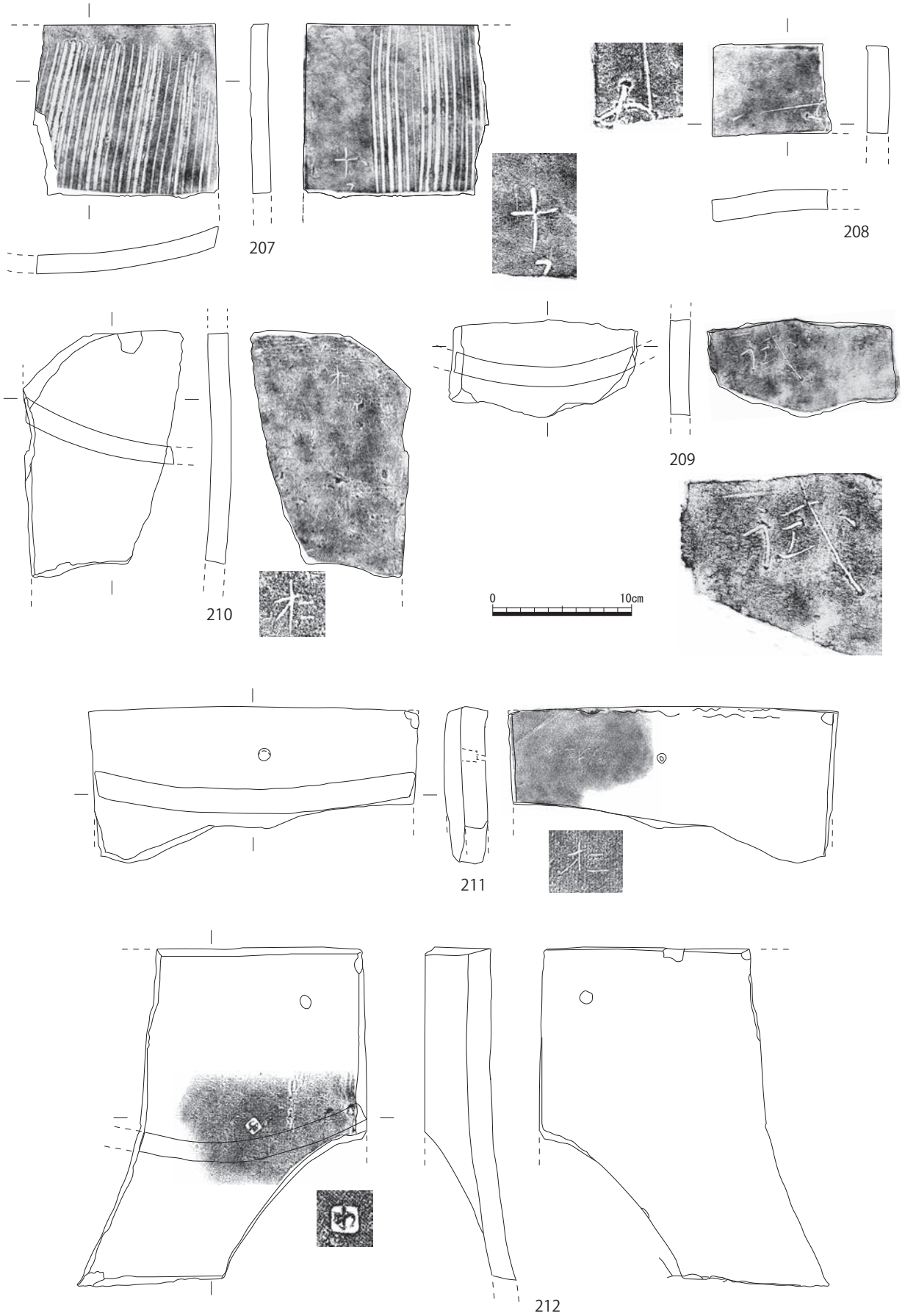
第41図　平瓦（赤瓦）６（1/4）



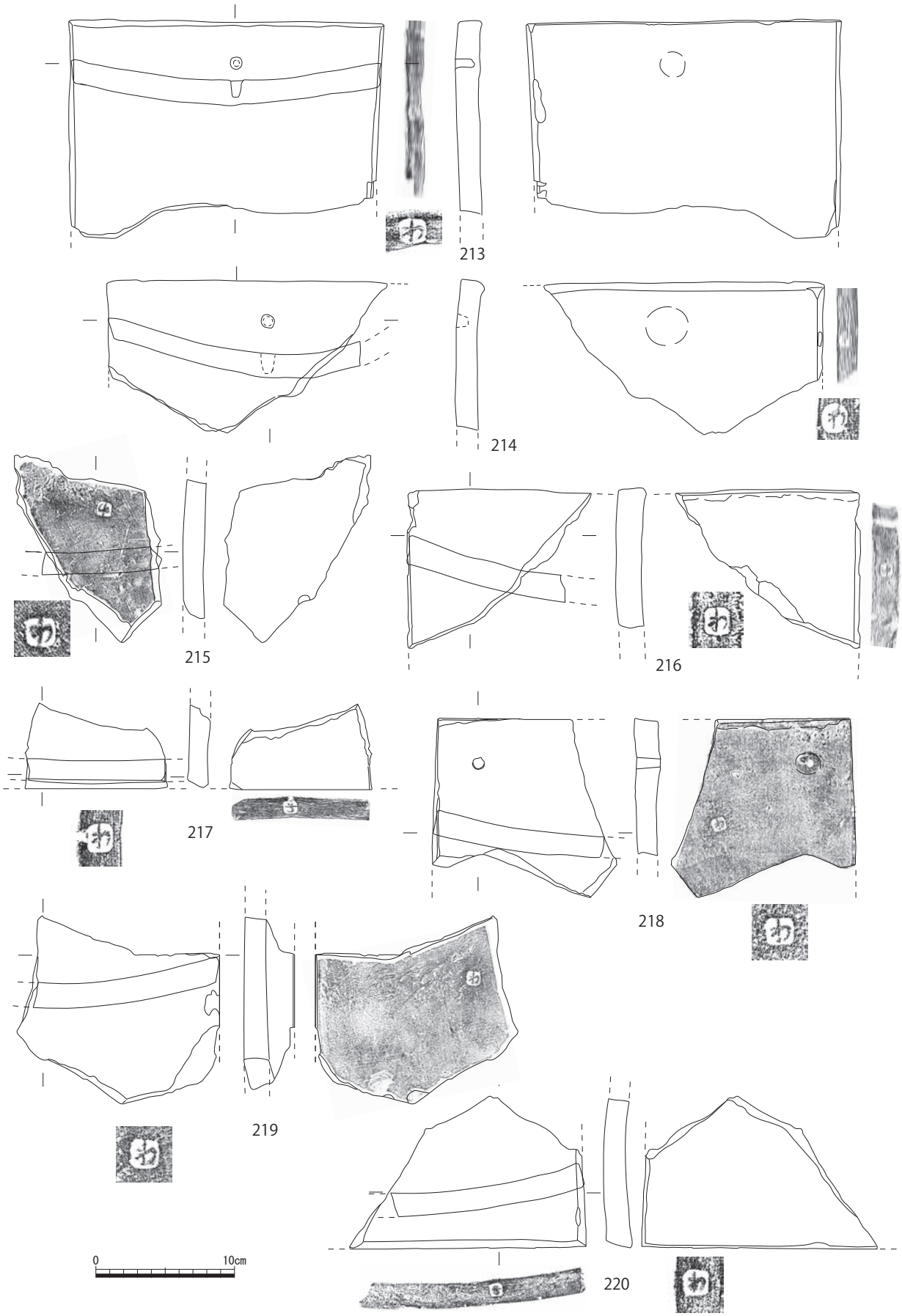
第42図　平瓦（赤瓦）７（1/4）



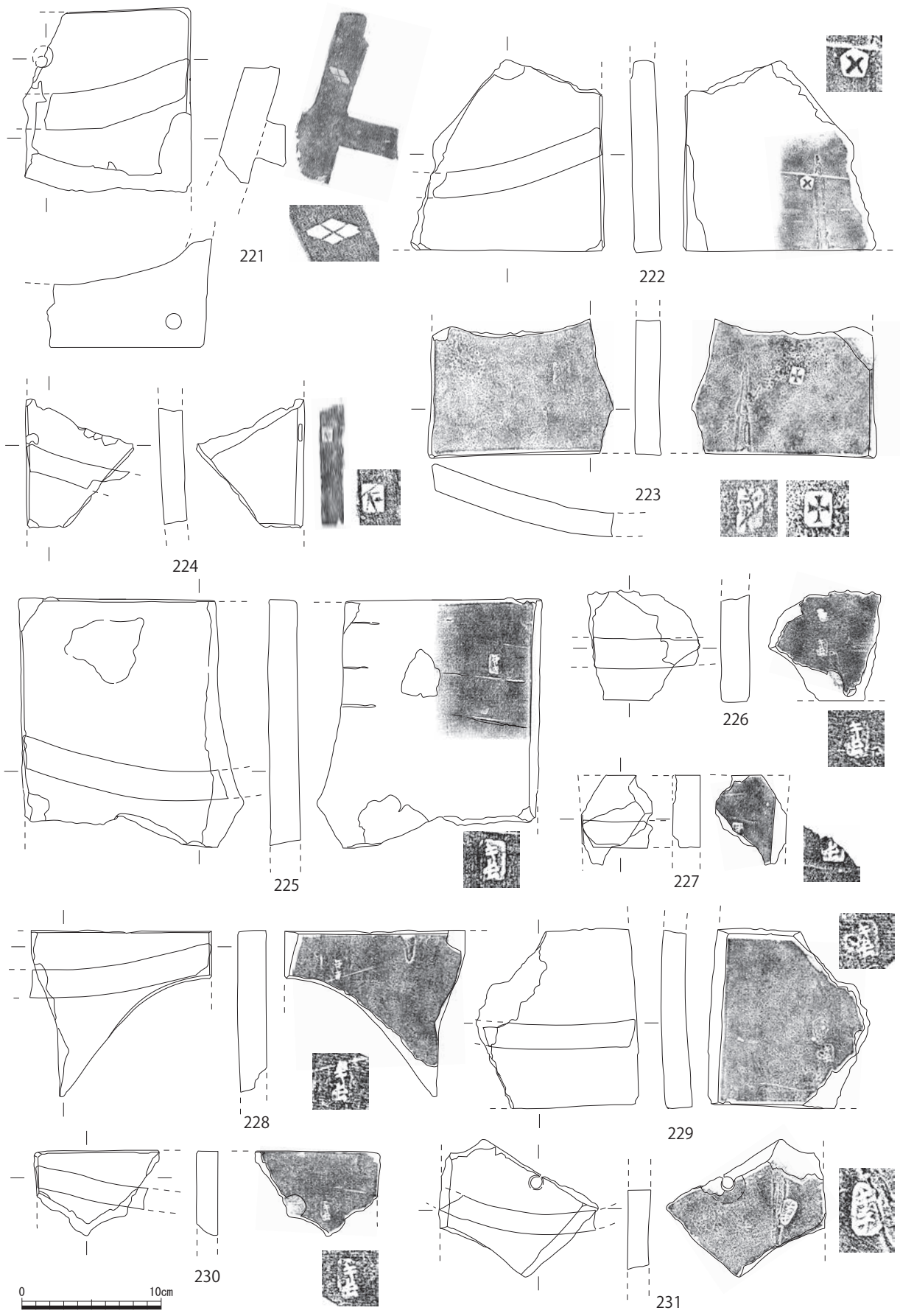
第43図　平瓦（赤瓦）８（1/4）



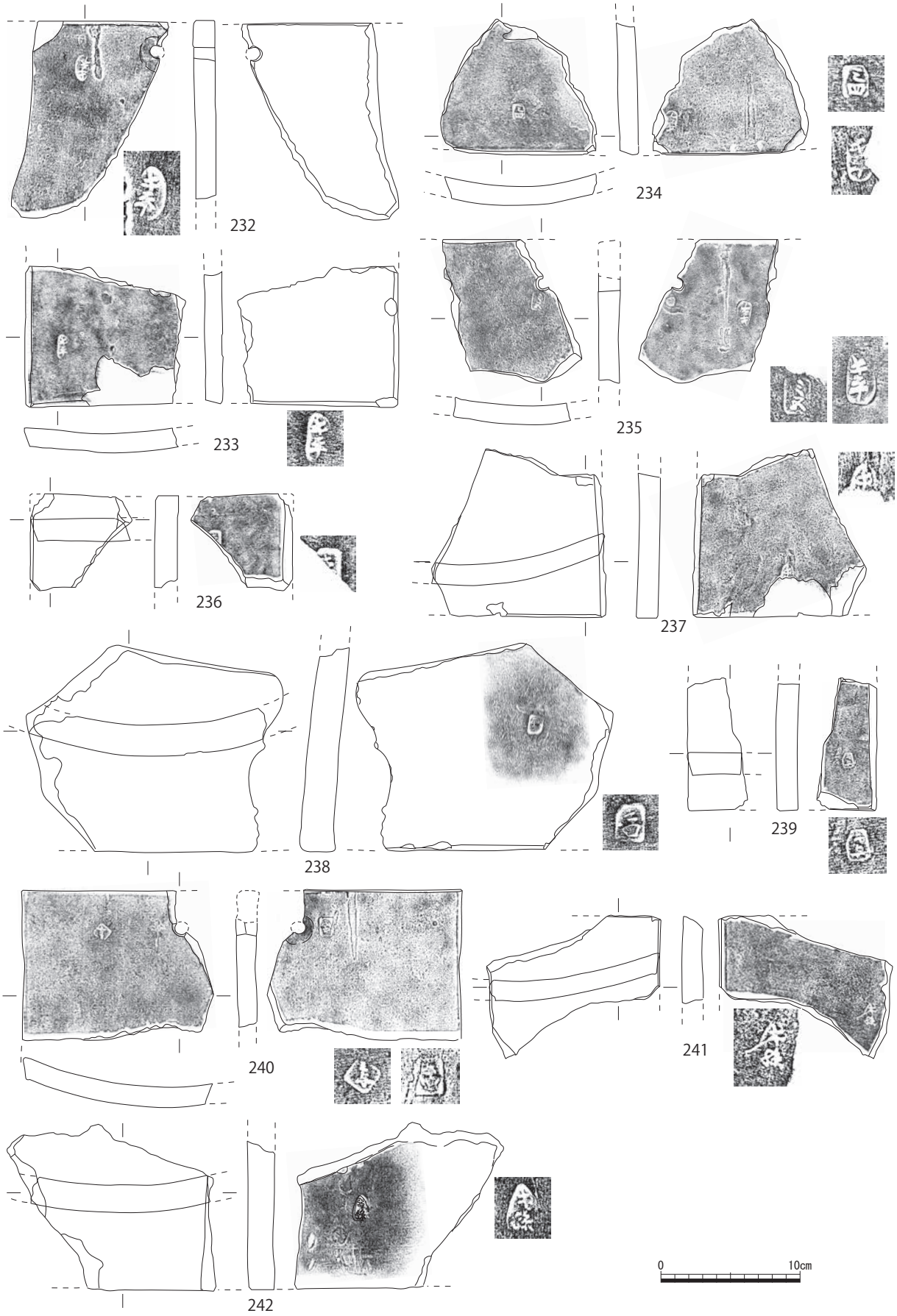
第44図　平瓦（赤瓦）９（1/4）



第45図　平瓦（赤瓦）10（1/4）



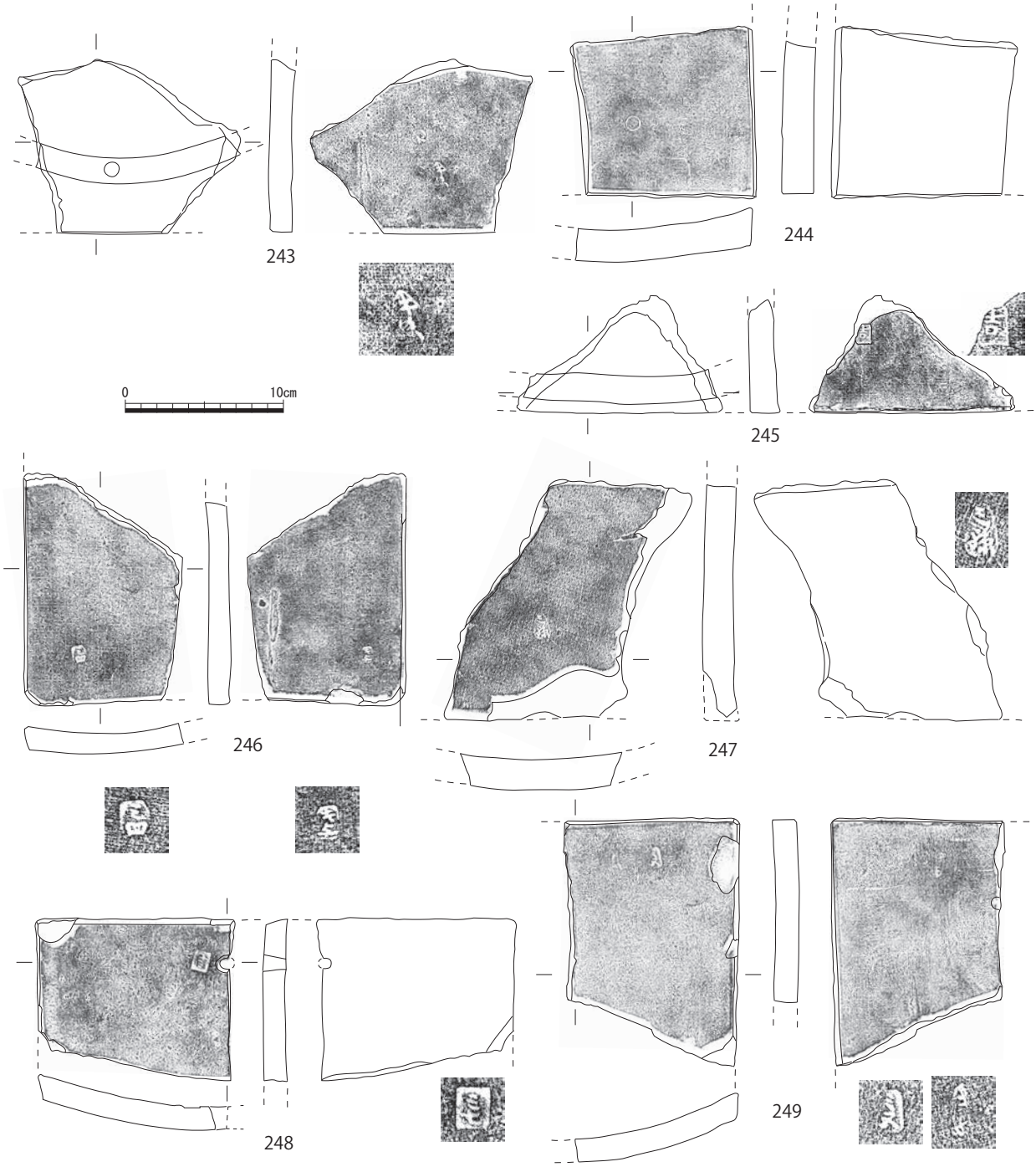
第46図　平瓦（赤瓦）11（1/4）



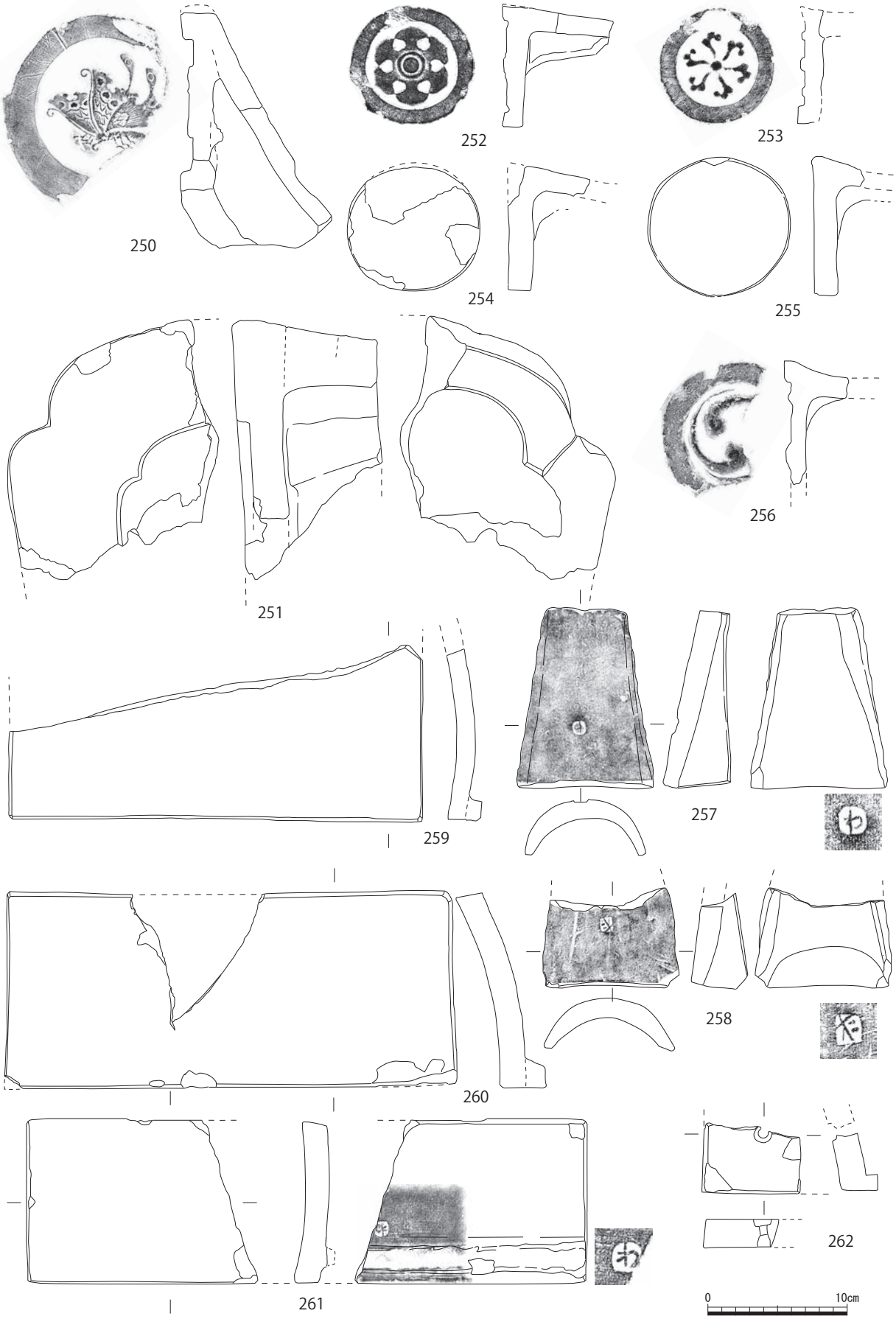
第47図　平瓦（赤瓦）12（1/4）

（５）その他の瓦（第49～51図、図版７）

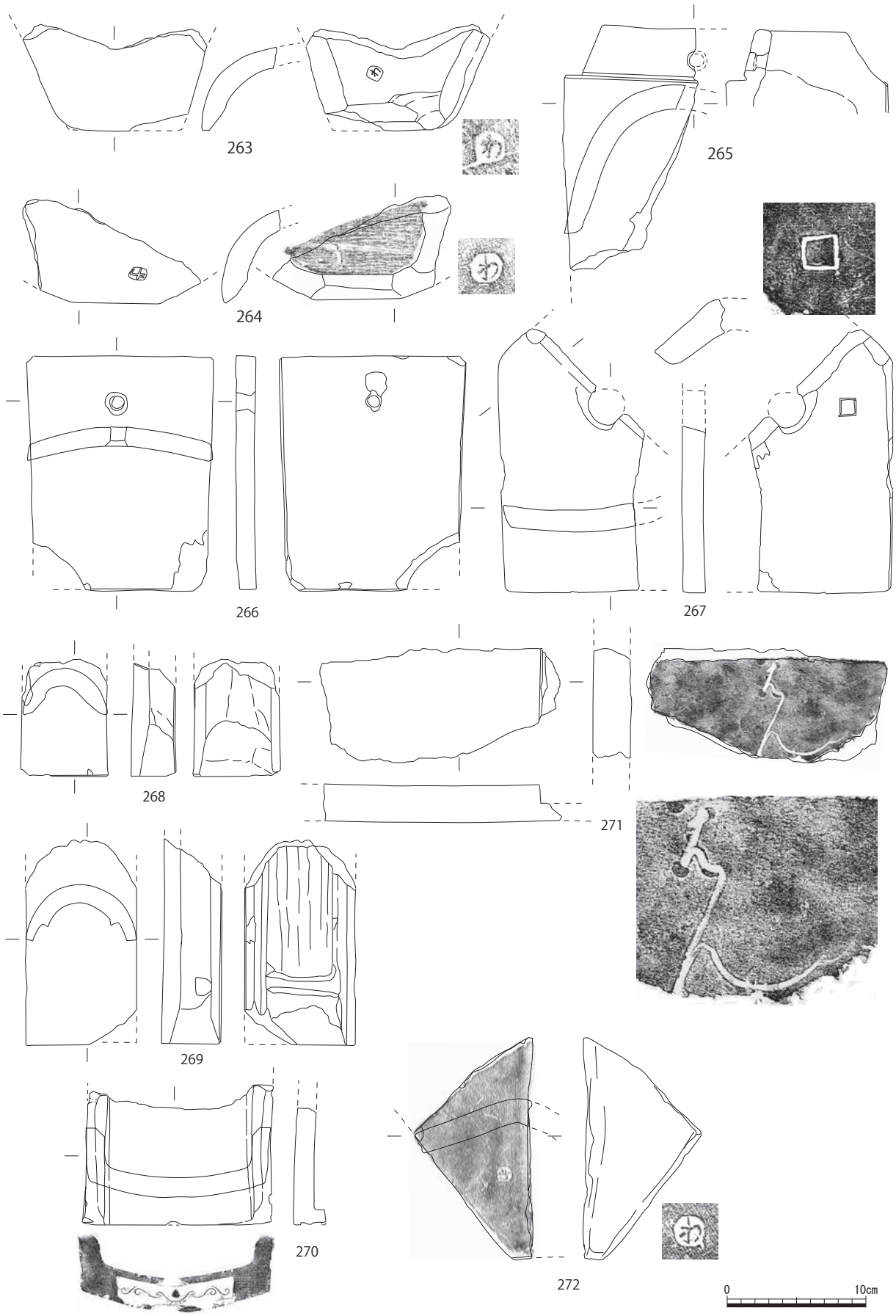
烏衾瓦250、鬼瓦251、菊丸瓦252～256、輪違瓦257・258、熨斗瓦257～262・266、面戸瓦263・264、小型丸瓦267・268、うつぼ瓦274、掛瓦275・276などがある。253は芳烈祠、265は芳烈祠神庫か聖廟文庫・厨屋のものある。掛瓦は、平瓦を二枚重ねた形で、ともに水返の袖が付く。276は、軒部が無紋である。赤瓦の270は、宝珠の中心飾をもつ、うつぼ唐草軒平瓦であるが、現在の建物群では確認できない。250は、瓦当部が軒瓦類と同紋である。輪違瓦257・258、熨斗瓦261、隅部に用いられた267・272・273が、黒瓦である。谷丸瓦273は、内面に細板による押圧がみられる。



第48図　平瓦（赤瓦）13（1/4）



第49図　その他の瓦１（1/4）



第50図　その他の瓦２（1/4）

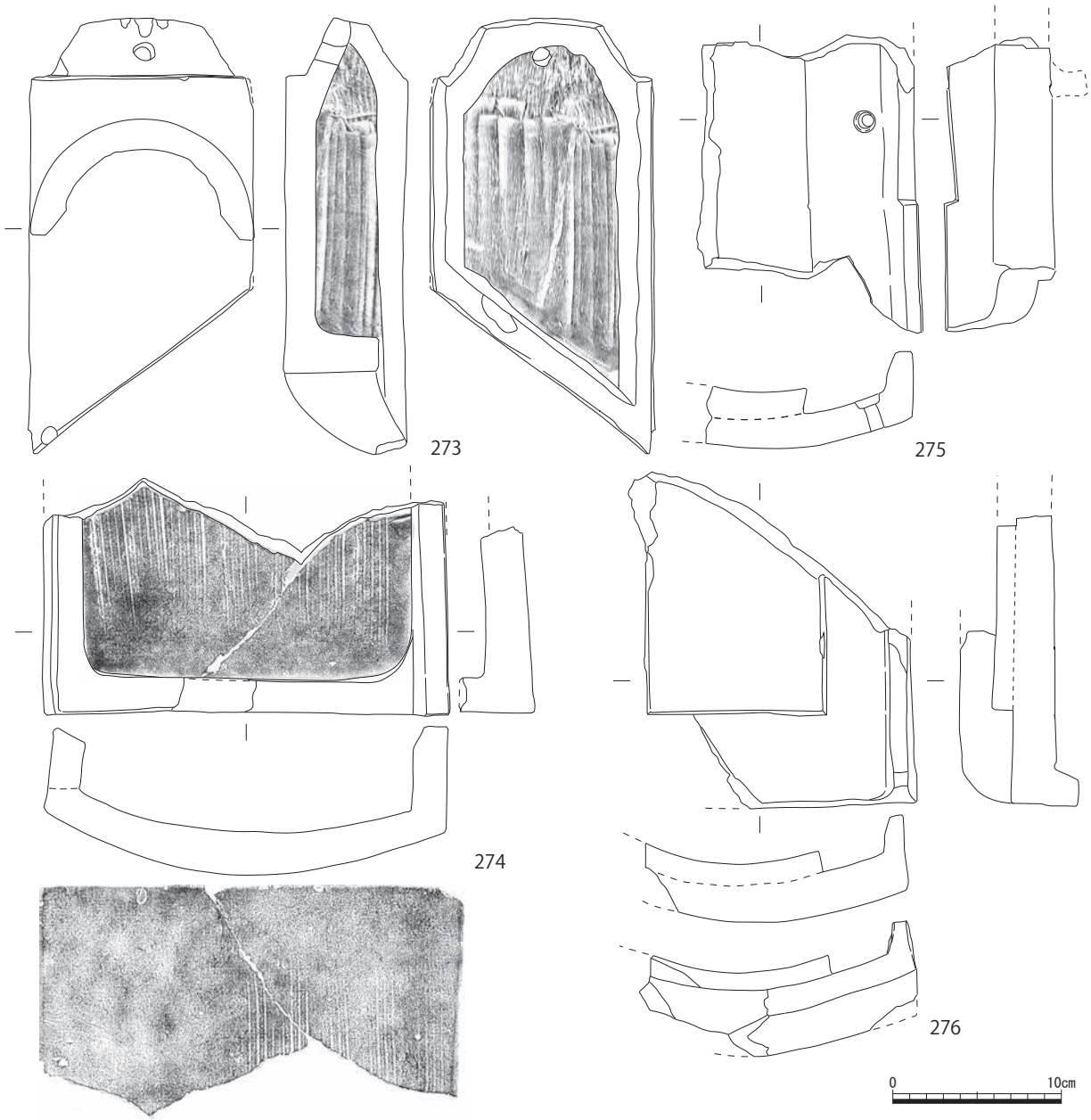
９　敷瓦（第52図、図版９）

聖廟の床に敷いた備前焼の敷瓦（磚）である。焼成に、焼き鈍しで下面が浅黄色を呈する（**277・278**）と堅緻で備前焼特有の赤褐色を呈する（**279～281**）二者があるが、いずれも平面形が六角形で、下面は内に凹むが周辺と内底部との境はわずかに段状を呈した外印籠状となる。ロクロで成形で、両面ともナデて仕上げ、上面全体には塗り土のハケが看取できる。277が他よりやや大きく。**278～281**は上面の中央は器壁の凸凹が顕著である。

10　窯道具

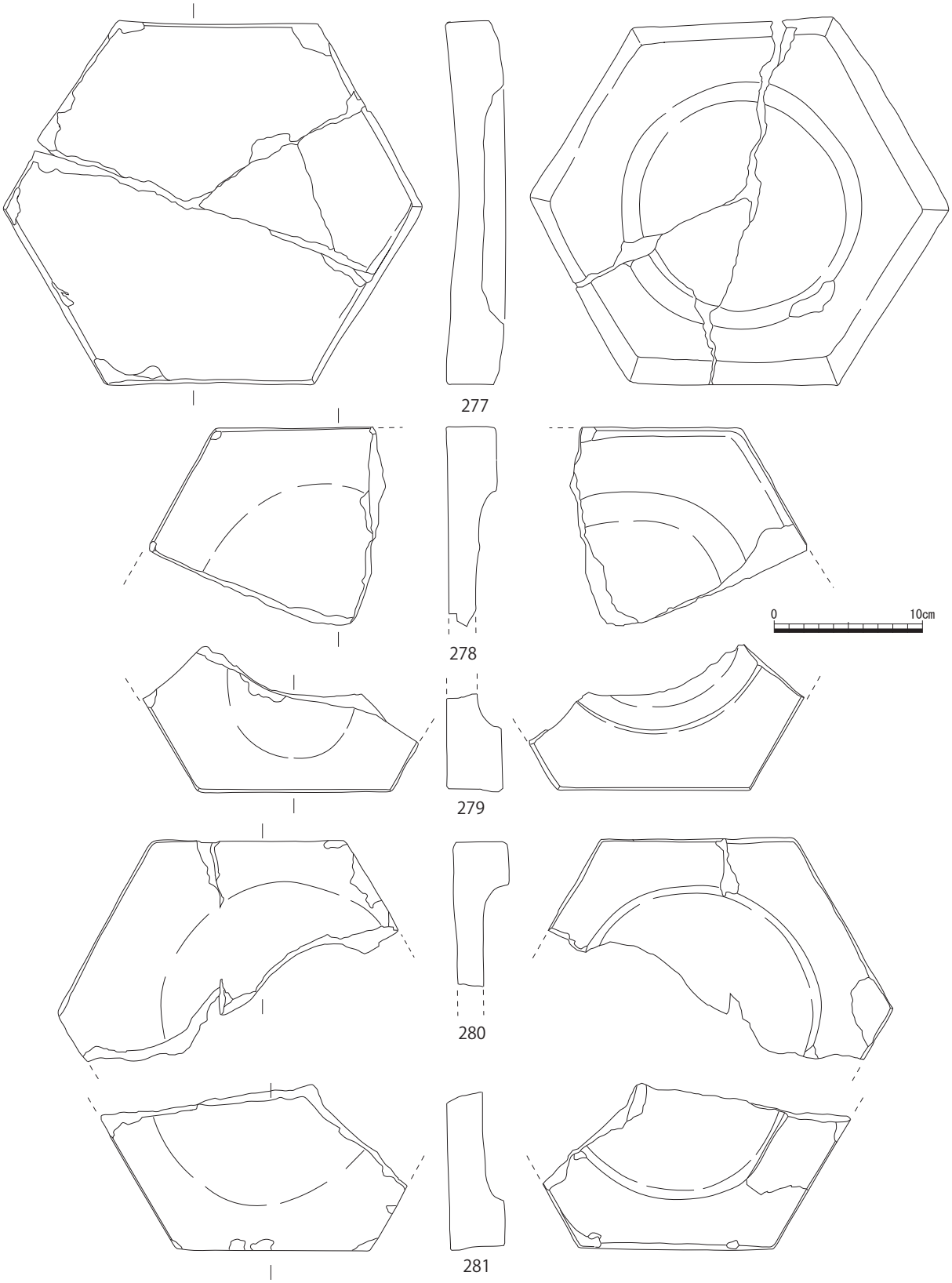
（１）支柱（第53・54図、図版９）

棚板を支える支柱で、長さ（高さ）が23～24㎝である。21個体がＴ７からの出土しており、うち13個体が溝からである。その他では、**Ｃ２**がＴ３、**Ｃ５**はＴ８から出土した。



第51図　その他の瓦３（1/4）

脚柱部の両端を広く拡張させて平面三角形の端部を作り、両端部の間の長さは22～24㎝で、この地で焼成した製品の高さを推測できる。ある。脚柱部の断面形状は、端面と同様で三角形をなすものほか円形や方形に近いものがある。脚中部の三辺のうち一辺は、両端面へと連続した平滑な面をなすも

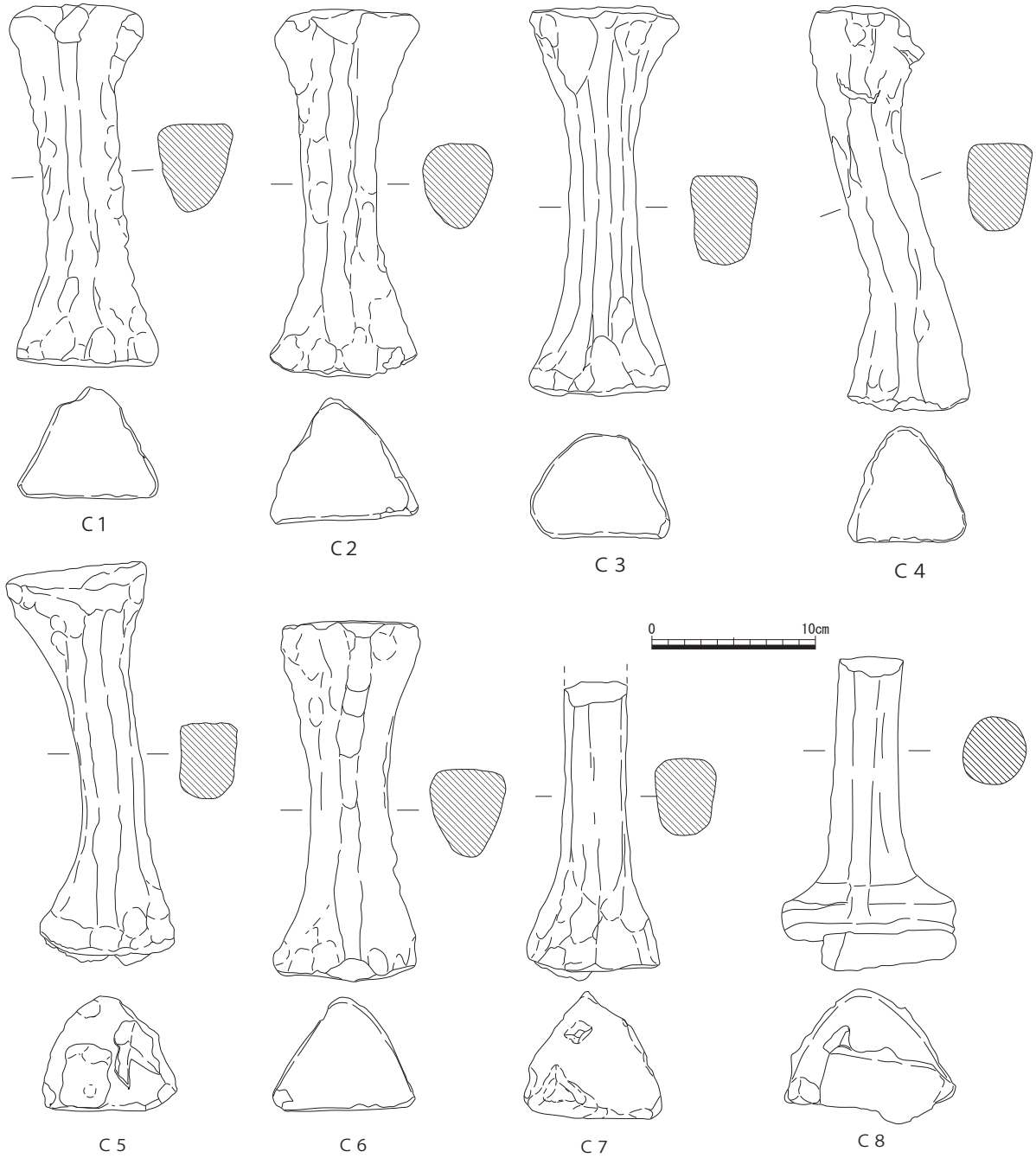


第52図　敷瓦（1/4）

のが多く、製作にあたって板状の工具上に置かれた際の底面にあたると考える。使用時には両端部を上下方向に立てるが、基本的に製作時の底面が裏側、上側が火前になるように用いられている。複数回の使用が認められるものもあれば、あまり灰をかぶらず未使用に近いものも存在する。端部に土や窯壁の付着や棚板をおいた痕が残るものもある。聖廟や閑谷神社の瓦を焼いたとみられる。

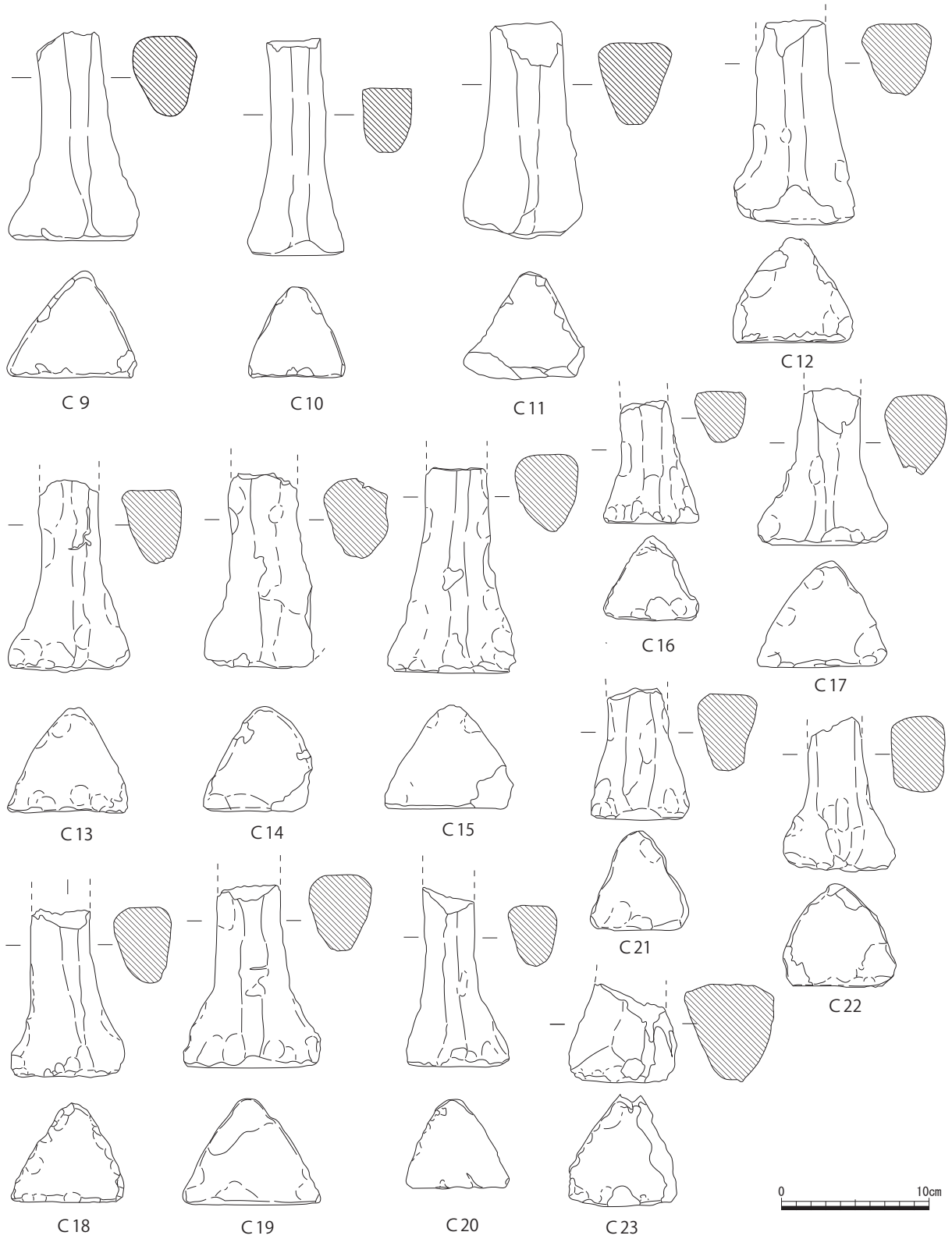
（２）棚板（第55～57図、図版９）

破片数は三十数個体があり、うち隅の残る20個体すべてを図化している。Ｔ７の溝からの出土が多く、他はＴ３から３個体、Ｔ５、Ｔ８とＴ10でそれぞれ１個体が出土している。完存する**Ｃ24**は、長さ32㎝、幅29㎝、厚さ３㎝、重さ6.2㎏の長方形の板であるが、平板ではなく反りが顕著である。上



第53図　支柱１（1/4）

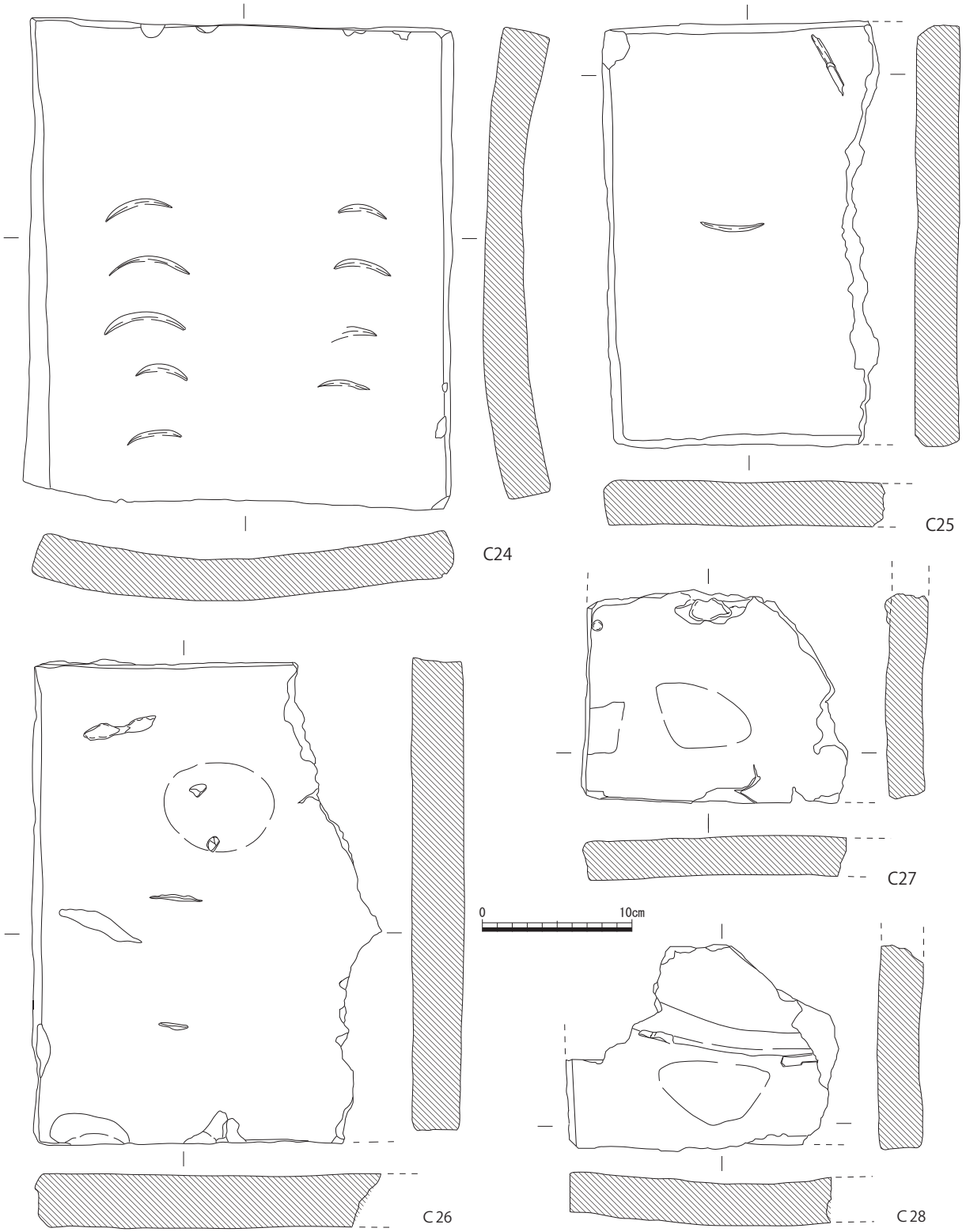
面には、わらを敷いた痕が白く筋状に残るほか、三日月状の圧痕が残る。三日月状の圧痕は支脚の痕跡と考えられる。全体的に、色調は渇灰色～灰黄褐色で、焼成は良好であるが胎土は粗く、粒径の大きい白色砂粒を多く含む。わらの痕（C25・C26・C33)、平瓦の剝離した痕（C28・C32)、支柱の痕（C26～C28・C33）や土の付着、反りのみられる個体も多い。大きさは、厚みが2.6～3.1㎝の



第54図　支柱２（1/4）

中に収まり、ほぼ同一の規格ではなかったかと推測する。両面によく灰をかぶる固体もあれば、あまり灰をかぶらないものも存在する。

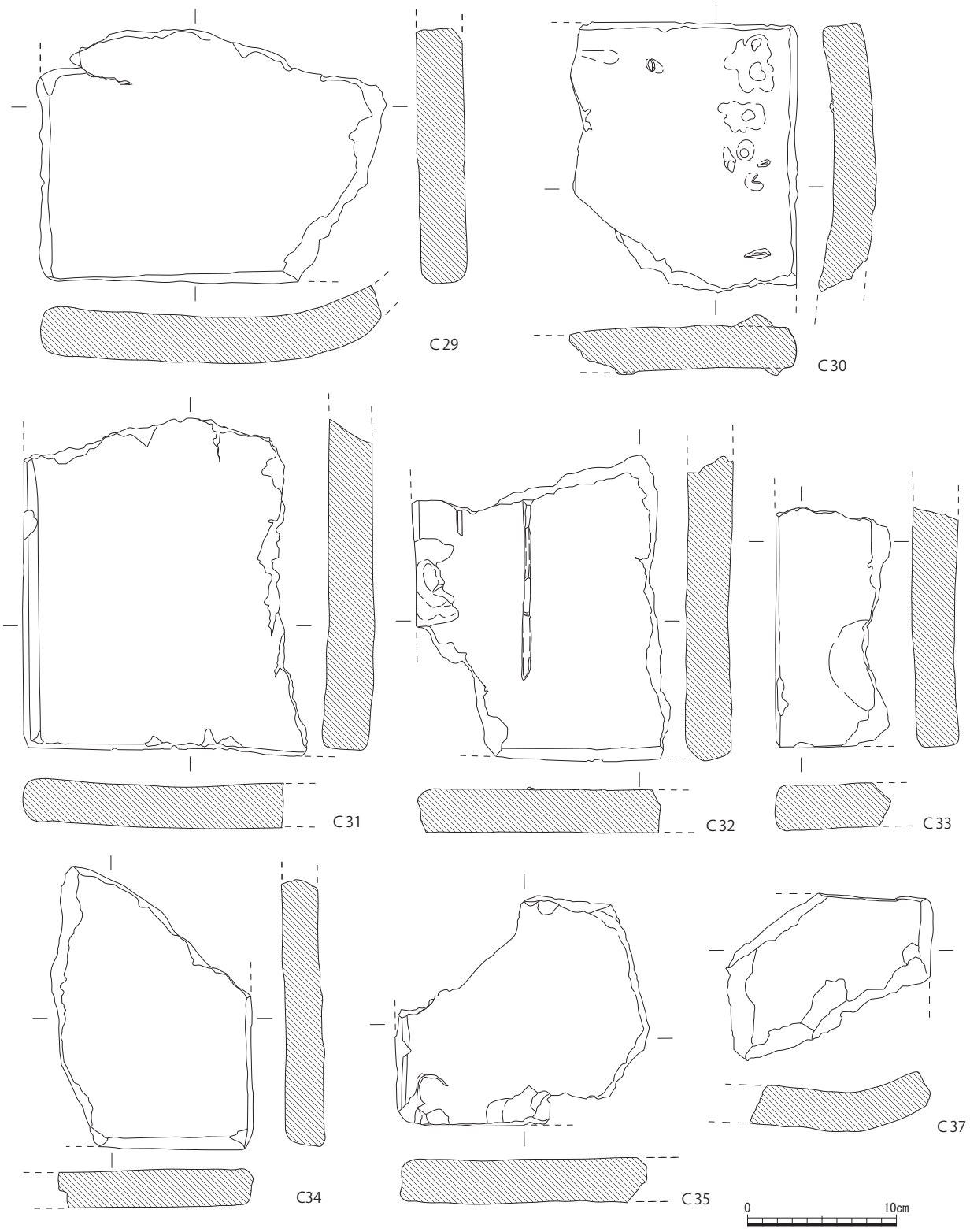
これら窯道具とともに大量の窯壁片（図版９）が出土し、窯跡の存在を裏付ける。



第55図　棚板１（1/4）

11　硯（第58図、図版９）

Ｓ１はほぼ完形で、長方形の四隅をわずかに面取りする。海部を除く全面がきわめて平滑で、陸部に墨痕が残る。Ｓ２は、裏面がわすかに窪んでおり、裏面も硯として利用されている。Ｓ１と同一規格品である。Ｓ１・Ｓ２とも裏面に「赤間関」と刻字があり、石色が暗赤色であることから山口県南

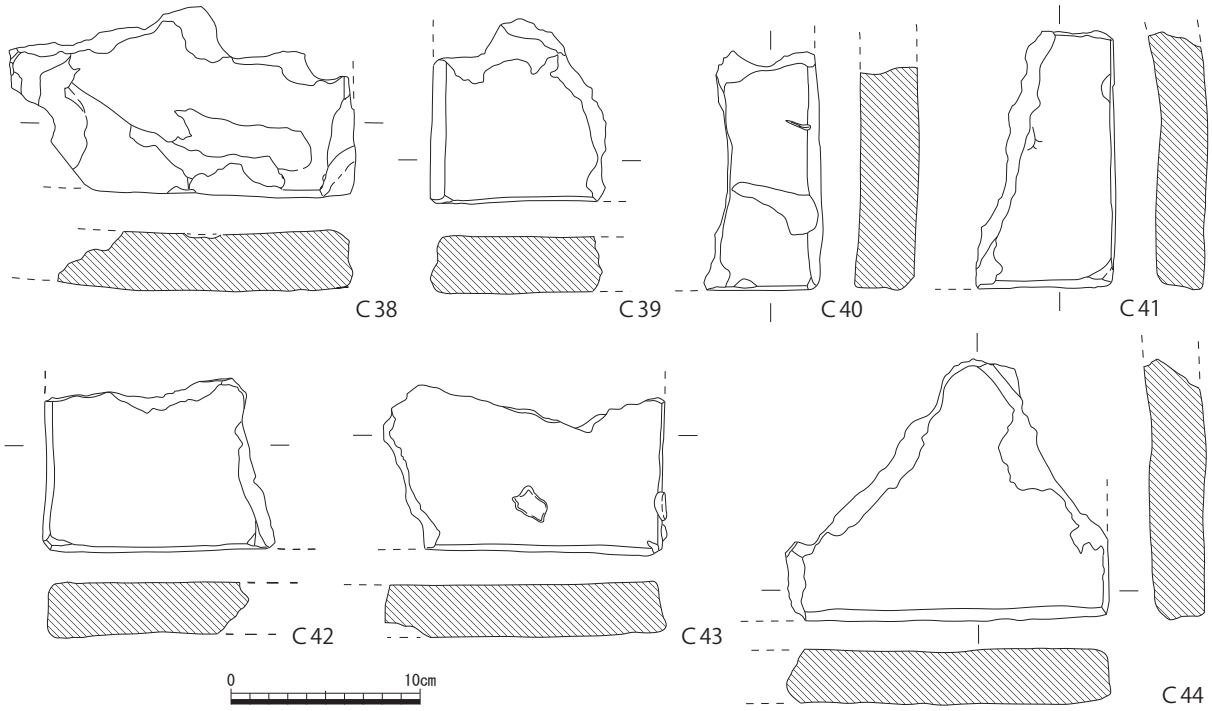


第56図　棚板２（1/4）

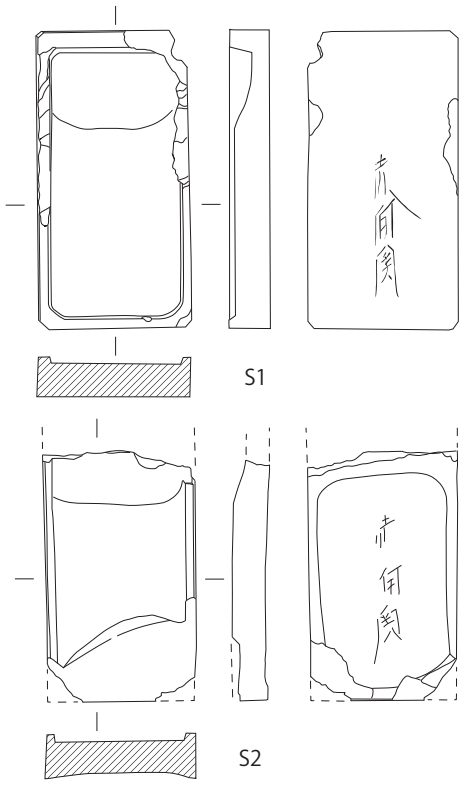
西部産の凝灰岩（赤間石）である。Ｓ３は、石色が渇灰色～灰黄褐色を呈し、石材は粘板岩である。

12　銭貨（第59図、図版９）

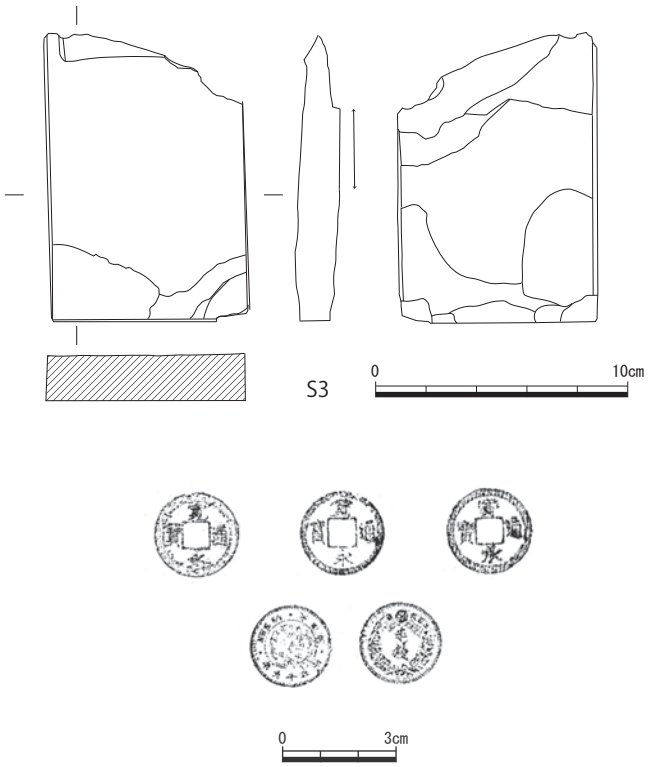
銭貨４点出土している。寛永通宝Ｍ１・Ｍ２・Ｍ３は、「新寛永」３期である。Ｍ４は、明治19年鋳造の半銭銅貨で、周縁に大日本、明治１９年、1／２、ＳＥＮ、裏面には半銭の文字が確認できる。



第57図　棚板３（1/4）



第58図　硯（1/3）



第59図　銭貨（1/2）

第３章　総　括

閑谷学校は、寛文10年（1670）に創設され、寛文12年（1672）には、早くも飲室、学房が完成している。元禄14年に描かれた『閑谷新田絵図』には、「学房」建物の北（今回のＴ１～３付近）に小規模な８棟の建物が描かれている。文化10年（1813）の『閑谷学図』では、屋根の色表現から、講堂周辺の建物の茶色屋根は備前焼瓦屋根で、学房地区の建物は、茅葺き（学房や吏舎、食堂）、青色屋根＝黒瓦（校厨、客舎、米倉、土蔵）と指摘されている。今回の調査では、創設期の建物は確認できなかったものの、Ｔ10井戸とその周囲の遺構を幕末期の吏舎の一部とみている。一方、Ｔ９焼土面や窯壁片、窯道具の出土から、学校の瓦を生産した瓦窯（閑谷学校窯跡）を想定した。また、Ｔ７の遺構群は、文化・文政期から明治初年の作事小屋の一部で、差し替え瓦を保管した可能性があるとともに、瓦窯が近在したことで、窯道具や窯壁片が混入したとみている。『新田絵図』で今回の調査区付近に描かれた建物群を、瓦窯の覆屋や工房と考えており、同絵図で聖廟や閑谷神社の表現が他と異なり平面図的に描かれるのは、屋根の修理＝瓦の葺き替えを行っていた可能性を指摘する。

遺物は、瓦類を中心にコンテナ78箱が出土した。注目すべきは、中心飾りが宝珠で２転する唐草紋の黒瓦・赤瓦（93～95・97・270）の存在である。同紋の瓦が講堂付近からも出土しており、これを延宝５年の瓦の一部と推定する。また、黒瓦で揚羽蝶紋軒丸瓦や中心飾りが六弁花の唐草紋軒平瓦や六弁花紋菊丸瓦、無紋軒丸瓦と軒平瓦が存在する。これらも、延宝５年から貞享３年にかけての聖廟・閑谷神社の瓦とみている。すなわち、延宝５年から貞享期の瓦とは、黒瓦と赤瓦が混在する状況であった。この２種の瓦には、共通の成形・調整がみられ、瓦師と陶工の協業が指摘されている。赤瓦への変化は漸移的であったが、瓦師が製作したとみられる生瓦を備前瓦窯で焼かれていることから、次第に赤瓦への志向が強くなったとみている。

現在の屋根構造は、化粧垂木上の化粧裏板に和紙を張って補強して野地板を打ち、さらにその上に流し板を打ち付ける構造になっている。流し板の上に平瓦を空葺きにし、丸瓦と同じアーチの瓦棒を打ち付け、その上に丸瓦をはめる。これが創建時のものかについては疑問が残る。備前焼瓦は耐久性に優れる反面、焼け歪みによる瓦間の隙間が生じやすく、吸水率も低いことから、想像以上に屋根材の腐食が進行したのではないだろうか。今回出土した瓦は、実に多様な形状をしており、それが供給先の「建物」、瓦を作った「工房」の違いのほか時間的な変化も意味すると考えるのである。

丸瓦において閑谷学校瓦を特徴づける要素として、丸瓦の玉縁部に穿たれた釘穴があげられる。雨風にさらされた釘が錆びて瓦や屋根材に影響を及ぼさないための工夫である。「引掛け突起」と瓦棒の出現によって丸瓦自体に釘を使用する必要がなくなったのである。この突起や釘穴の有無とその種類、凹面の面取りや調整法から丸瓦の分類が可能（表４・第60図）であり、時間的な変化ないしは工房の違いを示す可能性が高い。岡山城の瓦では、５式（寛永年間～元禄年間）において内面の布目痕にゴザ目状の粗いものが目につき、６式（17世紀末から18世紀第３四半期頃）ではゴザ目状に粗いものが圧倒し、その中段階からは幅1～２㎝の板条圧痕を縦方向に残すタタキ痕が顕著になることが指摘されている。つまり、閑谷の丸瓦Ｄ・Ｅ類は、Ａ～Ｃ類より後出することがわかり、突起のないＡ類を最も古く、側面の面取りを省略したＥ類が最も新しいとみる。丸瓦Ｄ類には、元禄13年の銘があるこ

とが知られており、E類は、必然的に安永４年とそれ以降の補修瓦と判断できる。また、E類には「ミ長」の刻印がある。このミ長とは、寺見長八郎のことで、安永９年没の人物と特定できよう。Ａ～Ｃ類は、延宝～貞享期の作と推定する。次に、凹面には成形台からの離脱装置としてのゴザ状痕がみられる。胴部凹面ではその上からヨコナデや細板状工具による押圧を施している。この細板押圧は、玉

表４　丸瓦の分類

分類	突起の有無、形	釘穴		仕切溝		凹面の成形・調整痕			凸面の調整		遺物番号	備考
		有	無	有	無	ゴザ状痕	ヨコナデ	細板押圧	ヘラナデ・ミガキ	ナデ		
Ａ　類	無し	●			●	●	●		●		134～137･156	
Ｂ１類	矩形	●			●	●	●			★	140・141・143･155	塗土のハケ
Ｂ２類	長方形	●			●	●	●	●		★	142	釘穴の先極細
Ｃ　類	鰭状	●			●	●	●			●	144・145	
Ｄ　類	環状		●	●		●		●		●	152～154・157	
Ｅ１類	帯状		●	●		●	●	●		●	148	
Ｅ２類	帯状		●	●		●		●		●	149～151・158	

縁部の凹面には及ばず、ゴザ状痕跡が残る。細板押圧は、胴部凸面のヘラナデ・ミガキを省略して、器面を整える工夫として成立したと考えている。この押圧にはそれを受けるための台が必要になろう。玉縁部と胴部の凸面を分ける仕切り溝（Ｄ・Ｅ類にみられる）は、細板押圧を施す瓦の全てにみられることから、仕切り溝を丸瓦の胴部を固定する凹型台端の痕跡と考えている。黒瓦にも玉縁部の釘穴穿孔から釘穴無しへの変化や成形調整法の一致があるが、仕切り溝はない。このような道具の違いとともに、赤瓦は黒瓦とは逆にＡ類からＥ類にかけて胴部高が増すという違いも看取できる。

平瓦では、赤瓦をⅠ類（凸面クシ目）、Ⅱ類（凸面ナデ）に分けたが、Ⅰ類（浅黄色～橙色系）は、Ⅱ類（橙色や暗赤褐色）に比して明色を呈し、軟質という傾向にある。平瓦の隅数が２個以上の29点と既報告の資料を加えて検討すると、その大きさに３種があり、Ａ群では、高さが30～33㎝で他類に比べて器壁も厚い。Ｂ群では25～27㎝、Ｃ群は22～24㎝である。閑谷神社と聖廟の平瓦Ⅰ・Ⅱ類は、Ｃ群（聖廟Ⅱ類のうち「試砂作瓦」はＢ群）、講堂瓦にはⅠ類はなくⅡ類のみで、Ａ群と対応する。釘穴の断面（第60図）は、平瓦Ⅰ類に釘穴アとイがあり、Ⅱ類には釘穴イ～エがある。必ず凹面側から穿孔し、凸面側は穴の周囲を丸くなでる。釘穴アはイ～エより古く、赤瓦Ⅰ類や道具瓦にみられる。釘穴と刻印との関係では、イは「キ□」や「ミ□」、「わ」や「於」では、ウやエがみられ、時期的な変化だけでなく工房の違いも示していると考える。さて、赤平瓦の凹面は丁寧にナデて仕上げるが、凸面はやや不整な面を残している。そして、凸面に付された刻印は、陶印が反対側から圧を受けて、印形や文字が不明瞭となる。側・端面の調整によるわずかな粘土の盛り上がりが凸面側のみにみられる。凸面上端近くに弧線圧痕が残る。以上から凸型台で成形が行われ、調整には凹型台が使用されたと考える。

平瓦を中心に、瓦造りにかかわった人・グループを示したと考えられる文字・記号が残る。それらには、刻印、墨書、ヘラガキの場合がある。このうち最も事例の多い刻印（表５）は、瓦破片数5437点中62点存在する。内訳は、赤瓦が50点（道具２・軒平４・平41・丸３）、黒瓦が12点（道具２・平８・丸２）である。「わ」･「於」はすべて陽刻印で、黒瓦・赤瓦の双方にあり、平丸瓦以外では道具瓦にも確認できる。印の大きさや書体から、複数の印の存在が確認できる。カタカナと漢字を組み合わせた2文字の印には、キ長・キ平・キ与・キ孫・キ四やミ又、ミ孫、ミ四がある。この「ミ□」と「キ□」は、陰刻印で、同じ瓦の凹凸両面に押印される場合があるが、その場合は凹面に「ミ□」、凸面に「キ□」が押印されている。これは、「キ□」・「ミ□」のいずれかが確認できた場合にも当てはまる。

そして「キ□」印の彫りが浅い、あるいは印形が不明瞭になるのは、調整時に凹型台の下面にあたり押圧を受けたからと考えられる。「キ」と「ミ」は、備前焼窯元六姓のうちの木村・寺見を示すと考えられ、ともに平瓦と丸瓦の製作に携わり、平瓦製作では凸型台で成形作業と凹型台を使用して調整作業を分担して行っていたと考えられるのである。刻印のうち、「キ平」は「試砂入」銘瓦に確認でき、元禄13年の瓦工房においてその作業の中心となった人物である。同年の工房には、「ミ五」、「キ孫」、「キ与」、「ミ四」、「ミ五」、「ミ平」印の陶工が確認できる。一方、「わ」・「於」は、印形も押印部位も多様である。印の保有主体を個人ではなく集団と考える。この印を使うグループやⅠ類平瓦製作者は、備前焼の陶工ではなく、瓦師の可能性を考えている。なお、陶印はⅠ類平瓦には存在せず、Ⅱ類のみである。木村も寺見も数名の陶工が、同じ工房に従事し、その製品を名前で区別する必要があった。これらの陶印は基本、備前焼にはないが、瓦の大量生産と陶工の大量動員の中で、個人の識別を容易する必要があったと考えている。

窯壁片、窯道具の棚板と支柱、自然釉によって数個体が融着した瓦片や焼け歪み瓦、亀裂の入った瓦片など焼成不良品が出土しており、学校瓦を焼成した窯を想定する（閑谷学校窯）。平瓦Ⅱ類を主体とするが、融着瓦の中に平瓦Ⅰ・Ⅱ類の組み合わせがあり、両者を同時期に焼成していた。焼成不良瓦に無紋軒平瓦や揚羽蝶紋軒丸瓦が存在することや瓦と窯道具の規格からみて、学校窯では聖廟や閑谷神社の瓦を焼いていた。Ｔ９で確認した焼土面が窯の床面で、傾斜角度は約８度、焼土面の厚みは10～20㎝であった。平窯と考えられ、操業時期は、貞享３年以降で元禄14年を下ることはないと思われる。閑谷学校窯は穴あきサヤを含むサヤの存在から、貞享３年にお城に献上する焼物を焼いた窯とみられるのである。

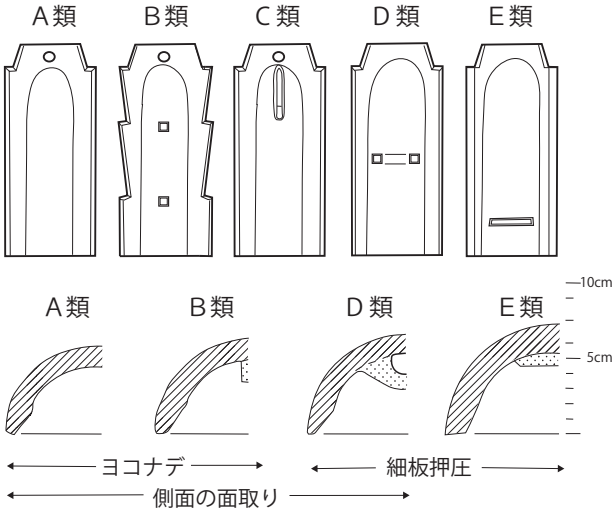
赤瓦（備前瓦）は黒瓦（燻瓦）に対し耐水性が高く、瓦自体には水分を含まない。また、高温での焼成は歪を生じやすく、漏水や湿気などのトラブルを招く恐れがあった。ただし、低温で焼成すれば強度が不足し、瓦の破損やひいては屋根の腐食につながった。元禄13年に、試しに砂を入れた瓦を焼成したのは、貞享期の瓦に不具合があったと考える。そうすると元禄14年の「閑谷新田村絵図」において、講堂とともに聖廟、閑谷神社の屋根表現が平面図のような表現であった聖廟や閑谷神社も屋根の改修が行われていたことを示すのではなかろうか。閑谷学校は、瓦はもちろん建物自体も幾度となく改修を行い、今日へと守り続けてきたと理解できるのである。

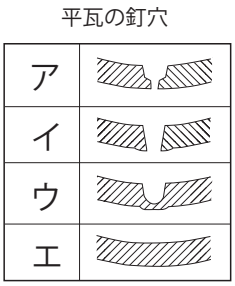
参考文献

上原真人「平瓦制作技法の変遷－近世造瓦技術成立の前提－」『今里幾次先生古稀記念播磨考古学論叢』1990
安倉清博「閑谷神社拝殿・聖廟校門の元禄瓦」『閑谷学校研究』第21号 2017
岡本明郎「閑谷焼瓦・備前焼瓦とその背景」『閑谷学校研究』第２号 1998
桂又三郎『備前閑谷焼とお庭焼』大雅洞 1969
備前市教育委員会『閑谷学校　世界遺産登録推進シンポジウム報告書』2012
岡山県教育委員会『特別史蹟並びに重要文化財閑谷黌』講堂外四棟（第一期）工事報告書 1961
岡山県教育委員会『特別史蹟並びに重要文化財閑谷黌』講堂外四棟（第二期）工事報告書 1962
備前焼ミュージアム　『教育遺産を守る瓦たち～旧閑谷学校の備前焼瓦～』2017
備前市『「学びの原郷 閑谷学校」報告書』2015
乗岡実「備前焼の生産技術を廻って－伝承・革新・移動－」『窯構造を考える～備前焼の生産と画期』備前焼フォーラム資料集　備前市教育委員会　2017
原田美佐子「閑谷焼の文献・絵図資料の基礎的研究」『窯構造を考える－備前焼の生産と画期－』備前焼歴史フォーラム資料集 備前市教育委員会　2017

表５　刻印の分類

	種類	点数	瓦の種類					陰影		押印部位							備考
			黒瓦	赤瓦	平瓦	丸瓦	道具瓦	陽刻	陰刻	平瓦凸面	平瓦凹面	平瓦側・端面	丸瓦凸面	丸瓦凹面	道具瓦凸面	道具瓦凹面	
記号系	○	2		●	●				●		●						
	×	1		●	●			●		●							
	十	1		●	●			●		●							
文字系	わ	31	●	●	●		●	●		●	●	●	●	●	●	●	墨書瓦1点あり
	於	4	●	●	●		●	●			●	●			●		ヘラガキ瓦2点
	吉	2		●	●	●			●	●玉縁							
	キ□	22		●	●			★	●	●	★						★：223
	ミ□	7		●	●	●			●	●玉縁	●						





第60図　丸瓦・平瓦釘孔の分類

遺物観察表

・「計測値」の、「(　)」は残存値を示し、「－」は計測不能を示す。

・「色調」は、『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修及び『色の手帳』水田泰弘監修 小学館 を使用した。

・石製品の「石材」については、岡山大学鈴木茂之氏の道程による。

・陶印瓦の押印位置は、瓦が葺かれた状態での文字の方向を示す。

国産磁器・備前焼・瓦質土器

掲載番号	トレンチ	遺構・層名	種別	器種	計測値（cm）			色調			状態	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	断面		
1	Ｔ９	包含層	肥前系	碗	10.0	4.0	5.7	素地：胡粉色	釉薬：灰白色	模様：藍色	3/4	
2	T10	堀状遺構	肥前系	碗	9.8		(4.4)	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：藍色	1/5	
3	T10	溝1下層	肥前系	碗	12.0		(4.7)	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：	1/3	
4	Ｔ１	包含層	肥前系	碗	8.0		(5.2)	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：藍色	口縁1/4	
5	T10	溝1下層	肥前系	碗	5.0			素地：灰白色	釉薬：鈍黄橙色		1/4	
6	Ｔ６	炭・焼土層	肥前系	端反碗	(11.0)		(3.0)	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：藍色	1/6	1820～幕末
7	Ｔ６	炭・焼土層	肥前系	小碗	8.0		(3.6)	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：青藍色	1/5	1820～幕末
8	T10	井戸状遺構	肥前系	小碗	6.4	2.8	3.0	素地：灰白色	釉薬：灰白色	模様：灰色	1/4	
9	T10	溝1下層	肥前系	碗		4.0	(3.0)	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：藍色	1/2	
10	T10	井戸状遺構	肥前系	小杯		3.0	(3.1)	素地：胡粉色	釉薬：白緑色	模様：藍色	1/2	
11	Ｔ６	炭・焼土層	肥前系	鉢	(19.0)		(5.1)	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：藍色	1/8	1810～幕末
12	Ｔ６	炭・焼土層	肥前系	鉢	(14.0)		(4.2)	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：藍色	1/10	19Ｃ～幕末？
13	Ｔ６	炭・焼土層	肥前系	鉢		(13.0)	(1.8)	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：藍色		19Ｃ～幕末？
14	Ｔ６	炭・焼土層	肥前系	皿		13.0	(1.3)	素地：胡粉色	釉薬：秋色	模様：スマルト	1/8	1810～幕末
15	T10	溝1下層	肥前系	皿	13.0	6.8	(3.3)	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：藍色	1/8	
16	T10	溝1下層	肥前系	皿	(10.8)	7.0	2.8	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：藍色	1/7	
17	Ｔ６	炭・焼土層	肥前系	蓋	9.0	2.4	3.0	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：藍色	つまみ完	18Ｃ

掲載番号	トレンチ	遺構・層名	種別	器種	計測値（cm）			色調			状態	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	断面		
18	Ｔ６	炭・焼土層	肥前系	瓶			(4.2)	素地：灰白色	釉薬：灰白色	模様：銀納戸色	1/4	幕末～明治
19	Ｔ６	炭・焼土層	肥前系	香炉	最大径 8.0		(3.0)	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色	模様：明緑色	1/3	1820～幕末
20	Ｔ７	溝状遺構	瀬戸磁器	碗	7.8		(5.4)	素地：灰白色	釉薬：灰白色	模様：藍鉄色		
21	Ｔ６	炭・焼土層	瀬戸美濃	小皿	8.0	3.4	2.5	素地：胡粉色	釉薬：明緑灰色		1/4	幕末～明治
22	Ｔ３	包含層	備前焼	徳利	2.2			2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	5YR6/1（渇灰色）	口縁端部完形	
23	Ｔ９	包含層	備前焼	徳利				2.5YR14/1（赤灰色）	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）		頸部1/2、体部1/4
24	Ｔ３	包含層	備前焼	壺	8.4		(12.6)	5YR3/6（暗赤褐色）	5YR3/6（暗赤褐色）	10YR7/1（灰白色）	口縁部欠損	桃渓堂「一」の陶印
25	Ｔ10	溝1	備前焼	壺		6.8		5YR3/6（暗赤褐色）	5YR3/6（暗赤褐色）	5YR3/6（暗赤褐色）	体下半ほぼ完	底部に「大」の陶印
26	Ｔ10	溝1	備前焼	碗	11.2	4.2	4.5	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	1/8	伊部陶器、葛尾の陶印
27	Ｔ10	溝1下層	備前焼	皿	19.2	12.0	3.8	10R5/3（赤褐色）	10R5/3（赤褐色）	10R5/1（赤灰色）	底部ほぼ完	陶印あり
28	Ｔ１	包含層	備前焼	皿	12.4	6.6	1.9	10YR4/6（褐色）	10YR4/6（褐色）	7.5YR6/2（灰褐色）	1/8	
29	Ｔ９	包含層	備前焼	皿	10.8	7.0	1.4	10YR5/4（鈍黄褐色）	10YR5/4（鈍黄褐色）	10YR5/4（鈍黄褐色）	1/8以下	
30	Ｔ10	溝1下層	備前焼	皿	13.6	9.0	2.0	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR5/1（赤灰色）	1/4	
31	Ｔ１	包含層	備前焼	皿	11.6	6.4	1.9	2.5YR4/8（赤褐色）	2.5YR4/8（赤褐色）	7.5YR6/2（灰褐色）	1/8以下	
32	Ｔ３	包含層	備前焼	灯明皿	12.4	(1.0)		2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	7.5YR6/3（鈍褐色）	1/8	
33	Ｔ10	溝1下層	備前焼	灯明皿	9.4	6.0	1.3	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	完形	
34	Ｔ10	溝1	備前焼	花入れ		8.4		2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR5/6（暗赤褐色）	2.5YR5/3（鈍赤褐色）	底部完形	久本葛尾の陶印
35	Ｔ10	溝1	備前焼	花入れ		7.2		2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR5/6（暗赤褐色）	2.5YR5/3（鈍赤褐色）	底部1/3	久本葛尾の陶印
36	Ｔ１	包含層	備前焼	花入れ		6.4		2.5YR4/8（赤褐色）	2.5YR4/8（赤褐色）	2.5YR4/8（赤褐色）	底部完形	久本葛尾の陶印
37	Ｔ10	石列検出中	備前焼	花入れ	6.0			5YR4/8（赤褐色）	5YR4/8（赤褐色）	5YR4/8（赤褐色）		久本葛尾の陶印
38	Ｔ10	溝1	備前焼	花入れ		7.2		2.5YR4/8（赤褐色）	2.5R6/6（橙色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	底部1/2	久本葛尾の陶印
39	Ｔ４	包含層	備前焼	捏鉢	43.0			10YR3/6（暗赤褐色）	10YR3/6（暗赤褐色）	10YR3/6（暗赤褐色）	1/8以下	
40	Ｔ１	溝１	備前焼	摺鉢				2.5R4/8（赤褐色）	2.5R4/8（赤褐色）	2.5R4/8（赤褐色）	1/8	
41	Ｔ９	包含層	備前焼	小形摺鉢	15.2	8.0	4.7	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	口縁1/6	未使用か？
42	Ｔ６	炭焼土層	備前焼	鉢				2.5YR5/6（暗赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR3/4（暗赤褐色）		木村興楽園の陶印
43	Ｔ１	包含層	備前焼	甕	44.0			2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR6/1（赤灰色）	1/8以下	
44	Ｔ10	井戸状遺構	備前焼	甕		25.0	(31.7)	10YR4/3（赤褐色）	7.5YR4/4（鈍赤褐色）	10R5/6（赤色）	1/7	
45	Ｔ10	井戸状遺構	備前焼	壺	27.0	21.6	34.4	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	1/8以下	
46	Ｔ10	堀状遺構	備前焼	甕				2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR6/1（赤灰色）	1/8以下	口縁上端にわらの痕跡
47	Ｔ１	溝１北	備前焼	細工物				2.5R4/8（赤褐色）	2.5R4/8（赤褐色）	7.5YR6/2（灰褐色）		翁？カキヤブリ痕
48	Ｔ７	包含層	備前焼	サヤ鉢	16.2	14.6	8.7	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	底部1/2	
49	Ｔ10	溝１	備前焼	サヤ鉢		16.0	(7.2)	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR5/3（鈍赤褐色）	底部1/4	
50	Ｔ７	溝状遺構	備前焼	サヤ鉢	15.0	11.4	10.5	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR3/4（鈍赤褐色）	5YR5/2（灰褐色）	1/4	
51	Ｔ４	包含層	備前焼	サヤ鉢	28.4			2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR5/6（明赤褐色）	1/6	
52	Ｔ７	包含層	備前焼	サヤ鉢				5Y4/1（灰色）	5Y4/1（灰色）	10Y7/1（灰白色）		穴あきサヤ。灰かぶり
53	Ｔ１	溝１	瓦質土器	香炉	20.0			10YR2/3（鈍黄褐色）	10YR2/3（鈍黄褐色）	10YR2/3（鈍黄褐色）	1/4	体部にスタンプ紋
54	Ｔ10	溝１	瓦質土器	香炉				5Y5/1（灰色）	2.5Y6/2（灰黄色）	2.5Y6/2（灰黄色）	小片	「舎」刻字
55	Ｔ10	溝１	瓦質土器	香炉		23.0		10YR3/1（黒褐色）	10YR3/1（黒褐色）	2.5Y6/2（灰黄色）	底部1/5	底部に刻印
56	Ｔ１	溝１	瓦質土器	香炉		24.0		N5/0（灰色）	N5/0（灰色）	7.5Y7/1（灰白色）	1/2	
57	Ｔ７	包含層	瓦質土器	焜炉	－	23.4		5YR6/1（渇灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	2.5Y7/1（灰白色）	底部１/2	

軒丸瓦類

掲載№	種別	出土位置		計測値（cm）			文様			色調			残存状況	備考
		トレンチ	遺構・層名	外径	文様帯径	瓦当厚さ	種別	巴珠紋数	巴珠紋径	外面	内面	断面		
58	黒瓦	Ｔ７	溝	13.6	9.6	2.0	揚羽蝶			2.5Y5/1（黄灰色）	2.5Y5/1（黄灰色）	2.5Y7/2（灰黄色）	ほぼ完	
59	黒瓦	Ｔ３	包含層	12.4	9.4	1.9	揚羽蝶			N4/（灰色）	N4/（灰色）	N5/（灰色）	1/3	
60	黒瓦	Ｔ３？	？	13.0	9.4	2.0	揚羽蝶			2.5Y5/1（黄灰色）	2.5Y5/1（黄灰色）	2.5Y7/2（灰黄色）	1/5	
61	黒瓦	T10	堀状遺構	13.0	8.6	1.9	右3巴	12	1.4	N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	ほぼ完	
62	黒瓦	Ｔ１	溝１	13.4	9.0	2.3	右３巴	12	5.2	N3/（暗灰色）	N3/（暗灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	4/5	
63	黒色	Ｔ１	溝１	13.4	8.4	2.1	左３巴	12	4.6	10YR7/4（鈍黄橙色）	10YR7/4（鈍黄橙色）	10YR7/3（鈍黄橙色）	完形	
64	黒瓦	Ｔ５	炭焼土層	13.0	8.7	2.1	左３巴	12	4.8	N3/（暗灰色）	N4/（灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	1/2	
65	黒瓦	Ｔ１	溝１	13.6	9.2	1.7	左３巴	12?	5.6	N5/（灰色）	N5/（灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	1/2	
66	黒瓦	Ｔ１	包含層	13.4	9.0	2.2	左３巴？	12?	5.0	7.5Y3/1（オリーブ黒色）	7.5Y4/1（灰色）	10YR7/4（鈍黄橙色）	1/4	
67	黒瓦	Ｔ３	上層	18.0	8.2	2.3	左３巴	12	5.0	N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5Y7/2（灰白色）	ほぼ完	
68	黒瓦	Ｔ１	包含層	13.4	8.6	2.2	左３巴	12?	5.6	N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	1/2	
69	黒瓦	Ｔ１	包含層	15.2	－	2.4	無紋			N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	ほぼ完	
70	黒瓦	Ｔ７	溝	15.6	－	2.4	無紋			N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5Y8/2（灰白色）	ほぼ完	
71	黒瓦	Ｔ７	溝	13.0	－	2.5	無紋			N3/（暗灰色）	N3/（暗灰色）	2.5Y8/2（灰白色）	ほぼ完	
72	赤瓦	T10	包含層	14.4	－	2.1	無紋			2.5Y4/1（黄灰色）	2.5Y4/1（黄灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	1/2	
73	黒瓦	Ｔ１	包含層	14.0	－	1.9	無紋			N3/（暗灰色）	N3/（暗灰色）	2.5Y7/2（灰白色）	1/2	
74	黒色	Ｔ１	包含層	14.0	8.6	2.0	蛇目			N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	完形	
75	黒瓦	T10	包含層	14.2	8.0	2.2	蛇目			N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5Y8/1（灰白色）	1/3	
76	黒色	Ｔ７	溝	13.0	9.4	1.8	蛇目			N6/（灰色）	N6/（灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	2/3	
77	赤瓦	Ｔ５	炭焼土層	12.4	8.6	2.0	揚羽蝶			2.5Y6/1（黄灰色）	2.5Y6/1（黄灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	1/2	
78	赤瓦	Ｔ７	溝	12.0	8.2	1.5	揚羽蝶			2.5YR3/2（暗赤褐色）	2.5YR3/2（暗赤褐色）	N4/（灰色）	1/3	
79	赤瓦	Ｔ７	溝	12.0	8.6	1.8	揚羽蝶			7.5YR5/3（鈍褐色）	7.5YR5/3（鈍褐色）	7.5YR4/1（褐灰色）	1/3	
80	赤瓦	T10	溝１北？	13.0	9.2	2.0	揚羽蝶			7.5YR4/3（褐色）	7.5YR4/3（褐色）	10YR7/3（鈍黄橙色）	1/6	
81	赤瓦	T10	包含層	12.6	9.2	2.0	揚羽蝶			2.5YR4/3（鈍赤褐色）	2.5YR4/3（鈍赤褐色）	2.5Y7/1（灰白色）	1/4	
82	赤瓦	T10	包含層	12.8	9.4	2.0	揚羽蝶			7.5YR4/3（褐色）	7.5YR4/3（褐色）	2.5Y7/2（灰白色）	1/5	
83	赤瓦	Ｔ１	包含層	12.2	9.4	1.9	揚羽蝶			2.5YR4/1（鈍赤褐色）	2.5YR4/1（鈍赤褐色）	10YR6/6（赤橙色）		
84	赤瓦	T10	溝1	15.4	12.4	2.1	六葉紋			5YR4/2（灰褐色）	5YR5/4（鈍赤褐色）	5YR7/6（橙色）	2/3	隅切り瓦
85	赤瓦	T10	溝1	14.0	10.2	2.1	六葉紋			2.5YR3/1（暗赤灰色）	2.5YR4/2（灰赤色）	5YR6/4（鈍橙色）	1/2	
86	赤瓦	Ｔ７	溝	11.8	－	2.0	無紋			2.5YR3/3（暗赤褐色）	2.5YR3/3（暗赤褐色）	2.5YR5/3（鈍赤褐色）	1/2	
87	赤瓦	T10	井戸	13.0	－	1.9	無紋			2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR6/6（暗赤褐色）	1/2	

掲載№	種別	出土位置		計測値（cm）			文様			色調			残存状況	備考
		トレンチ	遺構・層名	外径	文様帯径	瓦当厚さ	種別	巴珠紋数	巴珠紋径	外面	内面	断面		
88	赤瓦	T10	包含層	12.8	―	2.4	無紋			5YR4/3（鈍赤褐色）	5YR3/3（暗赤褐色）	10YR7/3（鈍黄橙色）	ほぼ完	
89	赤瓦	T３	包含層	13.4	―	1.7	無紋			7.5YR6/4（鈍褐色）	7.5YR6/4（鈍褐色）	5Y6/1（灰色）	1/2	
250	黒瓦	T７	溝	14.4	9.4	―	揚羽蝶			N4/（灰色）	N6/（灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	瓦当完	鳥衾
252	赤瓦	T８	包含層	8.8	6.4	2.0	六葉紋			10YR3/1（暗赤灰色）	10YR3/1（暗赤灰色）	10YR5/2（灰黄褐色）	完形	
253	黒色	T７	溝	8.4	5.8	1.9	六葉紋			N2/（黒色）	N3/（暗灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	ほぼ完	鉄線紋
254	黒瓦	T７	溝	9.5	―	1.9	無紋			N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5Y8/1（灰白色）	2/3	
255	黒瓦	T７	溝	10.0	―	1.9	無紋			N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5Y7/2（灰白色）	ほぼ完	
256	黒瓦	T１	包含層	10.6	7.6	1.6	右３巴	無	6.8	2.5Y5/1（黄灰色）	2.5Y5/1（黄灰色）	2.5Y5/1（黄灰色）	1/2	
273	黒瓦	T７	溝	25.9	13.3	―	無紋			N3/（暗灰色）	N3/（暗灰色）	2.5Y ８/2（灰白色）	ほぼ完	隅切瓦

軒平瓦類

掲載№	種別	出土位置		計測値（cm）			文様		色調			残存状況	備考
		トレンチ	遺構・層名	瓦当高	文様区高	瓦当厚	中心飾	唐草	外面	内面	断面		
93	黒瓦	T10	包含層	3.5	2.3	1.2	宝珠	唐草２転	10YR3/2（黒褐色）	10YR3/2（黒褐色）	2.5Y7/2（灰黄色）	ほぼ完	キラコ
94	黒瓦	T７	包含層	3.6	2.3	1.3	宝珠	唐草２転	2.5Y3/1（黒褐色）	2.5Y3/1（黒褐色）	2.5Y6/1（黄灰色）	瓦当1/2	
95	黒瓦	T７	溝	3.8		2.4	宝珠	唐草２転	2.5Y3/1（黒褐色）	2.5Y3/1（黒褐色）	10YR7/3（鈍黄橙色）	瓦当1/2	キラコ
96	黒瓦	T10	包含層	3.8	1.9	1.5	宝珠		2.5Y7/3（浅黄色）	2.5Y6/1（黄灰色）	2.5Y6/2（灰黄色）	瓦当1/2	
97	赤瓦	T10	溝１	4.7	2.2	1.5	宝珠	唐草２転	2.5YR3/1（暗赤灰色）	2.5YR4/3（暗赤褐色）	10YR7/1（褐灰色）		
98	黒瓦	T10	包含層	3.6	2.0	1.5		唐草２転	2.5Y3/2（黒褐色）	2.5Y3/2（黒褐色）	2.5Y7/2（灰黄色）	瓦当1/2	キラコ
99	黒瓦	T１	包含層	3.9	1.9	1.5		唐草１残	2.5Y3/1（黒褐色）	2.5Y3/1（黒褐色）	2.5Y5/1（黄灰色）		
100	黒瓦	T１	包含層	3.7	1.8	1.8		唐草２転	2.5Y7/2（灰黄色）	5Y5/1（灰色）	2.5Y6/1（黄灰色）		
101	黒瓦	T10	溝1	3.0	1.9	1.6		唐草２転	2.5Y7/1（灰白色）	2.5Y4/1（黄灰色）	2.5Y7/1（灰白色）		
102	黒瓦	T１	溝1	3.6	2.5	1.7		唐草２転	10YR7/3（鈍黄橙色）	10YR7/3（鈍黄橙色）	10YR7/3（鈍黄橙色）		
103	黒瓦	T７	包含層	4.4	2.6		橘		N4/（灰色）	2.5Y6/1（黄灰色）	2.5Y8/2（灰白色）	瓦当１/2	キラコ
104	黒瓦	T７	包含層	4.4	2.8	2.0	橘		2.5Y7/2（灰黄色）	N3/（暗灰色）	2.5Y7/2（灰黄色）		
105	黒瓦	T３	包含層	3.7	2.1	1.2	橘		10YR8/4（浅黄橙色）	N4/（灰色）	2.5Y7/2（灰黄色）		
106	黒瓦	T５	炭焼土層	4.1	2.6	1.6	菊花	唐草２転	N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5Y7/1（灰白色）		
107	黒瓦	T７	包含層	(4.5)	(2.1)		菊花	唐草２転	N3/（暗灰色）	N3/（暗灰色）	5Y7/1（灰白色）	瓦当1/2	キラコ
108	黒瓦	T10	包含層	3.2		1.6	無紋		N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5Y8/1（灰白色）		
109	黒瓦	T10	包含層	3.2		1.6	無紋		N3/（暗灰色）	N3/（暗灰色）	2.5Y7/2（灰黄色）		
110	黒瓦	T１	包含層	4.4	2.2	1.5	六葉	唐草２転	N4/（灰色）	N4/（灰色）	N8/（灰白色）	2/3程	
111	赤瓦	T10	溝1	3.9	1.8		六葉	唐草２転	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	1/3程	
112	赤瓦	T３	包含層	3.7	1.8	1.2	六葉	唐草２転	5YR5/4（鈍赤褐色）	5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR6/6（橙色）		上角面取り
113	赤瓦	T１	包含層	4.2	2.0	2.0	六葉	２転？	5YR6/4（鈍橙色）	5YR6/4（鈍橙色）	7.5YR7/6（橙色）		
114	赤瓦	T７	溝	4.1	2.0	1.7	六葉	唐草２転	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	10YR5/6（赤色）	ほぼ完形	上角面取り
115	赤瓦	T10	堀状遺構	4.4	2.2		波		5YR6/1（褐灰色）	5YR6/1（褐灰色）	N7/（灰白色）	瓦当1/2	水返の袖、突起
116	赤瓦	T７	溝	3.5		1.7	無紋		7.5YR5/4（鈍赤褐色）	7.5YR5/4（鈍赤褐色）	10YR5/4（赤褐色）	ほぼ完	釘穴２
117	赤瓦	T７	溝	3.5		1.5	無紋		5YR6/4（鈍橙色）	5YR6/4（鈍橙色）	5B5/1（青灰色）	ほぼ完	
120	赤瓦	T７	溝	3.7		1.2	無紋		5YR6/4（鈍橙色）	5YR5/4（鈍赤褐色）	5YR5/4（鈍赤褐色）	瓦当1/2	上角に面取り
121	赤瓦	T７	溝			17	無紋		7.5R4/2（灰赤色）	7.5R4/2（灰赤色）	N6/（灰色）		被熱。凸面に弧状線
122	赤瓦	T７	溝			16	無紋		2.5YR5/2（赤灰色）	2.5YR5/2（赤灰色）	5B6/1（青灰色）		
124	赤瓦	T７	溝	3.8		1.6	無紋		7.5YR5/2（灰褐色）	7.5YR5/2（灰褐色）	5YR6/4（鈍橙色）	1/2ほど	
270	赤瓦	T10	井戸	2.3	1.5	1.1	宝珠	唐草２転	10YR4/3（鈍黄褐色）	10YR4/3（鈍黄褐色）	10R5/2（灰赤色）	ほぼ完形	
274	赤瓦	T10	包含層		幅24.2	器厚2.6			5YR4/2（灰褐色）	5YR4/2（灰褐色）	10YR5/2（灰黄褐色）	瓦当部欠	

丸瓦類

掲載№	種別	出土位置		計測値（cm）			引掛突起	色調			残存状況	備考
		トレンチ	遺構・層名	長さ	幅	厚さ		外面	内面	断面		
90	赤瓦	T１	包含層	(29.8)	1.2	1.7	無	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR3/4（暗赤褐色）	ほぼ完	軒丸瓦の丸瓦部
91	赤瓦	T７	溝状遺構	(22.9)	1.3	1.5	無	2.5ＹR5/3（鈍赤褐色）	2.5ＹR5/3（鈍赤褐色）	2.5ＹR5/3（鈍赤褐色）	ほぼ完	瓦当部との接合カキヤブリ
92	赤瓦	T１	溝１	(21.9)	13.1	1.4		2.5YR3/3（暗赤褐色）	2.5YR3/3（暗赤褐色）	10YR6/3（鈍黄橙色）	ほぼ完	軒丸瓦の丸瓦部。環状引掛突起
126	黒瓦	T７	ピット	(10.7)	(1.1)	1.6	?	10YR3/1（黒褐色）	5BG4/1（暗青灰色）	2.5Y7/2（明赤灰色）		
128	黒瓦	T１	包含層	(18.6)	1.3	2.2	?	10YR4/1（褐灰色）	10YR4/1（褐灰色）	2.5YR7/1（明赤灰色）	1/2	筒部に釘穴
129	黒瓦	T１	溝1	(13.2)	1.4	1.8	?	N5/（灰色）	N3/（暗灰色）	2.5Y8/1（灰白色）	1/3～	
134	赤瓦	T７	溝状遺構	(28.6)	1.5	1.6	無	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	ほぼ完	歪、破面に灰かぶる
136	赤瓦	T７	溝状遺構	(21.9)	1.4	1.6	?	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR6/1（赤灰色）	2/3～	
137	赤瓦	T７	溝状遺構	(21.3)	1.9	1.4	?	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	1/2～	
138	赤瓦	T１	包含層	(25.1)	1.2	1.6	矩形	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR4/3（鈍橙色）	ほぼ完	塗土？外面ハケメ状になる
139	赤瓦	T７	溝状遺構	(23.8)	1.6	1.5	矩形	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR5/2（灰赤色）	3/4～	刳り込み瓦
140	赤瓦	T１	溝１	(18.1)	1.4	1.5	矩形	2.5YR5/6（暗赤褐色）	2.5YR5/6（暗赤褐色）	2.5YR6/6（橙色）	1･2程	刳り込み瓦
141	赤瓦	T10	包含層	(19.4)	0.1	1.8	矩形	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/3（明赤褐色）	2.5YR6/2（灰赤色）	1/2～	刳り込み瓦
142	赤瓦	T10	溝１	253	1.2	1.4	長方形	10YR7/4（鈍黄橙色）	10YR7/4（鈍黄橙色）	10YR7/4（鈍黄橙色）	完形	刳り込み瓦
144	赤瓦	T８	包含層	(16.0)	1.2	1.5	鰭状	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR6/3（鈍橙色）	2.5YR7/1（明赤褐色）	1/2	
145	赤瓦	T10	包含層	(11.9)	(9.1)	1.4	鰭状	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR6/4（鈍橙色）		
148	赤瓦	T２	上層	23.6	1.2	1.5	帯状	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	ほぼ完	突起が中位にある
149	赤瓦	T10	溝１	30.2	1.5	1.8	帯状	2.5YR5/3（明赤褐色）	2.5YR5/3（明赤褐色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	ほぼ完	内面ナデの下に編み痕？
150	赤瓦	T10	溝１	(28.7)	1.3	1.9	帯状	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5Y6/2（灰赤色）		
151	赤瓦	T３	包含層	(23.9)	1.3	1.8	帯状	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR7/1（明赤灰色）		
152	赤瓦	T10	包含層	(18.6)	1.3	1.5	環状	2.5YR5/6（暗赤褐色）	2.5YR5/6（暗赤褐色）	2.5YR7/1（明赤灰色）	1/2～	
154	赤瓦	T10	包含層	(16.2)	(1.0)	1.6	環状	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR6/3（鈍橙色）		1/3程
155	赤瓦	T10	包含層	(11.6)	1.3	2.0	?	2.5YR2/3（暗赤褐色）	2.5YR2/3（暗赤褐色）	2.5YR6/3（暗赤褐色）	1/3程	
268	赤瓦	T10	包含層	(8.4)	6.3	1.2	?	2.5YR5/3（鈍赤褐色）	2.5YR5/3（鈍赤褐色）	2.5YR7/1（明赤灰色）		1/2～
269	赤瓦	T10	井戸	(14.8)	8.0	1.3	環状	2.5YR4/5（鈍赤褐色）	2.5YR4/5（鈍赤褐色）	2.5YR7/1明赤灰色）	ほぼ完	玉緑部穴？

平瓦類

掲載番号	トレンチ	遺構・層名	種別	計測値（cm）			色調			残存状況	備考
				長さ	幅	厚	外面	内面	断面		
159	Ｔ８	Ｐ１	黒瓦	26.8		1.8	N6/（灰色）	N3/（暗灰色）	10YR7/1（灰白色）		
161	Ｔ５	炭・焼土層	黒瓦	26.0		1.6	10YR4/1（褐灰色）	10YR4/1（褐灰色）	N（灰白色）	1/2位	
166	T10	溝１	黒瓦			1.7	10YR4/1（褐灰色）	10YR4/1（褐灰色）	10YR8/1（灰白色）		釘穴焼成後穿孔。凹面ヘラミガキ
170	T10	溝１	赤瓦		21.0	1.6	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR5/3（鈍赤褐色）	N7/（灰白色）	1/4	凸面にクシ目。3～4条一単位
171	Ｔ１	溝1北	赤瓦	23.7		1.4	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	1/2位	両面にクシ目。5条1単位
172	Ｔ１	溝1北	赤瓦	22.9		1.6	2.5YR3/3（暗赤褐色）	2.5YR5/3（暗赤褐色）	2.5Y8/1（灰白色）	1/2位	凸面にクシ目
173	T10	石列検出中	赤瓦	23.4		1.5	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	1/2位	凸面にクシ目。6条１単位
175	Ｔ１	溝1北	赤瓦		21.2	1.6	2.5YR6/3（鈍橙色）	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR5/6（明赤褐色）		凸面にクシ目
176	T10	石列検出中	赤瓦			1.3	2.5YR4/3（鈍赤褐色）	2.5YR4/3（鈍赤褐色）	2.5YR4/3（鈍赤褐色）	1/4位	両面にクシ目。5条1単位
177	Ｔ２	上層	赤瓦			1.5	5YR6/6（橙色）	5YR6/6（橙色）	5YR6/6（橙色）		両面にクシ目
178	T10	石列検出中	赤瓦			1.5	2.5YR5/3（暗赤褐色）	2.5YR5/3（暗赤褐色）	N5/1（灰色）		両面にクシ目
179	T10	井戸	赤瓦		21.9	1.6	5YR6/4（鈍橙色）	5YR6/4（鈍橙色）	10R6/6（赤橙色）		釘穴両面穿孔
180	T10	井戸	赤瓦	(23.5)	21.6	1.7	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	N6/（灰色）		
183	Ｔ７	溝	赤瓦	29.7	22.2	1.6	10R5/2（灰赤色）	10R5/2（灰赤色）	5P5/1（紫赤色）	完形	被熱・すす付着。焼成時の亀裂
185	T10	溝１	赤瓦	32.3	28.1	2.0	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/8（橙色）		釘穴未貫通
186	Ｔ７	地山検出中	赤瓦			1.9	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR7/2（明赤灰色）		釘穴両面穿孔
187	T10	溝１	赤瓦		28.2	2.0	7.5R4/2（灰赤色）	7.5R4/2（灰赤色）	10YR7/1（灰白色）		凸面に弧状沈線。釘穴ほぼ未完通
188	T10	溝１	赤瓦	23.8	216	1.5	10R4/2（灰赤色）	10R4/2（灰赤色）	2.5YR7/2（明赤灰色）		
189	Ｔ７	溝	赤瓦		22.3	1.7	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR3/6（明赤褐色）	2/3	凹面へらナデ
191	Ｔ７	溝	赤瓦	24.2	22.0	1.9	N6/（灰色）	N6/（灰色）	2.5Y6/1（黄灰色）	完形	すす付着
192	Ｔ７	溝	赤瓦	22.6	19.9	1.4	7.5R4/2（灰赤色）	7.5R4/2（灰赤色）	10YR6/1（褐灰色）		
193	T10	溝１	赤瓦	25.2		1.7	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/6（橙色）	1/2	
194	Ｔ１	溝１	赤瓦		23.6	1.8	N4/（灰色）	N5/（灰色）	N7/（灰色）		凸面に沈線
195	Ｔ７	溝	赤瓦		21.6	1.7	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	1/3位	
196	Ｔ７	溝	赤瓦		21.6	1.7	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR3/6（明赤褐色）	N5/（灰色）		
197	T10	溝１	赤瓦	31.9	28.9	2.1	2.5YR5/4（鈍橙色）	2.5YR5/4（鈍橙色）	7.5YR8/4（浅黄橙色）		凹面に墨書
198	T10	溝１	赤瓦		28.8	2.0	7.5R4/2（灰赤色）	7.5R3/2（暗赤褐色）	10YR7/1（灰白色）	1/2位	
199	T10	溝１	赤瓦		31.0	1.8	10R4/2（灰赤色）	10R4/2（灰赤色）	2.5Y6/1（黄灰色）		
200	Ｔ１	石垣南	赤瓦	23.7		1.6	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5Y6/1（黄灰色）	2/3位	
201	T10	石列検出中	赤瓦			1.6	5YR7/4（橙色）	5YR7/4（橙色）	5YR6/6（橙色）		凸面に波状クシ目
202	Ｔ７	溝	赤瓦			1.2～1.6	2.5YR4/3（鈍赤褐色）	2.5YR4/3（鈍赤褐色）	N7/（灰白色）		
203	Ｔ７	溝	赤瓦			1.8	10R3/2（暗赤褐色）	10R3/2（暗赤褐色）	10R4/3（赤褐色）		
204	Ｔ７	ユンボ面	赤瓦			1.9	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	5Y8/1（灰白色）		2枚溶着
205	Ｔ７	溝	赤瓦			1.5	2.5YR5/2（赤灰色）	10YR4/2（赤灰色）	10R5/1（赤灰色）		2枚溶着
206	Ｔ７	溝	赤瓦	22.0	(13.5)	1.8	2.5YR4/2（灰赤色）	2.5YR4/2（灰赤色）	2.5YR5/1（赤灰色）	1/2	
211	T10	溝１	赤瓦		23.0	1.7	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR4/6（橙色）	2.5YR4/6（橙色）		釘穴未貫通に近い

刻印瓦

掲載番号	トレンチ	遺構・層名	種別				押印部位		計測値（cm）			色調			備考
			種類	印影	焼成	名称	凸面	方向	長さ	幅	厚さ	外面	内面	断面	
118	Ｔ７	溝状遺構	わ	陽刻	赤瓦	軒平	凸面	斜め	瓦当高3.6		1.5	5YR5/3（鈍赤褐色）	5YR5/3（鈍赤褐色）	5YR5/4（鈍赤褐色）	煤付着
119	Ｔ７	溝	わ	陽刻	赤瓦	軒平	凸面	斜め	(18.3)	－	1.5	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	瓦当高36㎜
123	T10	溝１	於	陽刻	赤瓦	軒平	側面	横向き	－	－	1.7	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	
127	T10	溝１	わ	陽刻	黒瓦	丸瓦	凹面	上向き	(26.3)	128	1.7	2.5Y7/1（灰白色）	2.5Y7/1（灰白色）	2.5Y8/2（灰白色）	
130	T10	井戸	わ	陽刻	黒瓦	丸瓦	凸面	上向き	－	－	1.8	5G3/1（暗青灰色）	5G3/1（暗青灰色）	2.5YR7/1（灰白色）	
131	T10	溝１	わ	陽刻	黒瓦	丸瓦	凹面		(24.8)	－	1.7	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5Y5/1（赤灰色）	
132	Ｔ６	炭焼土層	わ	陽刻	赤瓦	丸瓦	凸面	逆向	－	138	1.9	10YR7/4（鈍黄橙色）	10YR7/4（鈍黄橙色）	10YR7/2（鈍黄橙色）	
133	Ｔ７	溝	わ	陽刻	黒瓦	丸瓦	凸面		－	－	1.5	N3/（暗灰色）	N3/（暗灰色）	N8/（灰白色）	
135	Ｔ１	溝１	記号	陽刻	赤瓦	丸瓦	側面		27.8	118	1.6	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/6（暗赤褐色）	
147	Ｔ７	溝	わ	陽刻	赤瓦	丸瓦	凹面		－	－	1.5	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	
158	Ｔ１	包含層	吉	陰刻	赤瓦	丸瓦	凸面	上向き	－	－	1.5	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	10YR7/4（鈍黄橙色）	
160	Ｔ７	溝	わ	陽刻	黒瓦	平瓦	側面	上向	27	(200)	1.5	7.5Y8/1（灰白色）	7.5Y8/1（灰白色）	7.5Y8/1（灰白色）	
162	Ｔ１	上層	わ	陽刻	黒瓦	平瓦	側面	横向	－	－	1.6	10YR5/1（灰色）	10YR5/1（灰色）	2.5Y7/1（灰白色）	
163	Ｔ７	溝	わ	陽刻	黒瓦	平瓦	側面	下向	－	－	1.5	N3/（暗灰色）	N3/（暗灰色）	10Y8/1（灰白色）	
164	Ｔ７	溝	わ	陽刻	黒瓦	平瓦	側面	下向	－	－	1.7	2.5Y8/2（灰白色）	2.5Y7/1（灰白色）	2.5Y8/2（灰白色）	
166	Ｔ７	溝	わ	陽刻	黒瓦	平瓦	側面	横向	－	－	1.5	N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5Y8/2（灰白色）	
167	Ｔ７	溝	わ	陽刻	黒瓦	平瓦	側面	横向	－	－	1.5	N5/（灰色）	N5/（灰色）	10YR8/1（灰白色）	
168	T10	堀状遺構	わ	陽刻	黒瓦	平瓦	側面	横向	－	－	1.8	2.5YR7/1（暗赤灰色）	2.5YR7/1（暗赤灰色）	2.5YR7/1（暗赤灰色）	まる「わ」
169	Ｔ１	溝１	松重	陰刻	黒瓦	平瓦	凹面		－	－	1.5	N4/（灰色）	N4/（灰色）	N8/（灰白色）	明治？
181	Ｔ７	溝	於	陽刻	赤瓦	平瓦	凹面	上向	(16.4)	22.6	1.7	2.5YR6/2（灰赤色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/6（暗赤褐色）	
182	T10	井戸	わ	陽刻	赤瓦	平瓦	凸面	下向	(19.8)	23.4	1.6	2.5YR7/4（淡赤燈色）	2.5YR6/6（橙色）	N5/1（灰色）	鉄釘残
190	Ｔ７	溝	わ	陽刻	赤瓦	平瓦	側面	上向	21.8	21.4	1.6	2.5YR4/2（灰赤色）	2.5YR4/2（灰赤色）	10YR3/1（黒褐色）	歪み大
212	Ｔ７	溝	わ	陽刻	赤瓦	平瓦	凹面		(23.5)	－	1.5	10YR6/4（鈍黄橙色）	10YR6/4（鈍黄橙色）	10YR6/4（鈍黄橙色）	2次的に被熱
213	Ｔ７	溝	わ	陽刻	赤瓦	平瓦	側面	上向	－	22.8	1.5	2.5YR4/3（鈍赤褐色）	2.5YR5/3（鈍赤褐色）	2.5YR5/3（鈍赤褐色）	
214	T10	溝１	わ	陽刻	赤瓦	平瓦	側面	上向	－	－	1.5	10YR6/4（鈍黄橙色）	10YR6/4（鈍黄橙色）	10YR6/4（鈍黄橙色）	
215	Ｔ７	包含層	わ	陽刻	赤瓦	平瓦	凹面		－	－	1.5	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	
216	Ｔ７	溝	わ	陽刻	赤瓦	平瓦	側面		－	－	1.8	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/1（赤灰色）	2次的に被熱
217	Ｔ７	溝	わ	陽刻	赤瓦	平瓦	側面	横向	－	－	1.4	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR4/1（赤灰色）	
218	Ｔ７	溝	わ	陽刻	赤瓦	平瓦	凸面		－	－	1.5	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	
219	T10	溝１	わ	陽刻	赤瓦	平瓦	凸面		－	－	1.6	2.5YR5/4（鈍橙色）	2.5YR5/4（鈍橙色）	2.5YR5/4（鈍橙色）	
220	Ｔ７	溝	わ	陽刻	赤瓦	平瓦	端面	横向	－	－	1.5	2.5YR6/2（赤灰色）	2.5YR6/2（赤灰色）	N6/（灰色）	
221	T10	溝１下層	菱形	陽刻	赤瓦	平瓦	側面		－	－	2.5	5YR5/3（鈍赤褐色）	5YR5/3（鈍赤褐色）	2.5Y5/1（赤灰色）	菱形内に「×」
222	Ｔ７	溝	×	陽刻	赤瓦	平瓦	凸面		－	－	1.8	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR5/3（鈍赤褐色）	10Y8/2（灰白色）	凸面やや凸凹
223	T10	溝１	十	陽刻	赤瓦	平瓦	凸面		－	－	1.8	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5Y8/1（灰白色）	

掲載番号	トレンチ	遺構・層名	種別				押印部位		計測値（cm）			色調			備考
			種類	印影	焼成	名称	凸面	方向	長さ	幅	厚さ	外面	内面	断面	
223	T10	溝１	キ□	陽刻	赤瓦	平瓦	凹面		－	－	1.8	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5Y8/1（灰白色）	
224	T10	溝１	於	陽刻	赤瓦	平瓦	側面	横向	－	－	1.6	2.5YR5/2（赤灰色）	10ＹＲ７/4（鈍黄橙色）	10YR7/2（鈍黄橙色）	
225	T10	溝１	キ長	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	逆向き？	－	－	2.0	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	2.5Y8/3（浅黄色）	
226	T10	溝１	キ長	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	端面近	－	－	2.0	10YR6/4（鈍黄橙色）	10YR6/4（鈍黄橙色）	2.5YR7/4（淡赤橙色）	
227	T10	溝１	キ長	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	隅近く	－	－	1.9	10YR4/4（褐色）	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	
228	T10	溝１	キ長	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	隅近く	－	－	1.9	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR7/4（淡赤橙色）	
229	T10	溝１	キ長	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面		－	－	1.7	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR3/4（暗赤褐色）	N7/（灰白色）	
230	Ｔ７	溝	キ長	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	隅近く	－	－	1.3	10YR4/4（褐色）	10YR4/4（褐色）	10YR7/4（鈍黄橙色）	
231	Ｔ７	溝	キ平	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	逆向	－	－	1.4	10YR7/3（鈍黄橙色）	10YR7/3（鈍黄橙色）	10YR8/3（浅黄橙色）	
232	Ｔ７	包含層	キ平	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	逆向	－	－	1.4	2.5YR5/6（明赤褐色）	2.5YR5/6（明赤褐色）	2.5YR5/6（明赤褐色）	
233	T10	溝１	キ平	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	逆向？	－	－	1.3	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR6/6（橙色）	
234	T10	溝１	キ平	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	端面近	－	－	1.3	2.5YR3/2（暗赤褐色）	2.5YR5/4（鈍暗褐色）	10YR8/3（浅黄橙色）	
234	T10	溝１	ミ四	陰刻	赤瓦	平瓦	凹面	端面近	－	－	1.3	2.5YR3/2（暗赤褐色）	2.5YR5/4（鈍暗褐色）	10YR8/3（浅黄橙色）	
235	Ｔ７	溝	キ平	陽刻	赤瓦	平瓦	凸面	逆向	－	－	1.3	2.5YR5/6（明赤褐色）	2.5YR5/6（明赤褐色）	2.5YR5/6（明赤褐色）	
235	Ｔ７	溝	ミ五	陽刻	赤瓦	平瓦	凹面	正方向	－	－	1.3	2.5YR5/6（明赤褐色）	2.5YR5/6（明赤褐色）	2.5YR5/6（明赤褐色）	
236	Ｔ７	溝	キ□	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	隅近く	－	－	1.5	10YR6/3（鈍黄橙色）	10YR6/3（鈍黄橙色）	10YR6/3（鈍黄橙色）	
237	Ｔ７	溝	キ□	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	逆向	－	－	1.4	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR7/4（淡赤橙色）	
238	Ｔ７	溝	キ四	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面		－	－	2.1	10YR7/4（鈍黄橙色）	10YR7/4（鈍黄橙色）	10YR8/2（灰白色）	
239	T1	上層	キ与	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	隅近く	－	－	1.4	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	
240	Ｔ７	溝	キ四	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	逆向	－	－	1.4	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR6/3（鈍橙色）	2.5YR6/3（鈍橙色）	
240	Ｔ７	溝	ミ与	陰刻	赤瓦	平瓦	凹面	逆向	－	－	1.4	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR6/3（鈍橙色）	2.5YR6/3（鈍橙色）	
241	Ｔ７	溝	キ孫	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面		－	－	1.5	10YR6/4（鈍黄橙色）	10YR6/4（鈍黄橙色）	10YR6/4（鈍黄橙色）	
242	Ｔ３	包含層	キ孫	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面		－	－	1.9	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5YR4/6（赤褐色）	2.5Y8/3（浅黄色）	
243	T10	溝１	○	陰刻	赤瓦	平瓦	凹面		－	－	0.5	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR7/1（灰白色）	
243	T10	溝１	キ孫	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	端面近	－	－	1.5	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR7/1（灰白色）	
244	T10	溝１	○	陰刻	赤瓦	平瓦	凹面		－	－	1.9	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	10YR8/4（淡黄橙色）	
245	T10	溝１	吉	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面		－	－	1.6	2.5YR4/3（鈍赤褐色）	2.5YR4/3（鈍赤褐色）	2.5YR5/1（赤灰色）	
246	T10	石列検出中	キ与	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面	隅近く	－	－	1.2	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	
246	T10	石列検出中	ミ四	陰刻	赤瓦	平瓦	凹面	隅近く	－	－	1.2	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	
247	Ｔ７	包含層	ミ孫	陰刻	赤瓦	平瓦	凹面		－	－	1.9	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	5Y6/4（浅黄色）	
248	Ｔ７	溝	ミ七	陰刻	赤瓦	平瓦	凹面	逆向	－	－	1.4	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/1（赤灰色）	
249	T10	溝１	キ孫	陰刻	赤瓦	平瓦	凸面		－	－	1.4	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR7/4（淡赤橙色）	
249	T10	溝１	ミ五	陰刻	赤瓦	平瓦	凹面	上向	－	－	1.4	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR7/4（淡赤橙色）	
257	Ｔ７	溝	わ	陽刻	黒瓦	輪違	凸面	下向	－	－	1.4	5Y7/1（灰白色）	5Y6/1（灰色）	—	
258	Ｔ７	溝	於	陽刻	黒瓦	輪違	凸面	下向	－	－	1.5	5Y5/1（灰色）	5Y5/1（灰色）	5Y2/2（灰白色）	
261	Ｔ７	溝	わ	陽刻	黒瓦	熨斗	凸面		－	11.5	1.7	N4/（灰色）	N4/（灰色）	2.5GY（灰白色）	
263	Ｔ７	包含層	わ	陽刻	赤瓦	面戸	凹面		－	－	1.5	10YR7/3（鈍黄橙色）	10YR7/3（鈍黄橙色）	10YR7/3（鈍黄橙色）	
264	Ｔ７	包含層	わ	陽刻	赤瓦	面戸	凸面		－	－	1.6	10YR6/6（明黄褐色）	10YR6/6（明黄褐色）	10YR6/6（明黄褐色）	
272	Ｔ７	溝	わ	陽刻	黒瓦	道具	凸面		－	－	16.0	N4/（灰色）	N4/（灰色）	10YR8/1（灰白色）	

ヘラガキ・墨書瓦

掲載番号	種類	トレンチ	遺構・層名	種別		計測値（cm）			色調			備考
				焼成	名称	長さ	幅	厚さ	外面	内面	断面	
125	ヘラガキ	Ｔ７	溝	黒瓦	平瓦	－	13.5	1.6	N4/（灰色）	7.5YR7/1（明褐灰色）	7.5YR7/1（明褐灰色）	なで、凹面に横方向の条線
143	ヘラガキ	Ｔ２	包含層	赤瓦	丸瓦	－	－	1.3	10YR4/3（鈍黄褐色）	2.5YR5/3（鈍赤褐色）	10YR6/6（明黄褐色）	
146	ヘラガキ	Ｔ１	石垣検出中	赤瓦	丸瓦	－	－	1.4	2.5YR5/6（明赤褐色）	2.5YR5/6（明赤褐色）	2.5YR7/6（橙色）	
152	へらガキ	T10	溝1下層	赤瓦	丸瓦	－	12.0	1.6	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR6/1（灰赤色）	凹面ムシロ条圧痕後ナデ
156	ヘラガキ	Ｔ７	包含層	赤瓦	丸瓦	－	－	1.5	10YR4/1（褐灰色）	10YR7/4（鈍黄橙色）	10YR7/4（鈍黄橙色）	「わ」
157	ヘラガキ	T10	溝１	赤瓦	丸瓦	－	－	1.4	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR3/4（暗赤褐色）	2.5YR6/1（灰赤色）	
174	ヘラガキ	Ｔ２	上層	赤瓦	平瓦	－	－	1.6	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	菱形
184	墨書	Ｔ１	溝１	赤瓦	平瓦	－	28.7	2.0	10YR6/4（鈍黄燈色）	10YR6/4（鈍黄燈色）	10YR8/3（浅黄橙色）	凹面に「わ」墨書
207	ヘラガキ	T10	石列検出中	赤瓦	平瓦	－	－	1.3	2.5YR5/6（明赤褐色）	2.5YR5/6（明赤褐色）	2.5YR5/6（明赤褐色）	
208	ヘラガキ	Ｔ７	包含層	赤瓦	平瓦	－	－	1.5	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR6/4（鈍橙色）	2.5YR7/4（淡赤橙色）	
209	ヘラガキ	T10	溝１	赤瓦	平瓦	－	－	1.4	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR5/4（鈍赤褐色）	2.5YR6/2（赤灰色）	「試」
210	ヘラガキ	Ｔ７	溝	赤瓦	平瓦	－	－	1.5	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	「於」
267	ヘラガキ	Ｔ７	溝	黒瓦	平瓦	－	－	1.5	N3/（暗灰色）	N3/（暗灰色）	5YR8/2（灰白色）	「口」
271	ヘラガキ	T10	井戸	赤瓦	その他	－	－	2.5	10YR6/4（鈍黄燈色）	10YR6/4（鈍黄燈色）	2.5YR7/6（橙色）	

その他の瓦

掲載番号	トレンチ	遺構･層名	種別		計測値（cm）			色調			残存状況	備考
			焼成	名称	長さ	幅	厚さ	外面	内面	断面		
251	Ｔ９	包含層	赤瓦	鬼瓦	－	－	2.3･3.5	2.5Y4/4（鈍赤褐色）	2.5Y4/4（鈍赤褐色）	2.5Y5/3（鈍赤褐色）		
257	T10	溝１	赤瓦	熨斗瓦	29.5	－	1.3	5YR5/6（明赤褐色）	5YR5/6（明赤褐色）	5YR5/6（明赤褐色）		凹面ミガキ？、凸面細かい条線
260	T10	溝１	赤瓦	熨斗瓦	32.5	13.9	2.3	10YR6/6（明黄褐色）	10YR6/6（明黄褐色）	10YR6/4（鈍黄燈色）	ほぼ完	ナイガイ面ナデ
262	T10	井戸	赤瓦	熨斗瓦	－	－	2.0	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR7/2（暗赤灰色）		釘穴両面穿孔
265	T10	溝１下層	赤瓦	棟瓦	－	－	1.7	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5Y6/2（灰赤色）		凹面板状押圧のちナデ
275	Ｔ９	包含層	赤瓦	拝み瓦	－	－	1.9	2.5YR5/6（明赤褐色）	2.5YR5/6（明赤褐色）	2.5YR7/1（明赤灰色）		
276	T10	包含層	赤瓦	拝瓦？	－	－	2.4	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	7.5YR7/2（明褐灰色）		
266	Ｔ７	包含層	赤瓦	塼瓦？	16.7	13.5	1.3	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR3/6（暗赤褐色）	2.5YR7/2（明赤灰色）		ほぼ完形

敷瓦

掲載番号	トレンチ	出土遺構･層名	計測値（cm）			色調			残存状況	備考
			長さ	辺長	最大厚	外面	内面	断面		
277	T10	溝１下層	24.4	14.0	3.7	10YR6/7（褐灰色）	10YR8/4（浅黄橙色）	－	完形	重量3kg。焼き鈍し
278	T10	堀状遺構掘り下げ	－	－	3.2	10YR4/1（褐灰色）	2.5Y8/3（浅黄色）	10YR6/1（褐灰色）	1/3	焼き鈍し
279	T１	溝1の北掘り下げ	－	13.0	3.7	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	5BG6/1（青灰色）	1/4	細かなﾊｹの条線
280	T１	上層	－	13.1	3.7	2.5Y4/6（赤褐色）	2.5Y4/6（赤褐色）	2.5YR6/6（橙色）	1/3	細かなﾊｹの条線
281	T７	P７	－	13.2	3.7	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR4/4（鈍赤褐色）	2.5YR6/2（赤灰色）	1/3	

支柱

掲載番号	トレンチ	遺構・層名	計測値（cm）			重量（g）	色調		残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚		外面	断面		
C１	T７	溝	22.1	8.5	6.8	1,041	10YR5/2（灰黄褐色）	－	完形	全体に灰をかぶる
C２	T７	溝	22.5	9.0	7.4	1,065	2.5YR6/8（橙色）	－	完形	ほとんど灰をかぶってない。表面に刷毛の条線
C３	T７	溝	23.7	8.5	6.4	1,227	5YR7/1（明褐灰色）	－	完形	上半部に灰をかぶる。両端に土が付着
C４	T７	溝	24.8	7.0	7.2	1,129	2.5YR3/4（暗赤褐色）	－	完形	端部以外に灰をかぶる
C５	T３	包含層	24.0	8.3	7.0	1,179	7.5YR4/2（灰褐色）	－	完形	全体に灰をかぶる。底端に土（窯体片）が付着
C６	T７	溝	22.1	8.7	6.8	－	10YR6/2（灰黄褐色）	－	完形	2次的に被熱。下は灰がたまった中にあった。
C７	T７	溝	(17.7)	8.3	6.8	－	10YR6/1（褐灰色）	10YR6/1（褐灰色）	1/2以上	底端に窯体付着。裏面にも灰をかぶる
C８	T７	溝	(19.0)	10.3	7.4	－	－	10YR6/1（褐灰色）	1/2強	脚部瓦円柱状。窯壁が付着
C９	T７	溝	(14.1)	9.1	8.1	－	10YR7/1（灰白色）	10YR7/4（褐灰色）	1/2程	
C10	T７	溝	(14.7)	6.6	6.2	－	10YR3/3（暗褐色）	10YR6/2（暗黄褐色）	1/2程	
C11	T７	溝	(14.6)	8.0	6.9	－	10YR4/1（褐灰色）	2.5YR4/2（赤灰色）	1/2程	前面に灰をかぶる
C12	T７	包含層	(13.9)	8.2	7.1	－	2.5Y6/1（黄灰色）	5YR6/3（鈍橙色）	1/2程	端面に土が付着
C13	T７	溝	(13.1)	8.2	7.1	－	5YR6/4（鈍橙色）	5YR6/4（鈍橙色）	1/2程	灰をかぶっていない
C14	T７	包含層	(13.2)	7.4	7.1	－	10R4/2（灰赤色）	7.5YR5/3（鈍褐色）	1/2程	
C15	T７	包含層	(13.9)	8.6	7.0	－	2.5YR6/6（橙色）	2.5YR6/6（橙色）	1/2程	灰をかぶっていない
C16	T７	包含層	(10.5)	8.0	7.2	－	2.5YR4/2（灰赤色）	2.5YR7/6（橙色）	1/2程	背には灰をかぶっていない
C17	T７	溝	(10.7)	8.8	7.3	－	2.5YR4/3（鈍赤褐色）	5YR6/3（鈍橙色）	1/2程	
C18	T７	溝	(7.6)	7.6	6.7	－	5YR6/4（鈍橙色）	5YR6/3（鈍橙色）	1/2程	
C19	T７	溝	(12.4)	9.2	7.2	－	7.5YR6/4（鈍橙色）	7.5YR6/4（鈍橙色）	1/2程	
C20	T７	包含層	(15.3)	8.7	7.5	－	5YR4/2（灰褐色）	7.5YR6/3（鈍褐色）	1/2程	
C21	T７	包含層	(9.0)	6.7	6.6	－	10YR6/3（鈍黄燈色）	7.5YR6/4（鈍橙色）	1/3程	灰はかぶっていない
C22	T７	包含層	(10.5)	7.6	7.0	－	2.5Y6/1（黄灰色）	5YR5/1（褐灰色）	1/2程	
C23	T７	包含層	(6.7)	7.7	7.2	－	10R5/3（赤褐色）	5YR6/3（鈍橙色）	1/2程	

棚板

掲載番号	トレンチ	遺構・層名	計測値（cm）			色調		重量（g）	備考
			長さ	幅	厚さ	外面	断面		
C24	T３	包含層	32.3	28.6	3.0	2.5YR5/6（明赤褐色）	—	6,200	三日月状の痕跡・わらの痕跡。火だすきの跡。
C25	T７	溝	28.3	(18.4)	3.0	10YR6/6（明黄褐色）	10YR6/2（灰黄褐色）	(2,500)	余り灰をかぶってない。製品の跡や三日月状の圧痕
C26	T７	溝	32.4	(23.3)	3.6	2.5YR4/4（暗赤褐色）	2.5YR6/1（赤灰色）	(4,400)	製品の跡、わらの跡が残る。裏も少し使用。
C27	T７	地山検出中	(18.2)	(17.7)	2.8	7.5YR5/2（褐灰色）	7.5YR5/1（褐灰色）	(884)	両面使用。よく灰をかぶる。わら支柱・平瓦の痕跡
C28	T７	溝	(17.6)	(14.1)	2.6	7.5Y4/2（灰褐色）	7.5YR6/1（褐灰色）	(1,116)	支柱の跡あり。
C29	T７	溝	(23.1)	(17.0)	3.1	10YR6/1（褐灰色）	10YR6/1（褐灰色）	1,750	反りが大きい。あまり使ってないよう。
C30	T７	溝	(18.1)	(14.9)	2.9	10YR5/1（褐灰色）	10YR5/1（褐灰色）	1,200	両面に土･瓦片が付着。灰かぶり
C31	T７	溝	(22.2)	(19.0)	3.0	10YR6/2（灰黄褐色）	10YR6/2（灰黄褐色）		上面灰かぶり
C32	T７	包含層	(20.5)	(16.6)	3.1	5YR6/2（灰褐色）	5YR5/3（鈍赤褐色）	1,483	平瓦剥離痕。土がついている。両面灰をかぶる
C33	T７	溝	(19.0)	(13.5)	2.6	10YR6/4（鈍黄燈色）	10YR6/6（明黄褐色）	876	あまり灰はかぶってない
C34	T７	溝	(15.3)	(17.0)	3.0	10YR6/6（明黄褐色）	10YR6/6（明黄褐色）	866	余る灰をかぶっていない
C35	T７	溝	(16.1)	(17.6)	3.0	10YR5/1（褐灰色）	10YR5/2（灰褐色）	562	わらの跡、支柱の跡
C36	T３	包含層	(13.7)	(11.1)	2.7	10YR5/1（褐灰色）	10YR6/4（鈍黄橙色）	435	両面灰をかぶる
C37	T７	溝	(18.7)	(10.0)	3.0	5YR4/2（灰褐色）	10YR6/3（鈍黄燈色）	594	両面灰をかぶる
C38	T７	包含層	(9.6)	(9.3)	3.0	10YR4/1（褐灰色）	10YR6/4（鈍黄橙色）	357	両面灰をかぶる
C39	T７	溝	(12.5)	(6.3)	3.1	10YR4/2（灰黄褐色）	10YR6/3（鈍黄燈色）	337	両面灰をかぶる
C40	T８	包含層	(13.5)	(7.3)	2.6	10YR4/1（褐灰色）	10YR5/2（灰黄褐色）	354	両面灰をかぶる
C41	T７	溝状遺構	(12.4)	(9.1)	2.8	10YR5/2（灰黄褐色）	10YR6/4（鈍黄橙色）	450	両面灰をかぶる
C42	T７	溝状遺構	(14.9)	(9.0)	2.8	10YR4/2（灰黄褐色）	10YR5/2（灰褐色）	528	側面に砂付着。両面に灰
C43	T７	包含層	(13.8)	(17.1)	2.9	10YR6/2（灰黄褐色）	10YR7/4（鈍黄燈色）	682	

硯

掲載番号	トレンチ	遺構・層名	計測値（cm）			重量（g）	石材	時期	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚					
S1	T１	溝１	12.8	6.0	1.6	227.4	赤間石	江戸	ほぼ完形	裏面刻書「赤間関」
S2	T10	溝１	(9.9)	6.0	1.4	86.38	赤間石	江戸	一部欠	裏面刻書「赤間関」
S3	T１	溝１	(11.3)	8.0	(1.8)	(301.76)		江戸	海部分欠損	

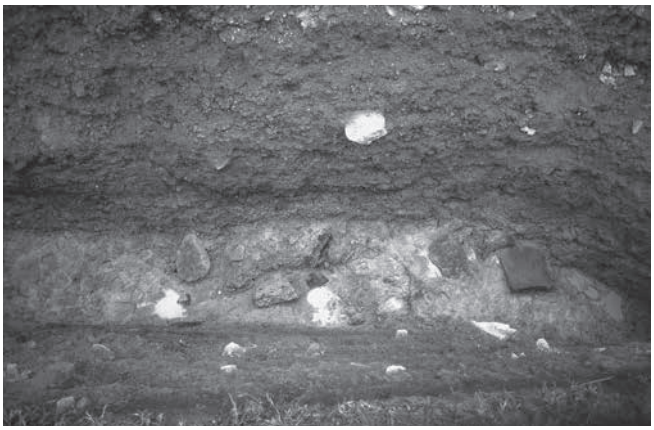
銭貨

掲載番号	トレンチ	遺構・層位	器種	材質	計測値（mm）			重量（g）	時期	残存状況	備考
					最大長	最大幅	最大厚				
M1	T８	排土中	寛永通宝	銅	22.60	－	1.15	2.03	江戸時代	完形	
M2	T８	排土中	寛永通宝	銅	22.72	－	1.19	2.39	江戸時代	完形	
M3	T１	北部分排土中	寛永通宝	銅	23.00	－	1.10	2.88	江戸時代	完形	
M4	T９	炭層中	半銭	銅	21.99	－	1.37	3.43	明治時代	完形	

Ｔ１　溝（南西から）

Ｔ２　石垣（南から）

Ｔ３　大正期造成土（南西から）



Ｔ３　炭・焼土層、遺物出土状況（西から）

Ｔ３　石垣（南西から）

Ｔ４　旧制中学校校舎基礎（東から）

Ｔ４　暗渠・溝（南から）

Ｔ５　炭・焼土層（南東から）

図版２

Ｔ６　礎石ほか（西から）

Ｔ７　全景（南から）

Ｔ７　Ｐ１（西から）

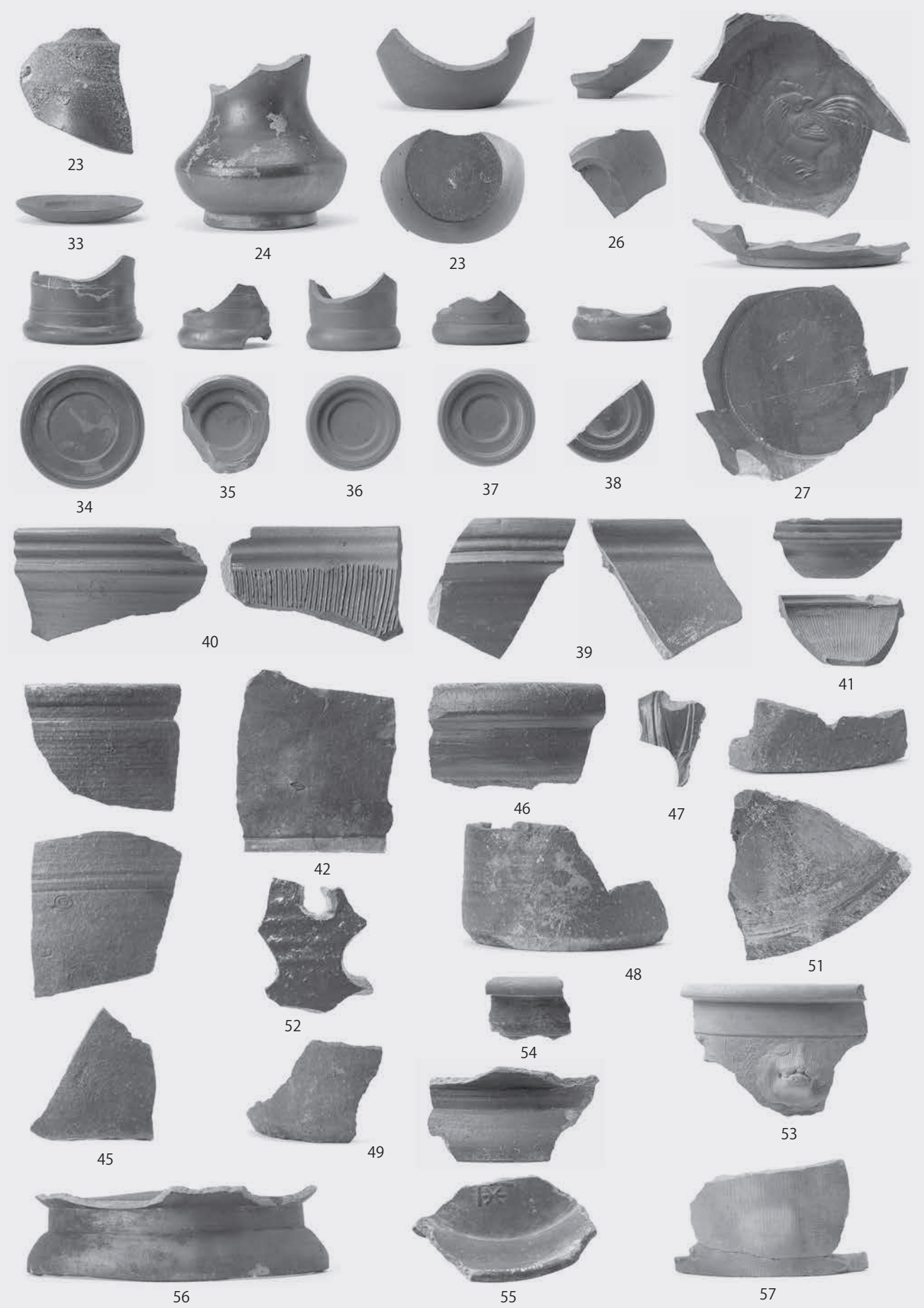
Ｔ８　全景（北西から）

Ｔ９　石列・焼土面（南から）

Ｔ10　石垣・暗渠・石列（南から）

Ｔ10　水路・暗渠ほか（南から）

Ｔ10　井戸（西から）


23
33
24
23
26
34
35
36
37
38
27
40
39
41
46
47
42
48
51
52
54
53
45
49
56
55
57

備前焼・瓦質土器

図版 4

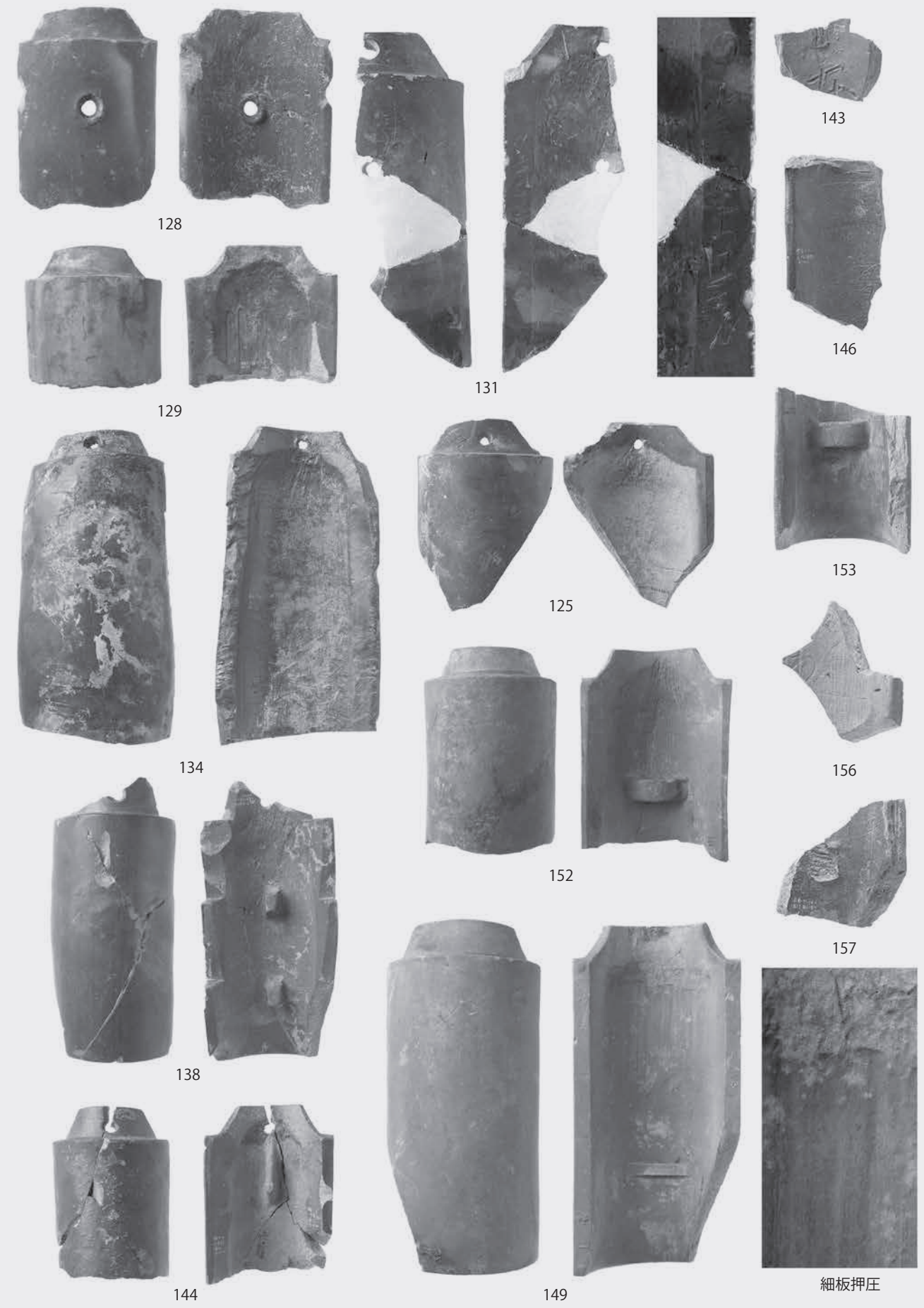
58
59
61
62
63
60
64
68
73
74
77
79
78
84
85
80
83
81
82
86
88
250
90
252
253
256
91
92

瓦 1

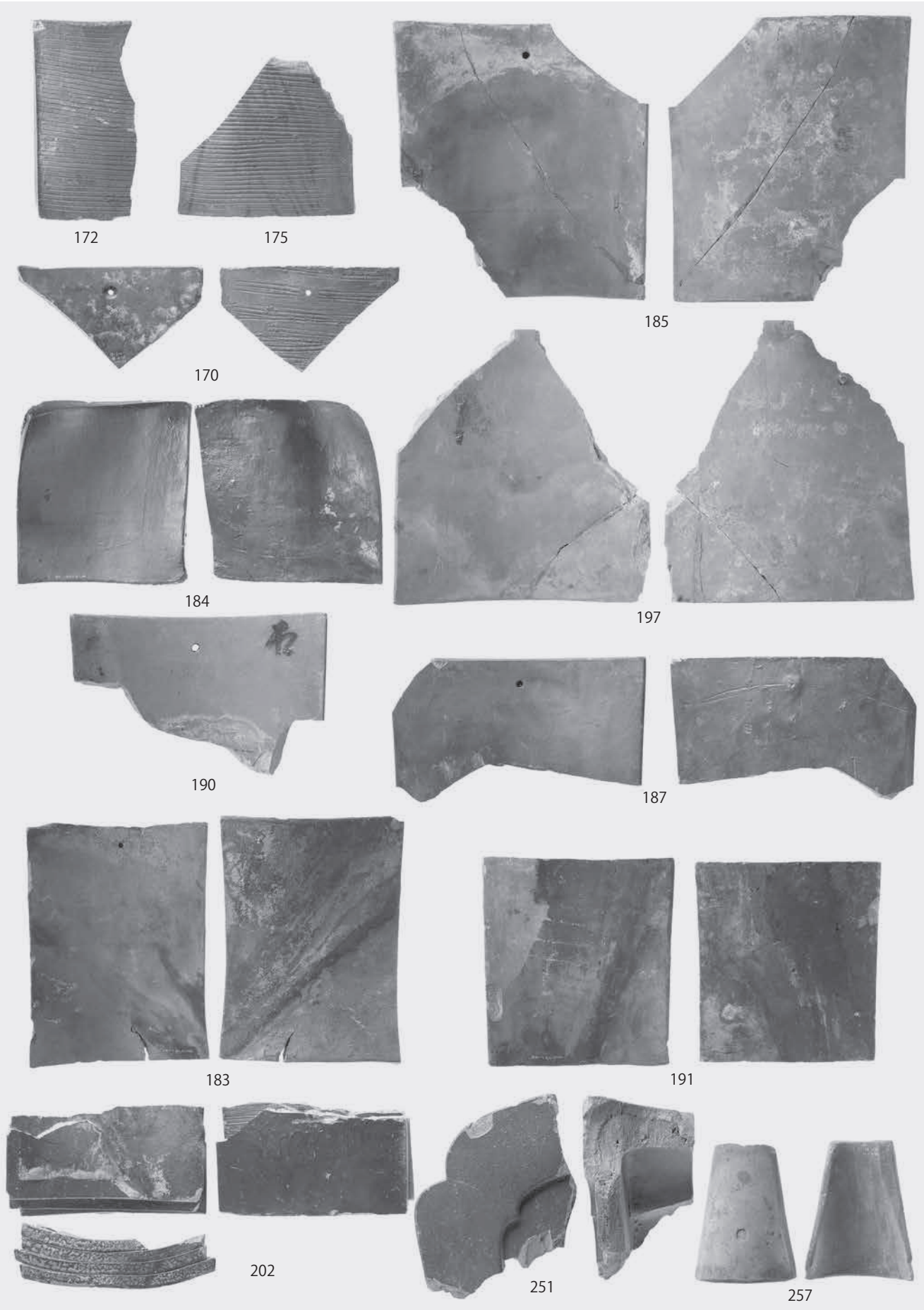
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
109
111
112
113
110
114
115
116
118
270

瓦2

図版 6

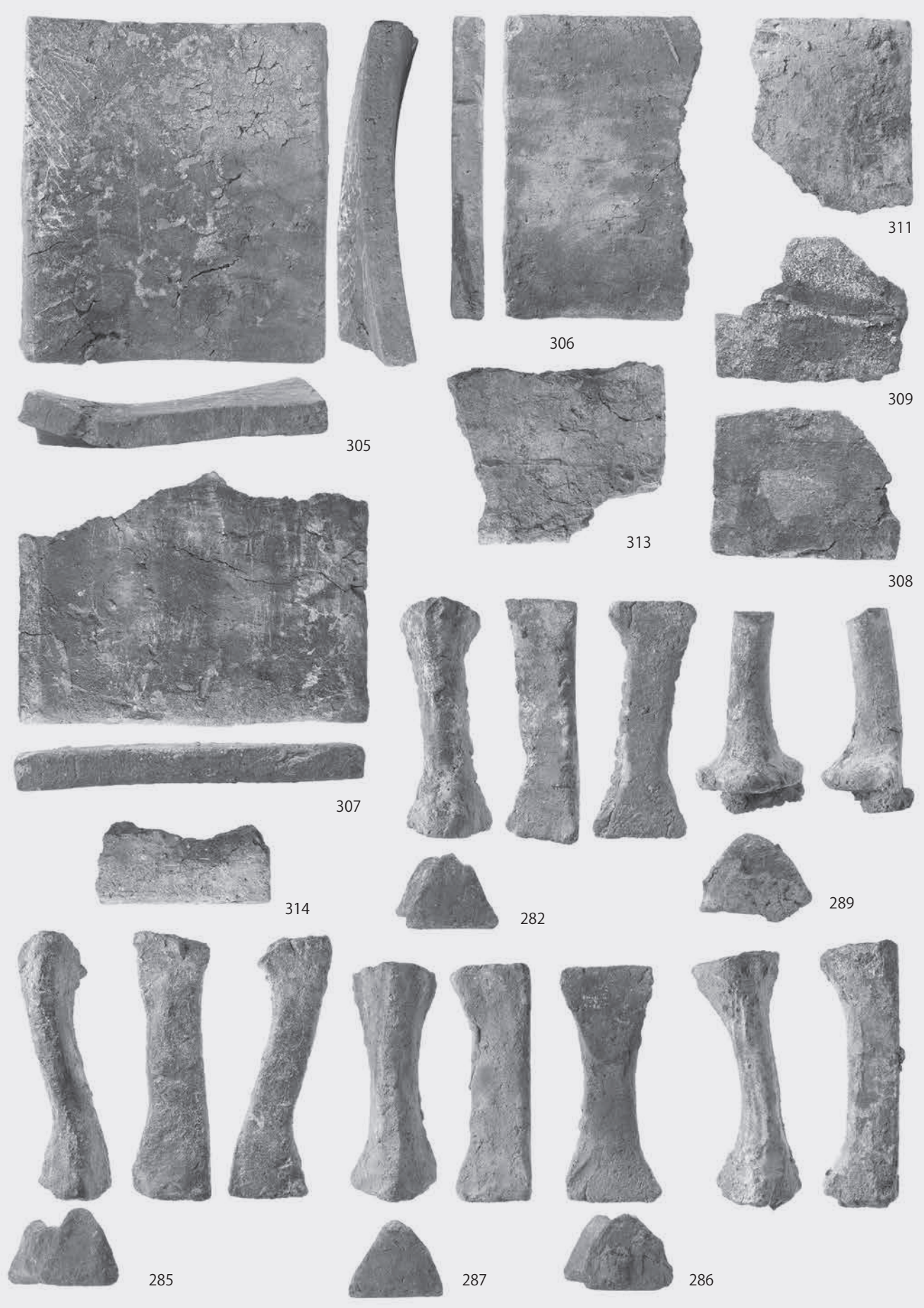


瓦３

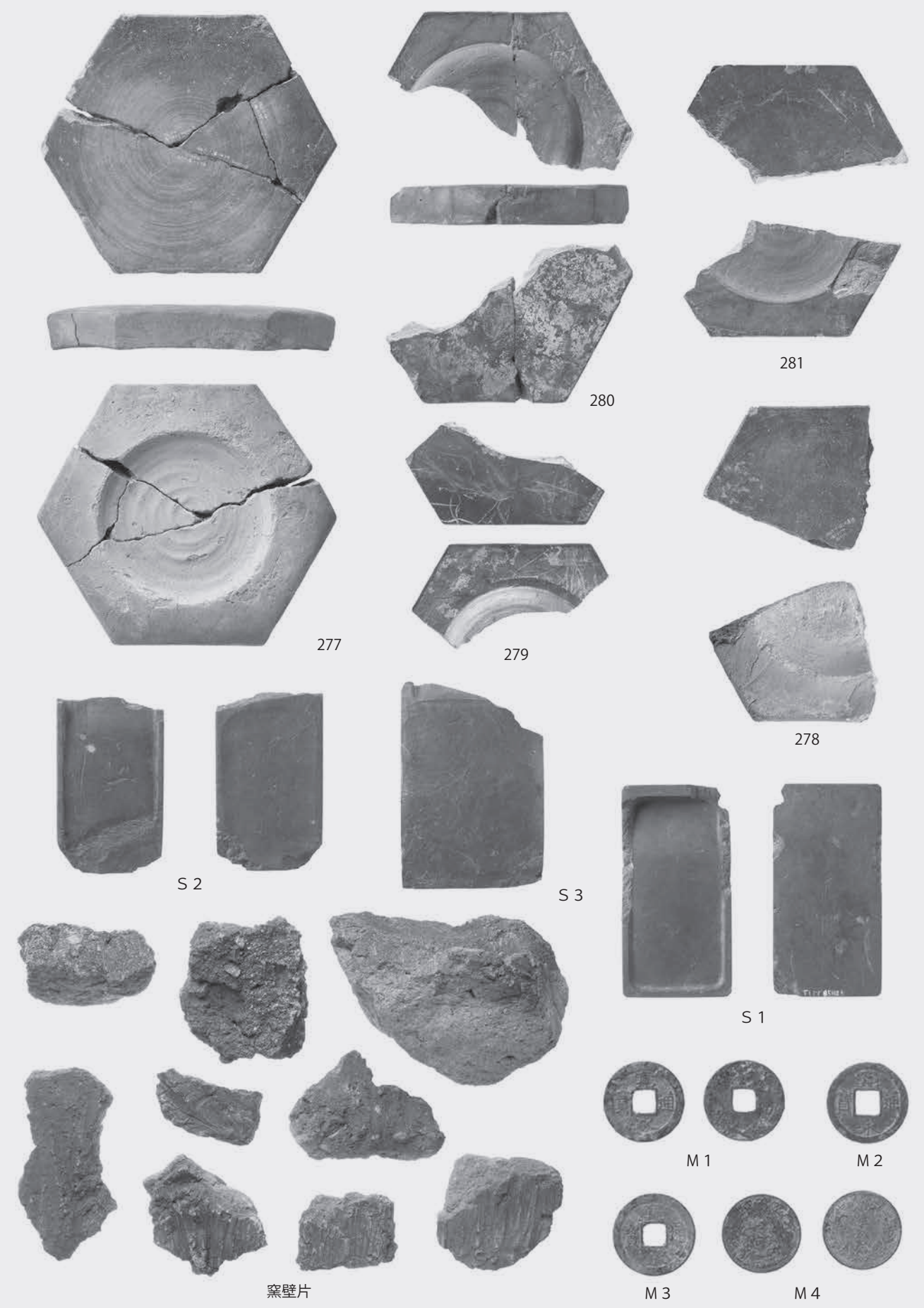


瓦４

図版 8



棚板・支柱



敷瓦・硯・銭貨・窯壁片

図版 10

245
158
238
240 凸
246 凸
239
242
241
243
249
235 凸
231
234 凸
233
232
229
226
230
225
228
227
248
240 凹
235 凹
249
246 凹
234 凹
247
236
237
223 凹
223 凸
222
162
258
224
123
181
221
118
K48
257
217
166
167
214
220
213
K55
190
182
212
218
219
130
264
132
263
147
127
133
131
163
168
164
215
272
261
160
242 凸
243 凹
244 凹
135
257
未実測
未実測
169
211
210
267
174

瓦の刻印

報告書抄録

ふ り が な	とくべつしせき　きゅうしずたにがっこう
書　　名	特別史跡 旧閑谷学校
副 書 名	岡山県青少年教育センター整備事業に伴う確認調査
巻　　次	
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	253
編著者名	弘田和司・平井泰男
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所 在 地	〒701-0136　岡山県岡山市北区西花尻1325-3　TEL 086-293-3211 ＵＲＬ https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/
発行機関	岡山県教育委員会
所 在 地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6 TEL086-224-2111
発行年月日	令和３年３月19日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘面積（㎡）	発掘原因
旧閑谷学校（きゅうしずたにがっこう）	岡山県備前市閑谷（おかやまけんびぜんししずたに）	332119	369	34° 47′ 49″	134° 13′ 7″	1985.09.24～11.12 1986.05.21～07.02	500	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
旧閑谷学校（きゅうしずたにがっこう）	学校	江戸時代	礎石・石垣・石列・井戸・暗渠・溝・焼土面	国産磁器・備前焼・瓦質土器・備前焼瓦・燻瓦・敷瓦・窯道具（支柱・棚板）・硯･銭貨	瓦窯跡

要　　約	閑谷学校は、寛文10年（1670）、初代岡山藩主池田光政が、全国的にも例をみない庶民の子弟教育のために創設した学校である。その校地の西半を占める学房地区は、明治維新以降も長らく学校の校地として利用されてきた。昭和40年（1965）には高等学校校舎を利用して岡山県青少年教育センター閑谷学校が開設されたが、同センターの整備計画に関して、旧制中学校の建物や江戸期の学房の様子を明らかにすべく、昭和60・61年度（1985・1986）にトレンチ10か所を設定して、埋蔵文化財確認調査を実施した。 調査の結果、旧制中学校の校舎基礎やその下層において礎石、石垣、石列、井戸、暗渠、溝、焼土面を確認し、国産磁器、備前焼、瓦質土器、瓦、敷瓦、窯道具、炉壁片などの遺物がコンテナ78箱分出土した。とりわけ、炉壁片や窯道具（支柱・棚板）のほか、焼け歪みや溶着した備前焼瓦も多く出土したことから聖廟や芳烈祠の備前焼瓦を焼成した瓦窯の存在が明らかとなった。トレンチ調査 のため窯の規模や構造の詳細は不明であるが、トレンチ９で確認した焼土面は、傾斜も平坦に近く、備前焼瓦を焼成した平窯の床面と考えられる。 なお、青少年教育センターは、旧閑谷学校の隣接地に移転したことから、本調査は実施していない。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 253

特別史跡 旧閑谷学校

岡山県青少年教育センター閑谷学校
整備事業に伴う確認調査

令和３年３月19日　印刷

令和３年３月19日　発行

編集　岡山県古代吉備文化財センター
　　岡山県岡山市北区西花尻1325-3

発行　岡山県教育委員会
　　岡山県岡山市北区内山下2-4-6

印刷　サンコー印刷株式会社
　　岡山県総社市駅南1-1-5